

くは四卷なるが如し、これは五卷の本をつゞめたるものかいかど。版本も四卷にして奥にまた槐下桑門の奥書を添へたるが右五卷畫圖者を右此四卷畫圖者とし、上陽を上陽月とし、内容の不足せるところもあり、順序の違へるところもあり。而してこれを西行四季物語と名づけたるは春夏秋冬の四卷に別ちたるよりのさかしらなるべく、春夏秋冬も單に符徴のみにて、春には春の歌を集め、夏秋冬またそれよりの季の歌を集めたりといふにはあらず。この版本の奥には、寶永五戊子孟春中旬、維下書肆林正五郎開板とあり。

他の一種は版本としては前にいへるものよりも古し。この版本はいづれも西行物語と題す。正保三年の刊本は上下二卷としたりといふ。また元祿五壬申年正月吉日、洛陽書林淺見吉兵衛板とある刊本及び寶永二乙酉年三月吉日とある刊本あり、共に三卷とす、いづれも内容は同じきものなり。また續群書類從卷九百四十二には二卷としてこれを收めて、奥書に「文明十二年二月中半記之」とあり、史籍集覽のうちには西行一生涯草紙と題し六卷としたる水戸彰考館の舊藏本を收めて刊行せり。續類從本と集覽本とは大同小異にしてこの二者を版本に比

するに文辭の詳略著しく違へるところもあれど、要するにこの數種の本はそのもとを同じくするものなり。

さかき さへき
を見よ

嵯峨物語

一卷

中納言康直その子松壽を、十三歳のとき、木原刊本には本原侍從の紹介によりて、さる山寺に託して學問せさせぬ。こゝに嵯峨野の奥に閑居しける一條郎といふ者これを見そめ、やがてその戀かなはんとしけると、松壽のもとに母の使來りて、父康直大病のよしを告げて家に歸らしむ。康直間もなく失せければ、帝その功をまぼし、松壽に元服せさせて康則と改め、中納言に叙してこれを嬖寵したまふ。一條郎更に木原侍從をたのみ、康則に深き志を通じけるより、康則が一條郎の閑居に通ふことを作れり。

室町中世の作なるべし、古物語類字抄に、文明頃などに出來けむとまぼしき筆勢

のものなり、秋の夜長物語、松帆物語等をもひけり、温故堂所藏に古鈔本あり。といへり。また同書秋の夜の長物語の條に、嵯峨物語序にも、秋の夜の長物語は瞻西が道心をみだし、松帆の草子は少年の風流をそふと書けり。とあり、松帆浦物語の條にも、この書續群書類從卷五百九及び兒物語部類に收めたるが、共にこの序文を見ず。

さくらの中將

刊二卷

昔、二條中納言あさつなの子にたかみつの中將といふがありて、櫻の中將とも呼べり。ある年正月十五日の夜御講にてさまぐの遊あり、中將、故大宮大納言の姫君を見そめて深く思ひこがるゝに至る。中將の家に仕ふる阿波局中將の意をうけて、かの姫君に仕ふるすけの局を以て彼方に通ぜしに、とかくの返事なかりしかば、中將遂に姫をたばかり、その家に迎へて契をこめぬ。間もなく姫君は若君をまうく。その年八月十五夜、また禁中にて管絃の遊ありて、徳大寺中納言、二條中納言及び櫻の中將もこれに列しけるが、その儀終りし後、大納言は中納言

にその女を以て中將に娶さんことを約束し、いよくそのこと定まりて、中將も止むを得ず大納言の女のもとに通へども、たゞ大宮の姫君にのみ心傾きて、兎角大納言の女を好まず。されば中納言は大宮の姫君のあらん限は、中將の心移ることなかるべしと思ひて、中將の徳大寺殿に通ひし間に、若君を欺き奪ひ、武士をして大宮の姫君を攝津の浪花のさる尼のもとに送り置かしむ。中將は徳大寺殿より歸り來りて、姫君の行方しれぬを欺き、遂に家を出て、大宮の姫君のあとをたづぬ。天王寺に参りて、觀音に三七日の間參籠して、今一目姫君にあはせ給へと祈りしに、靈夢の告によりて難波にあることを知り、やうくたづぬ當りけるが、はや三日以前に姫君は歎のあまりに病にかゝりて死し、すけの局は墨染の姿となりてその菩提を弔ひをれば、中將はこの世を棄て、佛門に入る。京都にて父中納言は中將の行方知れざるに驚き、人をしてこれを捜さしめ、その人この處まで尋ね來りたるを、中將は逐ひ返す。中納言もこれを聞きて、今更後悔やる、方なく、北の方諸共に出家せらる。かくて中將は高野山に登りて、姫君の菩提を弔ひ、奥院にて四十二歳にて死し、すけの局は六十三歳にて往生の素懷を遂げぬ。

のために中將の行方を捜さんとて、諸國を尋ね求めけるが、五年を経れども知れずして歸りぬ。姫君は男子を生みて、今年既に五歳となる。別當今は是非なしとて、奈良の大佛に詣て、一七日參籠して、中將の行方を知らせたまへと祈りしに、靈驗やありけん、中將もこの處に來りて出て遇ひ、喜びて互に語りあふ際、姫君が俄に死去せし報あり。中將倉皇常磐に至り、わが兒をつれて共に姫君の墓に詣づ。別當の祈禱によりて、姫君も蘇生し、中將かねたかをして父大臣のもとにこのことを報ず。大臣、中將の無事なる由を聞き、喜びて常磐に來り、中將夫妻等うちつれて都に歸る。帝この事を聞き、哀を催され、若君に皇位を譲らせたまふ。中將は父の職を受けて大臣となり、姫君は北政所にすわり、別當は天台座主となる。姫君は一たび死して冥途の有様を見ながら、黒髪を身に添ふべきにあらずとて、間もなく剃髮せしかば、中將も共に出家し、大臣夫婦もこれを見てまた姿をかへ、いづれも小倉山の前の帝の住みたまふ處に至りて仕へ、めてたく往生の素懷を遂げたることにて終を結ぶ。

この書大體は古本狹衣の飛鳥井君の一條を取りて、これを誇張せるものなり。

さて右にいへるは古寫本によりて大意をしるせるなり。別に刊本二卷あれども、文章全く異にして、欽明天皇の御時とし、狹衣中將の父を内大臣さんぶしやうとし、清水寺の僧の名をも三位阿闍梨とし、兵衛大夫を兵部大夫とす、また大臣が中將のためによしたかの大將の女を迎へんとすることあり、中將、姫君等が出家のことなきなど異なる所多し。蓋し寫本よりは後の作ならんか。刊本の末に、
寛文五乙巳年七月吉日、松會開板とあり。

さゝやき竹

三本

延齡涉獵書目にいふ、人皇六十二代の帝の御宇、天下大に旱す。帝これをうれひ給ひて、大内にてをんかの舞をなし給ふ、天人天降りて笙をふく。その頃二條萬里小路に左衛門尉といふ者あり、鞍馬の毘沙門天に祈りて一人の女子をまうく。この女いみじき美人なりけるを、時の關白見初めたまひ、戀ひ慕ひたまふといへども、誰人の女なる事をしらず、安倍のなかのりが占ひ申により、毘沙門天に祈誓したまふ。鞍馬のさいくはうぼ^坊うの僧正祈禱の事にて左衛門尉が宿に往きた

りしに、かの女を見て戀慕し、さゝやき竹を以て左衛門夫婦に毘沙門の告げなりと欺き、かの女を鞍馬に奉らしむ。使者の者に命じ、長櫃に入れてこれを贈る。使者道にて酒に酔ひふしたる時、關白殿通りかゝりたまひ、櫃を開て女を得、かほりに野飼の牛を入れ置き給ふ。使者これを知らず、さいくはうぼうへもちゆく。この事にて鞍馬の山に騷がしかりしこと、さいくはうぼうは天狗につかまれ死す、その靈天狗となり、僧正谷の由來是なり、女は關白にかしづき、父子共にめでたく榮えしことをしるす。とあり、余未だこの書を見ず。

さゞれ石

刊一卷

成務天皇に三十八人の皇男女ありしが、季なるをさゞれ石の宮といひけり。この宮十四歳の時、攝政殿の北政所となりしが、東方淨瑠璃世界に生れんことを願ひて、藥師如來に祈りけるに、ある夕に金毘羅大將、藥師如來の使として降り、瑠璃壺に不老不死の藥を納れたるを授く。此壺に、君が世は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて、昔のむすまで。と記したり、これ藥師如來の御詠歌なるべし

といへり。これより名をいはほの宮と改めらる。この藥を嘗め給ひし後、清寧天皇の御代に至るまで、いつも若く美しき姿にて榮え給ひしが、ある夜、藥師眞言を念じ、あはしける時、藥師如來來りて宮を導きて淨瑠璃世界につれ行き給ふことを記し、藥師如來を信ずべき由を勧めたる物語なり。御伽草子後篇に收む。

よ く き
本書外題は「さかさ」とあれども書籍目録に「よき」とあれば即ち佐伯なり。

刊一本

豊前の國うだの佐伯一族のために所領を横領せられ、上洛して訴訟に及び、年月を経けれども甲斐なきを憂へ、清水に参りて祈りけるに、はからずも美しき女房を見そめ、遂にこれと契を結ぶ。然るに訴訟はめでたくすみければ、佐伯は本國に下らむとし、やがて迎を参らすべしと諭し慰め、かの女房に別を惜しみて歸國しけるが、いつしか三年もたちたれども迎をもちさず。女房は清水に参りて祈りけるが、あるとき行脚の僧をたのみて、佐伯のもとに音信のふみを遣はしける。たま／＼佐伯鷹狩に出てし留守にその妻この文をうけ取りて讀み、その優美なるに感じ、夫佐伯の歸れるを待ちて、京なる妹を迎ふるに託して迎の使を遣り、か

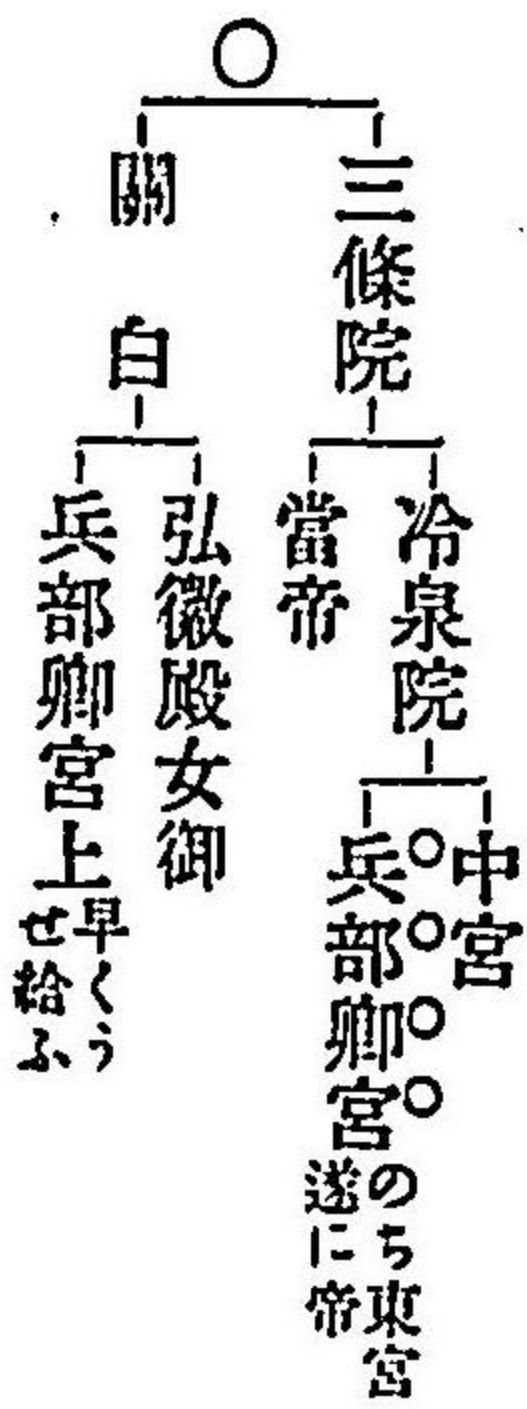
さゞれ石 さへき 小夜ころも

一八七

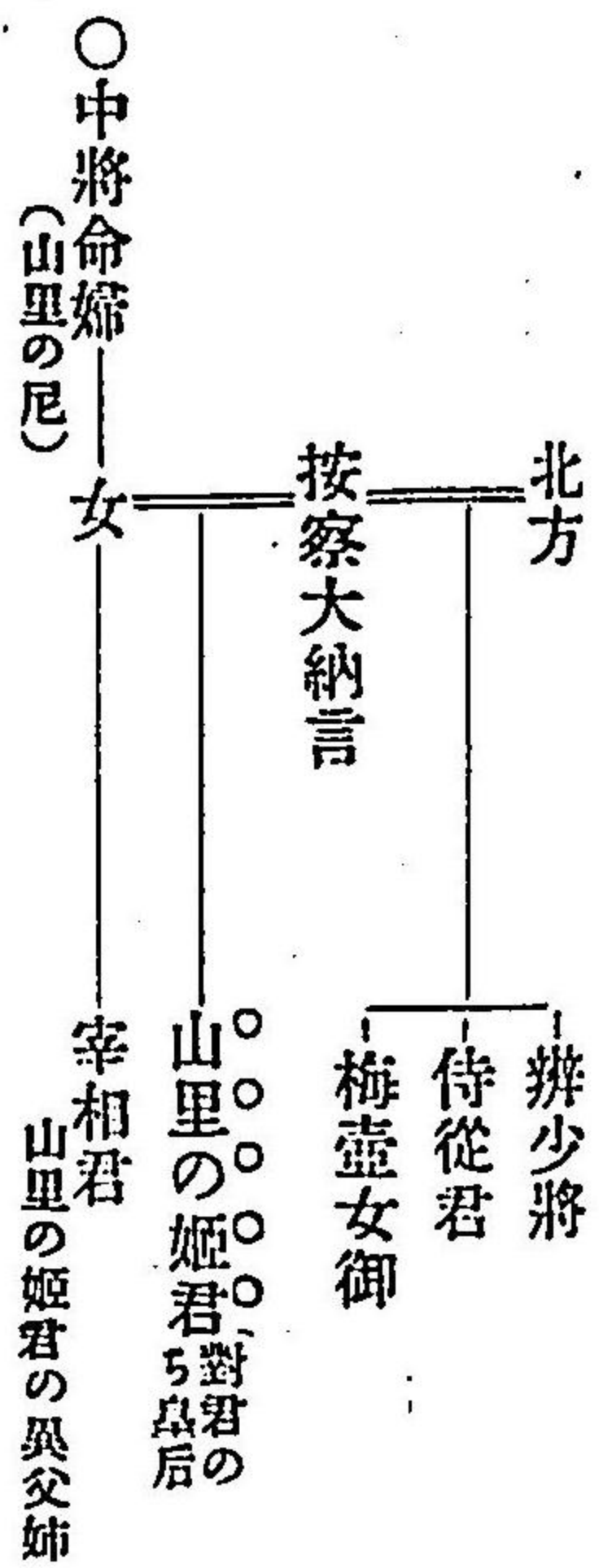
の女房を迎へぬ。京の女房は喜びて使と共に佐伯の館に着きけるを、佐伯の妻見て、かほど美しき人をさへいひ出す事なし、まして己が事などはながくの在京の中にも思ひ出し、ことなからん、かゝるふとくしんなる男をたのみし吾こそ浅ましけれとて、髪を切りて出家しけり。京の女房も、高きも卑しきも女は妬み深き習なるに、かゝるやさしき舉動こそやさしけれと感じ、己も髪を切りて尼となり、同じ庵室に籠りけり。佐伯は二人の女房に捨てられて、これもまた落髪し、高野山に登りけり。これ清水観音の方便にて、三人ともに往生の素懐を遂げ、彌陀、観音、勢至とあらはれける物語なり。お伽草子後編に收む。

小夜ごろも

小夜ごろも略系圖



寫三卷



時の帝の御兄冷泉院の御子に兵部卿宮といふありけり。按察大納言の遺胤なる姫君の、雲林寺あたりにある祖母の尼の許に忍びあるよしをきいて、竊にあくがれたまひ、宰相君といふ宮仕の女房が姫君の異父の姉なれば、これを媒としていひより、やがて深き契を結びて、山里に通ひたまふ。御父冷泉院、母大宮院は宮の日々家を空しうして通はるゝに心をいたし、宮を諭して關白三條院の二の君を娶らせたまふ。兵部卿宮心のまゝにならざるを救きて、

こゝろにもあらずへだつるさよごろも、
かさねし袖のかわくまぞなき。

さよごろもうつればかはるならひとて、

小夜ごろも

一八九

うき身にしらる袖のなみだを。
としふともかはらじものを、さよごろも。

ふかくもおもひそめし色をば。

など山里の姫君のもとに贈りたまふ。姫の返事に、

ふかゝりき色とはいかゞたのむべき、

浅くもそめしきよのころもを。

とあり、本書の題はこゝにおかれるなり。宮の關白殿の婿がねとなりたまひしこと、山里に濡れきこえて、姫君は只管歎に沈む。宮も艶書などこそ絶えず通はせらるれど、忍び通ひ給ふことはうち絶えてなし。さりとして關白殿の姫君になじみたまふにもあらざれば、母大宮院も思ふに違ひて、按じ煩ひ給ふ。まして關白殿は宮の疎々しきを本意なく思ひ給へど、なほかく宮の稀々にも通ひたまふをせめてもの榮として、懇にかしづきけり。

山里の姫君の父按察大納言は北の方腹の女を女御に入れんとて忙はしく、久しく音づれたまはざりしが、やう／＼かの山里を尋ね給ひ、いつまでかゝる里にくもいたはしとて、己が家に呼び迎へらる。北の方は己が女を入内せさするにつきて、この姫君を母代となして添へ給ふ。入内の姫君は梅壺といひ、心ならずも母代としてつき添ひし姫君は對君たいのきみといふ。帝梅壺に通ひたまふ折對君を見そめられ、時々いひよりたまへど、つれなく柳に風とあひしらふ。いつしかこのこと世に聞えしより、北の方安からずおもひ、己が乳母子の民部丞といふにいひ含め、ある夜山里の尼の病なりとて迎の車を禁中に送りて對君をすかし出し、これをあしこめけり。さるに民部丞の妻は情深きものにて、懇にかしづき、わが命にかけても逃しやらんとし、民部丞はまた戀の心を起し、妻を追ひ出して對君をあのがものにせばやとたくむ。大納言、山里の尼などは對君の行方を搜れど手がゝりなし、中にも宮はこのことを思はせたまふあまりに、關白殿の姫君にはとかく疎々しければ、姫は思ひ煩ひて、病を生じ、はかなく失せたまひぬ。民部丞の妻は對君をなぐさめんとて物語するうち、己が宰相君の許につかはるる中務の姪なる由わかりければ、對君の書を宰相のもとに届け、これより對君の在處も知れ、大納言は方違によそへて民部丞の家に至り、これを迎へとりて山里

の厄に送りぬ。北の方は曲事露れて逃れ出て、後には幽かに世を送り、民部丞も法師になりぬ。兵部卿宮は愛する姫君の山里に歸れるよしを宰相君よりきいて、忍び來り、強ひて伴ひて己が宮につれ歸る。冷泉院は對君の行方知れざる後は、憂に沈みて禪讓の志を起したまひ、東宮に位を讓りて兵部卿宮を儲君としたまふ。新帝幾ばくもなく重病にかゝりて脱履し、剃髮したまふ。東宮踐祚あり、御息所たりし山里の姫君は皇后となる。これよりさき既に若宮もありしが、後いよいよ多くの御子をまうけらる。大納言は左大臣を經、關白となりて榮え、宰相君は北政所となり、民部丞の妻も來りて仕へ、やがて命婦となる。末に、たゞみたまはん人々おぼしやり給へ、かまへて人のために情あるべきこと、みえたりはらくろからん心か、はしくろからん心か、もちたる人はすすまてもこの世も後の世もいかてかよがるべき、繼母あさましきありさまもひやるべし。かくめのまへにかはりゆく世のならひこそ、あはれに侍れ、人のめてたきためしには山ざとの姫君にまさる人あらしとみえたり、み給はん人々も思ひやり給ふべきなり。」とあり。室町時代の作か。刊本なし。藤岡作太郎氏所藏の本は阿波國文庫の印あり。

刊本に戀の文を集めたる同名の書あり、内容は全く異なり。

さよひめ

寫一本

延齡涉獵書目に、大和國壺阪といふ所に、まつら長者といふ人もとは家富みさかえたりしが、後家衰へて長者も死し、娘さよひめ母につかへて孝なりしが、父の法會入料のために身を賣りて、瀬田の橋にて大蛇の人身御供にそなへられしかども、法華經の功力にて命を助かり、大蛇も成佛するを悦び、金千兩をさよひめにあたふ。姫再び家榮えて母をよく養ふ。時の帝此事をきこしめし、あら人神といはひたまふ、即ち近江國竹生島の辨財天と申奉るよしをしるしたる物語なり。按ずるに竹生島の本地といへるは此書にや、猶考べし。とあり、余未だこの書を見ず。結構あめわかみこ物語及び法妙童子に似たるところあり。

猿源氏草子

刊二卷一本

伊勢の國阿漕浦に鯛賣あり、もとは海老名六郎左衛門といふ關東侍なりしが、妻

に後れ、一人の娘をもちたりけるが、この娘に日頃めしつかへる猿源氏といふものを婿として業を譲り、都に上り、剃髪して海老名の阿彌陀佛と稱しけり。猿源氏も都にのぼりて、洛中を、伊勢の國に阿漕浦の猿源氏が鯛かうゑいと呼ばりて賣りあるさける間、皆面白き鯛賣と思へり。然るにある日猿源氏五條の橋にて螢火といふ遊女を見そめしよりあこがれ出し、商賣も身にしまずして、やがて病となりぬ。な阿彌陀の病を慰め、遊女は大名高家の外へは出てざればとて、猿源氏を關東の宇都宮彈正が上洛のさまにいでたゝせて賺し欺きければ、螢火も猿源氏が宿を音づれぬ。猿源氏が寐言に、阿漕浦の猿源氏が鯛かうゑいといひしより、螢火さては鯛賣ならんと疑ひ、その寐言につきて問ひ詰るを、猿源氏將軍家にて己がために連歌を催されしことにかこつけて、句を思案せしことより、古人の例などひきていひぬければ、螢火其歌道に志深きに感じ、疑をはらしてこれと契り、遂につれ立ち阿漕に下りて、子孫繁昌しける物語なり。末に歌の徳を説き、人ごとに學びたまふは歌の道なるべし。と結びたり。室町中世以後の作なるべし。末に、松會開板とあり、萬治頃の刊本にや。お伽草子前編に收む。

さんげ物語 七人比丘尼を見よ

三人法師物語

刊一本

紀州高野山にて遁世の法師等集ひて、各懺悔話する物語なり。一人の僧まづ語り出でけるは、某はもと足利尊氏の近習かすやの四郎左衛門といへり。ある時二條殿へ御成のお供申し、その家の女房尾上といふを見そめしより戀の病となる。主公これを聞きて、わが友佐々木三郎左衛門をして周旋せしめ給ひしによりて、遂に尾上と契を結び、通ひつ通はれつの中らひとなりぬ。某日頃北野の天神を信じ、月々の參籠を缺かず、この女房のことより怠りがちなりしかば、其年十月二十四日の夜懈怠の懺悔をも申さんとて、社頭に至り、念誦して深更に至る。偶、傍に人ありて、ざる處に十七八ばかりの女房の殺害せられて、衣裳までも剝ぎ取られし由を語る。某胸うち騒ぎて、とる物もとりあへずその場に至れば、殺害せられたるは正しくかの尾上にて、黒髪まで切りとられたり。こゝに菩提心を

起し、髻を切りてこの山に登り、二十年あまり行ひすますなりと語る。

一人のあら／＼しき顔したる僧某その次をうけん、その女房はわが殺害せるなりとて語りけるは、某は三條のあら五郎とて、幼き時より盗を業とし、人を殺して三百八十餘人に及びたりしが、その女房を殺しける頃は、剽盜竊盜さま／＼になせども、兎角獲物なきため、今は妻子殆ど飢うるに至りたれば、今夜こそはとて、さる處に待ち設けおたるに、折しも通りかゝりしはその女房なるを、脅して情なくも着衣を剝ぎ取り、やがて肌小袖をも奪はんとせしに、女房肌衣をぬぐは女の恥なれば、むしろ命をも取れかしといふに、それこそ好む所と一刀に刺し殺し、幸よしと家に走り歸りて、獲物を見せたるに、妻は喜ぶこと限なく、これ程の装束着たる女房、年は何歳ばかりと問ふ。十八九の人なりと答ふるを聞きもあへず、外へかけ出て、やがて歸りて、いかに御身は大名にて候ふものかな、同じく罪造るものならば、何とて少しも徳のあるやうにはせざる、わらは行きて髪を切りて取りたり、鬘にひねるべしとて、躍り上りて喜ぶ。さすがに無殘の某もこのさまを見て、興をさまし、いかてかゝるあさましき心の女に契を結びけんと思ふにつけて、か

の女房を殺害せしことを悔み、一念發起し、一條北小路の玄惠法印の弟子となりて、げんちくと呼ばれ、この山に登りしなりと語りて、さてかすやの入道に向ひ、さぞ無念におぼさん、この身を寸断したまふとも恨なしといふに、入道も今は互にこの姿となれるに、何の恨かあらんかの女房こそ菩薩の化現にて、無縁の我等を濟度したまひしなれとて、墨染の袖を濡す。

さて今一人の老僧の發心の由來を問ふに、老僧語るやう、某は篠崎六郎左衛門とて、河内の楠木家の譜代の重臣にして、父掃部助は正成討死のときに一所に腹を切りぬ。某は正行討死の時に従ひて深手を負ひしものなり。今の楠木正儀が足利家に降参することを諫めしが、聽かれざれば、終に妻子をふりすて、遁世し、關東北國を回歴し、それより西國に向ふ途に河内國を過ぎけるにより、故郷篠崎の地をも見んとたち寄りしに、舊邸は見る影もなく荒れはてたり。田を耕す老人に聞けば、妻はその後悲嘆にくれて病に臥し、三日以前に死し、跡に残りし幼き二人の兒も哀悼やるかたなく、日々茶毘所に詣づる山を聞き、松の影なる茶毘所に至りて見れば、幼き二人の兒はつくばひながら骨を拾ひをりしが、父とは知ら

で、かゝる折に僧の通らせたることの嬉しさよとて、讀經を請ふ。恩愛の情胸に迫り、父子の名乗をせんと思ふ念は千度百度兆せども、かくては愛執の羂に繋がれて、多年の心勞こゝに泡と消え、竟に佛道に入りがたからんと心に心を制し、外ながら慰め諭して別れしが、終に思ひ立ちて高野山に登り、奥院の傍に草庵を結び、念佛三昧にくらしゝなりと語る。終に、いろこそかはれ、いづれも思ひよらざるだらうしんなり、あながちにあくをもさらふべからず、せんのうらこひをもさらふべからず、心のほそきよりおこりゆよの一大事は心ほそく候はてはいかて御入候べき、かゝることはりもみな心をしらしめ、ぶつだらうならしめ給はん、はうべんなるとぞはんべりき」と結べり。

この書室町時代の中頃になりしものか、南山巡狩録卷十三に、高野山三人法師物語といふ古き雙紙あり、おもふに室町の末に書し物と覺ゆ、木下順庵なども古き物語ならんといひ、跡部光海翁が楠正儀が降参考にも引用せり。云々とあり。續群書類從卷九百五十五に三人懺悔冊子と題して載せたり。また東京帝國大學圖書館本鈴木叢書卷二十四にこれを收む、その上卷の末に、明治四年辛未正月以

紀伊國津田五位殿楠公冑名正臣本寫了鈴木莊司穗積眞年」とあり。時慶卿記慶長十年三月七日の條に三人僧とあるは此物語ならんか。刊本に丹表紙、小き文字、小形の本あり、「西村屋新板」とあり。また明治十六年八月刊行の史籍集覽に收めて刊行せられたり。

〔志〕

時雨のえん雨やどりを見よ

時雨物語雨やどりを見よ

四國落

一本

源義經都を落ちて伊豫の河野に依らんとし、途に大物浦にて難風起り、平家の悪靈あらはる、武藏坊辨慶祈りてこれを退く。船は攝津の蘆屋浦に着さけるに、その地の人蘆屋三郎光重これを生どりにして鎌倉殿の御威に與らんとて襲ひ來

三人法師物語 時雨のえん 時雨物語 四國落 四十二の物ありそひ 一九九

る辨慶戦うてこれを殺す話なり。幸若舞草子三十六番の一にして、事がらは謠曲の船辨慶に似たり。

四十二の物あらそひ一名たけ

刊一卷

ひかし、奈良の帝東宮の御方へならせおはしましけり。折節二月中の六日の頃にて、南庭の様も面白きに、春秋の優劣いかにの論ありて、中宮の御方より、

おほかたはあらそふものとしりながら、
こゝろひとつに秋をさだめん。

とあり、これを事のはじめにして四十二の物争あるべしとて、御前にさぶらふ人顔うちあかめ争ふ。まづ上より、

月の夜と　雪のあしたと
ふる雪はつもらでかげもありあけの

月ぞくまなき冬のやまざと。

東宮の御方より、

ひがし山と　にし山と

月かげのいでつるかたもわすられて、

入かたにすむわがこゝろかな。

争なかばに院の大將一本には女も参りてまじりたまひ、さて物争はてゝいろいろに定めたるが中に、常磐大將の歌にこそまづ點はかゝりたれ。かくて御盃参り、管絃ありて上は還御なりぬとなり。

次に「このゑどの」と題を置き、つれづれのおもひのうちこしかた行末の身のありさま思ひつゞけ侍りて筆にまかせしなり。とて長歌一首、短歌廿一首をかゝり、またその次に彌生のはじめ姫君の御方例ならずして、遂に五日にうせたまひぬ。その物思はしき有様を記したるを物の中より見出でたる由かきて、長歌一首を挙げたり。これらは他の断片の攪入せるにて、四十二の物争とは關係なきものなるべし。

本書を校訂註釋せるものに山本明清の「四十二物争考證」文政元年十二月編あり、刊行せらる。明清の師岸本由豆流の跋に曰く、拾遺集に躬恒、忠岑が問答歌をのせたり、こ

の歌をもて物をあらがひしはじめにやあらん。またこの書の名とせる物あらがひといへること増基法師が熊野の紀行又は後撰集などをやよりどころとはせん。なほこれらよりくだりても歌合の判の詞にかへたる歌なども皆この姿なるべし。さればこゝろをも名をも是により彼にもとづきてとれること、いとたくみにもいとをかしくも作りなしたる書なれど、世に行はるゝことすくなく、今は印本さへ稀になりもてゆきて、しかも誤字脱文いと多かるのみかは、その末にあらぬ長歌二首と短歌廿首とをのせたるは、いつの世にかまぎれ入りたりけむ。云々、

明清は本書の成れる時代を論じて曰く、四十二の物あらそひ、一名たけくらへ本他には昔ものあらそひとのみあれど、予がこは作者時代並に詳ならず。あしはかり思ふに、南北朝の末つ方にて來にたるものなるべし。さはれ正しき證を得ざれば、さだめてはいひがたけれど、片岡寛光ぬしのもたりし本に後土御門内侍筆とあるをよもふに、文正、應仁よりおくれたるものにはあらじ。とて、次にこの書が源氏物語に據りたることよほきを説きたり。明清また本書の別本異同につい

て曰く、此書異本あまたありて、本ごとに大異同あり、また歌數もあつゝ同じからず。流布の大目錄といふものに、四十二の物諍二卷と見えたり、いかて其本を得まく思ひしに、さいはひ杏花園ぬしのもたりし活板の本あり歌數四また山崎美成ぬしの藏本に貞享二年の印本あり小本一巻歌數四十三首其外寫本八本をもて校合せり。其一本は大石千曳ぬしの本四十四首また一本は我が権園大人の本四十一首また一本は片岡寛光ぬしの本後土御門内侍筆また一本は梅塙ぬしの本白石先生四十また一本は柳亭ぬしの本三十九首外三本は予が藏本也四一首また一本は歌數四十二首、また一本はかく本ごとに詞書はいふもさら也、歌の數さへ定まらねば、いづれをかよしとし、いづれをかあしとせん。云々、編者はこゝには活字本によりて解題せり、なほ續群書類從卷九百八十のうちにも收めたり。

信田た

刊一本

平將門の子相馬殿に遺子二人あり、姉をせんじゆの姫といひ、弟を信田小太郎といふ。小太郎なほ幼なり、母御臺所せんじゆの姫を小山太郎行重ゆきしげに嫁す、時に天

曆十年なり。行重力めて外舅相馬の菩提を弔ふ、御臺所喜びて、所領常陸信田莊を半分して行重に與ふ、老臣浮島大夫これを諫むれども聽かず。行重信田の館に迎へられ、相馬譜代の臣僕皆これに出仕し、只管榮華を極む、但浮島大夫父子のみは快からずして、河内に遁れ去る。果して行重逆心を起して信田の所領を横領し、御臺所及び小太郎を逐ひ出す。母子甲斐に遁れ、更に京都に上りて愁訴せんとす。行重これを憂ひ、鹿島神宮の禰宜を脅して調伏せしめ、爲に御臺所は途中にて病死す。小太郎は人に助けられて京に上りしかど、幼少なれば愁訴をも得せず。乃ち一計を案じ、行重に降参し、間を窺うてこれを刺さんと思ひ、常陸に歸りて行重のもとに至る。行重その意を覺りてこれを逐ふ。浮島大夫途に小太郎に遇ひて河内につれ歸り、遂に兵を擧げ、戦敗れて夫妻親子六人奮闘して死し、小太郎は行重に捕はる。行重ちはら大夫に命じて夜これを海に沈めしめんとす。大夫は相馬譜代の家人なれば、舊義を重んじて小太郎を助く、行重またこれを覺りて大夫を責め殺す。小太郎更に京に向ひ、近江にて入買の手に誘拐せられ、京の町に賣り渡され、それより四國、西國を經、北陸までも賣り回され、種々の

難儀にあひ、終に奥州率土、濱の鹽商人に買ひ取らる。その地の領主しほ地の莊司小太郎の人品高きを見て己が養子として元服せしむ。偶、奥州の國司この地に下り、小太郎の素性を知り、憐みて三年間國司の職を讓る。これよりさきせんじゆの姫は弟の事に坐して小山のもとを逐はれ、尼となりて小太郎の行方を尋ね、四國、西國を巡りて奥州に下り、姉弟首尾よく邂逅す。やがて小太郎奥州より三千餘騎の兵を遣はして行重を伐たしむ、行重これを聞いて逃れ出てしが、途にて前の奥州の國司に捕へられ、小太郎の手に渡り、武藏のつまこひの野にて刑せらる。かくて小太郎上洛し、關白殿下に謁し、坂東八國を賜はり、信田の河内に御所を築きて、目出たく榮ゆることを作る。

幸若舞草子三十六番の一なり。廣益俗説辨卷十に、今昔物語に將門が子良門其子藏念とあり、大系圖發心集に將門が女子如藏尼が事あれども小太郎が事は見えず、疑ふらくは鎌倉管領持氏の遺孤成氏が父兄の仇なりとて上杉憲忠を誅せしことなどを作りかへたるものならんとやうに論じたり、これも強ちに信じがたけれど、序なればその大意だけを引きおくなり。

七人比丘尼

三 卷

信濃國せき川に一人の尼あり、湯屋を建て、貴賤となく往來の人に湯攝待を始めけり。善光寺まゐりの尼一人この湯屋に泊り、その志を聞き、これを助けんことを求め、兩人の尼或は水を汲み、或は薪を採りて、共にぞはたらきける。主の尼を古阿彌陀佛、後に來りし尼を今阿彌陀佛といへり。時しも長月二十日餘のことなりしが、四五人の比丘尼この湯屋に宿り、秋の夜の長さに主客一座となりて、懺悔物語をなす、その話すべて七條大略次の如し。

(上) 若ら菊の事 三十歳許の尼云ふ、妾はもと丹波國遠山修理の娘なりしが、父は一歳都にて六波羅殿の軍にうちもられ、國々を流浪して、遂に貧窶に堪へず、妾を東の洞院の遊女に賣りぬ。妾はうき川竹の身となりて、白菊と呼ばれしが、帥のあきたゞといふ男に馴れ、借老の契をこめぬ。あきたゞやみ難き要ありて、田舎へ下りし後、美濃國の守護代の子に土岐金吾としあきといふ者に思はれ、つれられて美濃に下り、人に羨まるゝまでに愛せられしが、なほあきたゞを忘る

ること能はず。あきたゞは田舎より上り、妾のことをたづねて、失望いふばかりなし。もとわがめしつかひたる童に介の局といふものありて、都に留まり居たりしが、これを見て哀に思ひ、あきたゞに文をかゝせ、美濃にもち下りて妾にわたりけり。これを見るに、積る思の程こま／＼としたゝめて、

あづま路のみのなる花に契るとも、

なれし老木のかげな忘れそ。

とあり。妾悲歎やるかたなく、泣き洗みてありけるを、としあき見て不審に思ひ、仔細を問ふに隠すによしなく、かの文をとり出して見せぬ。としあきこれを見て、

行きて見よ、都の花のちらぬまに、

あづまの春はともかくにも。

とよみて、俄に妾を都に上す。妾あきたゞの宿に至るに、あきたゞとしあきの義に感じて會はず。さばれあきたゞの心は埋火の消えやらぬが如くにして、これが爲に煩悶して、病みて死す。されば妾は遂に佛門に入りて尼となれりとなん。

左京の御臺の事、四十歳に近き尼のいふ、妾もそと京都一條のものなるが夫婦の間に一人の男の子あり、容貌美麗に賢さうまれにて、夫婦の愛執一方ならず。四歳の時父鶴を食はせんとて、手づから料理せしに、俎板のそばにこの兒遊び居しが、庖丁の柄ぬけ、刃飛びてその胸に立ちたり。父はもとより妾も驚きて介抱に手を盡したれど、名醫の匙もその效なく、遂にこれがために死す。父も喪心して胸を刺して死す。妾も二人の跡を追うて消えも果てばやと思ひしが、ある人のすゝめに任せ、髪を切りて佛門に入り、夫や子のなき跡を弔ひ侍りと語れり。花かづらの事、四十餘になりける尼のみづからはもと京都のものにて、北面の某のりゆきの娘花かづらといふ者なりとて、語るを聞くに、遠江國の住人奥山といふ武士に契りしが、奥山の主人筑紫探題になりて鎮西に下り、奥山もまた従はざるべからざるこゝとなれり。比翼連理の夢俄に醒めて、仕の身の習、武士の妻といふ世の義理に迫られて、涙ながらに袂を別ち、筑紫の地鎮まらんには迎を立つべしと約して、奥山は遂に西に向ひて下れり。花かづらは唯風の便を待ちに待ちぬたるに、翌年の秋家の召仕豊田三郎といふもの來りて、任地未だ鎮靜に歸

せざれども、主人朝暮の思切に、吾を迎にたてられたりといふ。花かづら歡きはまりなく、三郎と共に筑紫に下れり。まづぎふといふ地に着きて、宿の主人の語るをきけば、味方度々の合戦に敵を追ひ拂うて、背振山に城郭を構へてこれに據りしに、敵大軍を催して攻め寄せ、大將軍も昨日城郭を出て立ちたまへり、今日明日にも矢合あらんといふ。花かづら胸うち騒ぎ、とにかく豊田を遣はして奥山のもとに、これまで下れる由を通ぜしむ。日を経ること三日、豊田、奥山の遺骸を乗輿にのせ、慨然として歸りていふ、奥山殿にかの文をとゞけしかば、喜悅斜ならざりしに、間もなく敵の大兵攻め來りて合戦に及び、奥山殿は奮戦して、終に松浦殿の陣にて討死したまひぬと。花かづらはなく／＼剃髪して、佛門に入り、それより十七年間回國する由を語る。

(中)兵部の御かたの事、五十に傾きたる尼の話に、この尼は夫ある身ながら無常を感じ、心深くして、遁世の志休まず、或は神佛に祈請し、或は髪をも梳らず、顔をも拭はず、唯夫婦愛慾の絆を断たんことをのみ謀りけり。ある日また北野に夫の心を翻さんことを祈り、途中獨體を拾ひ歸りて、その夜これを枕もとに置き、夫

の手をとりてこれを搜らしめ、また己が顔を撫てしめて、現身と鬻體と幾許か遠ふ例へば絹を以て包めると包まざるとの差あるのみ、ゆめ我にな執心せられ、如何に夫婦の語らひ深くとも、いくほどもなき契ならん、二世とはかねて定められたれども、來世は必ず蓮座を同じうせんことのいかでか知らるべき。哀別離苦の理、會者定離の習速に菩提心を起したまへと、終夜かき口説く。男木阿彌の物語もとの木阿彌の話ありをなして、これを諭せど、女の志固くして翻すべきよしなく、男も自ら悟りてその場に鬢を切り、家を出て、行方を知らず。女もひきつゞきて髮剃り落して本意をとげ、廻國修業に出てたるなりといふ。

さく井殿御臺 年老いたる尼云ふ、妾は阿波國の者なり、年比菊井右近といふ者に契をこめしに、右近は都へ上りぬ。妾その歸國を待ちこがれしに、三年程過ぎて歸り來れり。されど夫の様子何となう怪しむべきものありしが、唯旅中心にすまざることもありしかと、覺束なくも二三月を過ぎしに、人の噂に、右近は京より若く美しき女を連れ來りて隠しおくよしを耳にせり。いかにせばやと嫉妬の念やる方なく、一旦はかの女をせめさいなまんとまで思ひしが、更に思ひ返し

て、妾歳三十を過ぎて行末の頼幾許もなし、世の中にある習なれば、此方をだに疎む心なくばと、思ひ忍びしに、夫は日を経るに従ひて、かの女と親しみ深く、妾を疎んずるばかりなれば、今は胸の焰は燃えに燃え、背に鱗を生じ、額にふくれあがりたるもの二ついで來たるは角や生ずるやらん。たまくとある行脚の僧の家に來り宿りしに、憎きものを殺す法やあると問ふ。僧つくくと妾を見て、念々悉く忘却せしめ、本性本來の妙相に復歸せしむる法を教ふ。妾これに従うて行住塵臥専念工夫せしかば、遂に憎惡の邪念全く霽れ、胸の中ひろくととなり、蛇躰あとなく消えて、もとの姿となる。やがてこの僧の弟子となりて、佛門に入りしとなり。

(下)三池殿の尼の事、主人の尼語りけるは、妾はもと筑後國の住人三池殿按ずるに三池郡三池に住せし森樹にて、中原親能の子孫なり。の北の方に仕へしものなりしが、三池殿京に訴訟のことありて上りし後、年月久しくたちても音沙汰なかりしかば、北の方の歎大方ならず。妾北の方にすゝめて、その子ふぢわか丸を携へ、自らつき従ひて、はるく京に上れば、既に三池殿は訴訟に勝ち、越後の栖すし吉し岡がの附近長といふところを賜なり。

はりて其處に下りし由なり。よりて更に越後に下り、三條につきて、宿の主人をして文をもたせて三池殿に至らしむ。たま／＼三池殿不在にて、一人の女房その文を受けとりぬ。この女房の心に、これかねてさく國に残し、妻子ならんと思ひて、俄に惡念起り、宿の主人を厚くもてなし、これを失はんことをたのみ。主人その謀を承け、三池殿の意なりとて、つれなく北の方等を追ひ出す。北の方は悲歎の餘、大渡にて入水してうせたまひぬ。若君も妾も屍にとりつきて歎きける折、三池殿船遊してこゝを過ぎ、端なく父子の對面あり、かの女房と宿の主人との惡行もあらはれたり。三池殿こゝにふぢわか丸に後を譲り、遁世して行方知らずなりしかば、妾も剃髮し、まづ善光寺に詣りて、二十年の難行苦行を經、此處に湯をわかし、功德を衆人にわかちて、亡主の後を弔ふよしを語る。

華山院の姫君の事 然るに今阿彌陀佛は、いづれも懺悔淺薄なりと嘲り笑ひ、懺悔に乏の懺悔りの懺悔あることを説き、延いて煩惱即菩提に及びて、此庵を立ち去りぬ。後にこの尼の素性をたづねしに、華山院家の息女にて、容貌わきてすぐれたれば、早く入内のことに定まりぬしに、十六歳の春、御室御所のこの家に來り

て花見ありし時、花わかといふうつくしき兒つき従ひけるが、相見けるより彼此互に思に沈み、終にわりなき中となりけり。いつしか世の噂高くなりければ、乳母の女房を従へ、花わかと共に都を落ちて、難波の浦に至りけるに、宿の主人姫君を見て心動き、かの兒をたばかり誘ひ出して海に沈め、姫君に迫りしかば、姫君これを刺し殺し、終に尼となりて、はかなくなりし人の跡を弔ひ、諸國を修行し、この湯屋にも來りて年を送りしなりといふ。さて終に、かゝる一大事をば、いかてかゑんをふるべきと、ぶつ菩薩の御あはれみにて、みな／＼あらしき風のをと迄も、人あしなど、あやしくおもひ給ふ人々をかくうさめをみせ、ぼだいしんをまこさせたまひし事、いよくありがたくぞ侍れ。など、結びたり。

刊本奥書に、寛永十二年正月吉日、杉田勘兵衛板之とあり。著作の年代刊行の時代と相距らざるべし。刊行別本には、さんげ物語と題して末に、天和二年辛戌五月吉祥日、萬屋庄兵衛板とあり。寶永三年刊行の新增書籍目録には、一名、女さんげ物語とあり。

靜

二二四
刊二卷

梶原景時鎌倉より京に上り、義經のふもひもの靜御前を捕へんとて、賞をかけてこれを索めけり。靜の母磯禪師の召使阿古屋利慾に惑ひ、景時を導きて、靜の隠れぬる深草の邊淨土寺に案内す。靜捕へられ、近きわたりの聖僧を招きて戒を受けて寺を出づ。阿古屋は賞を賜はらんと請へるに、景時その主を賣るを惡み、京中を引き廻して桂川に沈む。かくて靜は鎌倉に送られて、頼朝の面前に引き出されしが、源氏六十帖を引きてわが身をかこち、頼朝をいつまで草に比す、頼朝これを憤る。靜時に懐胎す、景時その胎内を探りて、義經の胤をたやさんとするを、磯禪師頼朝の御臺所に乞うてこれを救ふ。さて靜土肥次郎實平に預けられて男子を産みければ、景時の子景季頼朝の下知を受けて、みどり兒を由井濱に投ず。尋て靜は御臺所に伊勢物語の奥義を講じ、鎌倉若宮八幡の神前に舞ひて頼朝の感賞に預り、駿河國蒲原八十餘町をうく。されどすべてこれを鎌倉中の社寺に寄進して上洛する由の物語なり。余が知人井上氏これが古寫本を有て文體を按ずるに、足利季世頃の作と覺ゆ。余が知人井上氏これが古寫本を有て

り。もと謠物にせしにや、余が所藏の刊本には句々に印を附して地と詞とを別てるが如く見ゆる所あり、また後人の曲譜をしるしたる所あり。その奥書に、明曆四年戊九月吉日、山田市郎兵衛開板とあり。孝古畫譜に、靜物語一卷飛鳥井榮雅入道女一位局書畫一筆。といへるは同じ物か、いかゞ。

忍音物語

一本

左大臣の息に四位少將あり、名をさんつねといふ、容色極めて秀麗なり。十月頃、少將嵯峨あたりの紅葉見に行きしに、小柴垣したる家にたへなる琴の音の聞ゆるにひかれて、その家に入る。この家の主人は尼にて、これと共に美しき姫の琴の主とよぼしきが住めるを見て、強ひて宿を求めて、これと契りぬ。その後引きつゞき通ひて契淺からず。遂にこれを尼もろとも乳母子なる左中辨の家に迎へす。やがて姫の腹に若君生る。父左大臣はかねて少將を左大將の婿に約束せしに、よしなき者に思ひつきぬとむづかる。かくて若君二歳となりて、はや片言まじりに物などいひ出して、いつか内へまゐるべき。と宣ふ。少將あはれ理

と思ふ。竊に姫の素性を乳母に問ふに、式部卿宮の御女に中務宮の忍びて通ひしによりて生れたるがの姫君なりと明す。その年も秋になりぬ。左大將は中將(先)の少將のかゝることを知らざるにあらざれど、今その女を入内せしめんとすれど、桐壺女御の勢ならびなければ、これがために蹴おされんも本意なかるべしとて、この中將にと思ひ入りたるなり。大臣は中將を呼びてこの旨をいひさかせて承諾せしむ、中將もとより望む所にあらされども、餘儀なくうけがふ。かくてその日定まりて、中將心ならずも大將の姫の許に至る。姫の容貌到底かの君に比すべきにあらず。かくは通ひたまひしもの、曉の鳥の音まちつけて出て、直にかの姫のもとにいたるが如きさまなり。父の殿に文を遣はさずやと促され、歌をしるして姫君に見せて、「いつはりをこそしならひけれ。」などいふ。かかるさまにて、その後もとかく通ふことを好まざれば、父の殿はこれを憂へ、かの姫との愛着の情をさかんと思ひて、若君を己が第にひき取り、姫及び尼君を事によせて、自ら去るやうに仕かく。姫君因りて尼君と親しき内侍のすけの許に便りぬ。

中將は中納言に進みしが、この時忌に籠りてこれを知らず。忌あけてかの許を訪へば、姫已にあらず、憂悶して寢食を忘るゝに至る。一日内侍のすけ帝の御くしけづりに参りける時、何かの物語に、姫の懽愛の情を語りければ、帝同情を寄せ、とくまゐらせよ。」とのたまふ。その後内侍の参内する毎に之を促したまへど、姫もとよりその意なくして應せず。因りて帝親しく内侍の家にいたりて姫を見たまひて、却つてその容色に心迷ひ、遂に戀情をよせたまひ、その憂悶の情を見て、何人のためにするかを疑ひ、更に中納言の憂悶を見て、或はこれ相關するものならんと察したまふ。されども帝の姫を慕ふ情はこれが爲に少しも消ゆることなく、しばしば姫のもとに來たまふ。ある日中納言承香殿の邊を過ぎしに、帝の聲の漏るゝに、この頃しげしげ通ひたまふ所ありとさくは、如何なる更衣のもとにやあらんと垣間見せしに、豈料らんや、日頃戀ひにこがるゝ姫ならんとは。その夜中納言は姫のもとに忍び入りて、こゝに再會の歡はあれども、帝の眷戀はいよ／＼雙方の憂悶の種子となりぬ。帝もさま／＼に御心を盡させたまへど、姫は忍び音にのみうちなかれ、中納言に知られし後は、いよ／＼すげなくあひし

らひ奉り、機もあらば髪を削りて尼とならんと欲するのみ。

中納言もこの姫君といかなる處にも落ち延びて暮さばやと思へど、然らんには父君に對する御覺もめてたからじ、若君の成人の後の出世も覺束なし、寧ろわが身一つをなきものにしてと、覺悟定めつ。やがて久々に大將の姫の許にいたりて、外ながら別を告げ、また參内して御暇乞を申し上げ、父及び若君にも名残をつけて、宮詣とたゝへて家を出て、比叡の横川に至りて、終に戒を受け佛門に歸す。初め中納言家を出づるに臨みて、姫に別を告ぐるに、何處までも隨ひ行かんといふ。中納言詐りてこれをすかしなだめて去る、姫痛恨限なし。帝は中納言と姫との關係を知りてこれを憫みたまへど、今は憚る所なく、姫に參るべき山のたまへど、姫はたゞ忍びて泣くばかりにて御返事もなければ、帝もせん方なくて、忍音内侍といはんと笑ひたまふ。その後帝の仰なほうち重なり、母の尼上も内侍も今は心折れ給へと切に勸むるに、否まん術もなく、遂に參り給ふ、承香殿の女御と聞ゆ。これまでは入道中納言の妹桐壺女御いと時めきしが、いまはこの承香殿の勢に及ぶものなく、幾許もなく若宮御誕生あり、二つにて東宮に立ち、母女御は

やがて後にたちたまふ。入道中納言の若君は東宮と一つ腹なれば、帝も御寵愛あり、累進して中將に至る。中將は父君のこと忘るゝ隙もなく、その行方求むれど、知れずして、早くも十年は過ぎ、漸く横川にありと聞きぬ。山路を別けてかすかなる庵室にゆきて對面すれば、父入道も、子ならざらん人は誰か草深き山里へ尋ね入り給ふべきとて、墨染の袖を顔にふしあてらる。中將歸りて、この事帝に奏すれば、后も聞きて泣きたまふ。后はひき續き御子生みたまひ、帝はその後東宮に御讓位あり、后も女院と仰がれたまふ。中將は中納言に進み、太政大臣の中君の許に通ひ、父入道に引きかへて、思ふ様に世をすごし、折々は横川を訪ひたりとなり。

この書月詣集、色葉集、八雲御抄等に其名見えたり。されど風葉集には、忍音よりとて三首の歌を引きたるが、一も本書になく、また文體も本書は甚だ古き様に見えず。よりにて黒川春村は、この現在の本は古の忍音ならず、眞本は傳はらざれば、其名を襲て作れりしなるべし。とて、其詞づかひをも例證し、これを文明頃などの著述なるべしといへり。(古物語類字抄同書に風葉に二首といへ)但し風葉集の

但し牟藝古雅志に載せたる十二段目録は大いに異なりて、(一)初段(二)花ぞろへ(三)外のくわげん(四)ふえのだん(五)玉藻のだん(六)ぬひものだん(七)丙のくわんげん(八)しのびのだん(九)四季のちやう(十)姿見のだん(十一)しやうぞくのだん(十二)まくら問答(十三)やまと言葉(十四)精進問答(十五)御座うつりの十五段に分てり。嬉遊笑覧^上に、此物語薬師の十二神によりて十二段とするにはあらず、平家物語十二卷に倣へる者なり。といへるもいかゞさる意を置めて十二段に分ちしや疑はし。焦尾琴に、童謡歌舞のいにしへを思ふに、明暦年中の雙紙に、登り八島、下り八島といふはやりかなる事ども十二段に分たるあり、六字南無右衛門正本と奥書し侍るこそ、數奇ものゝ名にふれたる雅なるべけれ。とあり。この頃の淨るりは大抵十二段に分ちしこと用捨箱にも見ゆ。淨瑠璃姫のことは、恨之助^上のにも、義經の思ひしは、靜御前や上るり姫と見えたり。

この書世に小野お通が著作といへるも確かならず、委しくは聲曲類纂、嬉遊笑覧を見よ。淨瑠璃のこれに始るといふ説の誤れるとは、柳亭種彦還魂紙料及び足薪翁の記にこれを辯じ、星野恒氏も史學雜誌第四編に山科言繼卿記^{元龜二年七月二十五日}

の文を引いて、その誤れるを辯じたりき。大槻如電氏はその俗曲の由來に新古二種の書あり、小野お通の書けりといふは即ち古のを改訂したる新修のものなりとの折衷説を出し、須藤求馬氏は淨瑠璃姫物語評釋を著して、この書のもとは足利の中葉頃のものにて作者は桃華老人(一條禪閣兼良)かと想像せり、いかゞにや。この書刊本は二三種あるにや。刻本の中には角倉本(嵯峨本)最も古し、大槻如電氏一卷(缺本)を藏せり、慶長の活字板なり。余が家藏の本は刊本を寫したるものと覺しく、終に、正保參年三月吉日、杉田勘兵衛尉開板としるせり。別に寛文頃の印本あるにや、祖父延齡の校正せるを見るにその旨をしるせり。また新編お伽草子下卷に收めて刊行せり。耽奇漫錄の中には淨るり十二段草子の古圖を抄寫せり。

十二類繪詞

二軸

薬師十二神將の使者十二支の鳥獸ども^{馬を右馬權助長つら、猿を猿丸太夫、蛇を巳の群書類從所收のものには龍、犬、八月十五日の良夜を卜し、うちよりて遊び、月を題に蛇、馬などそのまゝしるせり。}

して歌合を催す。かゝる所に鹿、狸を従へて來り、自ら求めて判者となり、左右の勝負を判ず。歌合すみければ、十二類のものこれをもてなして返しけり。その後もこの夜の興を忘れかね、九月十三夜の月を期して、再び歌合を催さんとて、鹿を招きけれども、鹿謙退して辭して行かず、狸先夜鹿のもてなされしさまを羨しく思ひ、自ら判者とならんとて、押しかけて行きけるに、十二類のものその振舞を惡み、散々に辱しめて追ひ返す。狸鬱憤やるかたなく、河瀬守稻荷山の古狐、熊野山の若熊、蓮臺野の狼等を塚の城に集めて軍議を凝し、夜討をかけんと計る。十二類のもの早くこれを曉りて、却つて塚の城に逆寄しければ、狸の軍大いに敗れてちり／＼に落ち失す。狸今は鬼に化けてなりとも十二類のものを苦しめんとせしに、これも犬に見顯されて如何ともすべからず。はては三井寺に至り、さる聖につきて佛門に入り、淨土の教を奉じて草庵に行ひすまし、自出たぐ大往生を遂げりと云ふ。

この書作者詳ならず。倭錦に土佐光弘の繪とし、詞書は後崇光院、伏見宮貞常とせり、光弘は嘉吉頃の人なり、後崇光院は御諱貞成と申し、康正二年八月、八十五歳

にて崩御あり。貞常親王はその御子にて、文明六年七月、五十歳にて薨せらる。さればこれを嘉吉頃のものとするも差支なし。但しまた倭錦に土佐光信十二類繪卷を畫さしこと見ゆ。余が見たる某家所藏の摸本は一卷にして、十二支繪卷と題せり、原畫は光信の筆にやと思はる。なほその畫家については廣周、行廣、正忠、光起などの説もあり、これは同物に對しての異説もあるべく、又實際に畫家の異なる繪卷もあるなるべし。柳庵庚子紀行に、三井高就通俗新八齋來十二類合戰畫三卷、畫土佐行廣、其文後崇光院諱貞成宸翰也、其文雖似游戲、以余考之、蓋以十二屬爲北朝皇胤、以狸爲南朝王孫、以比高野玉川宮焉、爲歷南山而勝北朝、獻乎後花園院、後崇光院王子諱彦仁、稱光院、崩無嗣、後小松院養爲子、立之。蓋南北二皇和親統一也、北皇以南皇爲太上皇、以南皇子爲皇子也、稱光登遐無後、南太子必須爲皇太子、然以後花園院養爲子、南皇子作亂而死矣、然則此卷成於應永、正長之間乎、想後花園院踐祚之初也矣。とあるを、考古畫譜に引きて、按るに此説或はしからん。といへり、されどかゝる寓意説は却つて穿鑿に過ぎずや。さて群書類從には、十二類歌合」としてこの繪詞上卷のみを收め、末を闕く、坊間には卷物として傳はれり。

十番切

刊一卷

建久四年五月、曾我兄弟父の仇工藤祐經をうち取ることより始め、十番切をなすこと、祐成が、仁田忠常にうたること、時宗が頼朝の御所に入りこまんとして五郎丸に捕へらるること、頼朝の前にて問答のことより、祐經の子犬坊丸のこと、いよいよ堀小次郎をして時宗をたかゞ岡に斬らしめんとせしに、和田、秩父、北條等命乞をなし、頼朝も心中に助けんと思ふ心ありしかばこれを許し、河津の本領宇佐美、くすみ、河津三、莊安塔の御教書を與ふ、助命の急使刑場に驅けつけたるに、時宗は吾獨り生きて總領を嗣ぐことを願はず、速に死につかんといひて、自ら求めて刑につくこと、頼朝悼惜して富士の裾野に兄の社、弟の社を建て、兄弟の靈を祭ることに終る。幸若舞草子三十六番の一なり。

十番の物あらそひ

この書二部に分ちて見るべし。前部は一つづけに記し、源氏簪木卷の雨夜の品定に擬して作れるものゝ如く、あるすき心ある男の立ちぎくとも知らず、若き女數多集り居て、さまざまの希望を物語るとなり。或は光源氏、頭中將、狭衣中將などの管絃舞樂を見ばやといひ、或は源氏の六條院の方々の御遊を傍にて聞かばやといひ、或は關白の北の方といはれ、男子三人、娘三人もち、一人を女御に立て、その他それ〴〵榮華の世をすぐせんといひ、或はそれはあまりつくりつけたるやうの宿世にてをかしからず、それよりも源氏が在、五中將のやうなる人に思はれて、少し都はなれたる所にすゑおかれんといふなど、凡そ十人が思ふほどのことをいひ、終に二人が、五障三障の身をいかにしても助からんとは願ひ給はて、ただ現ともなきことをのたまふこそはかなけれ。云々と評するに結ぶ。前部は發端の如く、後部は即ち本篇ともいふべし。この後部は十番にわけ、左右を分ち、おのゝまた婦人の希望をいはせて、これを判じたるものなり。左に一例を擧ぐ。

九番 左

姿、みめ並ぶ人あまたあらんは、孰れも目うつりして面白かるべし。同じ所に

隔なく交りぬて、杯めぐらして、思ひざし、思ひとりにて、あくるをもくるゝをも
しらて、小歌まじりに遊ばゞや。

右

たとへば光源氏のやうに色ごのみなる人に、紫の上の御ちぼえのごとくにて、
世にたぐひなく思はればや。

紫の色をくだけて覺ゆれども、また人あまたの中にては、めうつりせんこ
と、げにもなり、さりながらその人とさして思はぬことは、うかくしき色と
こそおもへ。

この書歌合また艶詞の體に擬して作れるものにて、近くは四十二の物争を摸し
たるなるべし。室町季世のものならんか。新編御伽草子上卷に收む。

志水冠者

木曾義高物
語を見よ

精進魚類物語 一名魚鳥平家

一本

祇園林の鐘の聲さけば諸行も無常也沙羅雙林寺の蔭の汁、盛者ひつすひしぬべ
き理をあらはす、おこれる炭も久しからず、美物を焼ば灰となる」と筆を起して平
家物語に擬し、魚鳥と蔬菜と合戦して、魚鳥遂に滅ぶることを敘す。こゝに越後
國大河郡鮎莊に鮎の大介たな長とて、凡そ北へ流るゝ川といふ川は悉く傾知して
富み榮ゆるものありけり。魚鳥元年八月一日、大介の二子ふたご鮎の太郎たろう粒實つぶね、同次郎
弼吉といふもの御祈の大番の爲上洛しけるに、折節御祈は八幡宮の放生會を執
行するによりて、精進を勤む。因りて粒實、弼吉をば遙の末座に列せしめ、美濃國
の住人大豆の御祈の子息納豆太郎糸重のみを身近く侍はしむ。粒實、弼吉憤懣
に堪へず、急に歸國して父に訴ふ。大介大いに怒りて、精進類を討ち滅し、御祈の
御内に勢を振はんとて、鯉房十連をして諸國に觸れしめ、魚類の一門を始め鳥獸
の類まで悉く催しければ、鯨の荒太郎、鯛の赤介、鱈の大内權介、さては獅子、麒麟、豺
狼助また鳳凰、鸚鵡、鴉、鴉、鴉等その勢二萬五千餘騎、それに櫻貝、蘇芳貝、板屋貝まで
來り加はりけり。この由納豆太郎の方に洩れ聞えて、太郎また精進類を催す。
餛飩、索麵を始めとして、菟蓐兵衛、酸吉、牛房長左衛門長吉、大根太郎、苜次郎、昆布大夫、

荒和布新助、椎少將、栗宰相、桃侍從等五千餘騎集り、美濃國豆津莊の要害に敵を待ちて戦ふ。かくて兩軍激戦の後、鯉の大介敗れ奔り、途中青墓の三郎常吉にうたれて死する物語なり。その間、鯛の赤介發するに臨みて、妻が敵方昆布大夫の娘なるを以て、里方に送り歸し、又六歳の子を駿河國の尼鯛のもとに託するが如きことあり。筆々滑稽を旨とし、芋頭大宮司が子父の負傷を歎きて、燠大豆咲太郎に嘲られ、酒をその面にうちかけたるに、咲太郎やがてにが／＼として酔むづかりとなると説くが如き、折ふし納豆大藁の中にひるねして有けるが、ね所見ぐるしくや思ひけん、涎垂ながらがばとちきといひ、また、栗伊賀守はか／＼しからじとやちもひけん、むき／＼にぞなりて落にけると、斂するが如き、すべて諧謔の注意を怠らず。

この物語は室町時代の作なるべし。また既に鴉鷲合戦物語の中に、山鳥某の事を記して、先年精進魚類の合戦の時打れぬとあれば、魚鳥の鴉鷲に先んじて出でたることは疑なし。一本の奥書に、右精進魚類物語一名魚鳥平家物語一卷一條禪閣兼良公御作、山科言繼卿筆とあれど、室町頃の作物を兼良公の著といふは

在來の習癖にして、果して然りや否やを知らず。本書は群書類從卷五百四、新編御伽草子下卷、及び萬物滑稽合戦記續帝國文庫に收めたり。

しやかの本地

刊三卷

釋迦の俗傳なり、挿繪なく、植字版の本なり。著作刊行の年月明かには知りがたし。

酒頭童子

刊一本

御伽草子なり。丹波國大江山に鬼住みて近國のものをさらへ行くことおぼし。中にも都に池田中納言くにたか最愛の姫を取られ、悲歎のあまり帝に奏聞しければ、帝源頼光に鬼退治を命ぜらる。頼光は定光、季武、公時、保昌を従へ、山伏の姿になりて大江山に至り、酒頭童子といふ鬼を退治して、姫を救へりといふ、その大體は俗傳に同じ。酒頭童子が己が素性を語る條に、それがしが古をかたりて聞かせ申べし、本國は越後の者、山寺そだちの兒なりしが、法師に妬あるにより、數多

の法師をさし殺し、その夜に比叡の山につき、我が住む山ぞと思ひしに、傳教といふ法師、佛たちをかたらひて、わがたつ袖とて追ひ出だす、力よばず山をいて、又此みねに住みしとき、弘法大師といふをせもの、封じてこゝを追ひいだせば、力よばぬ處に、今はさやうの法師もなし、かやうの山ににふぢやうす、今又こゝに立ち歸り、何の仔細も候はず。云々とあり。刊本一冊として行はれ、又も伽草子後篇に收む。西洞院時慶卿記慶長十四年六月十四日の條に、酒天童子ノ雙紙讀懸同十五日に、酒天童子ノ雙紙讀果とあり、同書元和七年七月廿八日及び九月十八日の條にもまた酒天童子繪のこと見ゆ、この本のことによ。

又も伽草子本のほかに酒頭童子雙紙といふ繪卷物あり。處々に轉寫せられて存すれども、大別すれば二種となるべし。一は大江山繪詞ともいひ、下總國もと香取大宮司の本最も古かるべし。詞書の筆者を或は兼好法師といひ、或は二條爲世といへど、明かならず。物語の體も伽草子本に比するに違ひたる所少からざれども、大筋においては同じことなれば、更めて梗概を述べず。今一種は伊吹山繪詞ともいひ、文章こそ違へ、記事は些細のことまで頗るも伽草子と相似たり。

但も伽本と香取本とは酒頭童子の住處を大江山としたるに、これは近江國伊吹の千丈が嶽としたるを異なりとす。これは狩野元信の畫けりといふものをもとすべし。さてこれらの時代の前後に就いては香取本最も古かるべし。黒川真頼氏は、さしつぎては、おとぎ雙紙なり、それがつぎには古法眼の畫がけりといふ本なり。増補考
古鑑證といはれたれどいかゞにや。むしろ伽本は最も新らしきものにあらじかと思はる。

廣益俗説辨卷十に、今按るに頼光酒頭童子を討事實錄に見えず、但源氏系圖に頼光誅伊吹山凶賊とあり、古今著聞集に市原野にて牛の腹にかくれ居たる鬼同丸と云者を頼光切殺せる事を載たり、是等を附會して世に傳ふるにや、又異邦に似たる事あり。とて説郭の白猿傳を引き、思ふに酒頭童子の説は此事に據て作出せるものなるべし。と入り。

新曲

刊一卷

後醍醐帝の一の宮尊良親王關白家の繪合に源氏物語のむばそくの宮の娘の繪

を見てこれに思ひこがれ給ふ。あるとき賀茂の糺の社に參詣せられける歸途、京一條にて今出川左大臣公顯の女のいつしか見し繪の人に似たるよりこれを戀ひて玉章をちくり給ひしが、女には徳大寺左大將といふ結髪の人あれば親王の意に従はず。親王儒者をして貞觀政要を講ぜさせたまひ、唐太宗劉仁基の女の他に許嫁あるを宮中に納れんとし、魏徴の諫を聽きて思ひ止まりしことを聽き、これに愧ぢて切なき心を押へたまふ。左大將これを聽き、親王の意中を察して、自ら公顯の女と絶ち、遂にこの女は親王の御息所となりぬ。然るに元弘の亂起りて、親王土佐の畑に遷されたまふに至り、右衛門府生秦武文を都にのぼせて、御息所を迎へたまふ。武文具して攝津の尼崎に至りて、渡海の便船を待ちけるに、筑紫の人松浦五郎夜武文の宿所を襲ひて御息所を奪ひ取り、船に乗せて走る。武文これを追へども及ばず、海上に自殺す。その靈阿波の鳴門にて風波を起し、松浦五郎を苦しめ、五郎怖れて御息所を小舟に移し棄て、走り、遂に漂うて溺死す。御息所は淡路の武島（むしま）に漂着し、土民に扶養せられたまふ。親王は配所に待ちあこがれ給ひしが、いつまでも武文の消息なきを見て、必定難風にあひて死せ

しならんと思ひ定めたまふ。やがて世治まりて親王歸洛し給ひ、御息所武島にいますと聞きて、これを迎へたまふことに局を結ぶ。この草子の趣向大體太平記十八卷（春宮御所御の事附に見えたるに同じ）。幸若舞草子三十六番の一なり。新曲の名によりて考ふるに、三十六番の中にも最後の作にや。三十六番の筋を見るに、その材料は皆源平若しくは鎌倉時代のはじめの事實に採りて、それより後の事實はなきに、唯この新曲のみ材料を元弘頃に取れること、恰も謠曲二百番の中に檀風あるに似たり。

尊良親王のことは、大日本史卷九十九皇子列傳、増鏡によりて、親王土佐に遷され給ふときは御息所薨ぜられて良久しき後のことなれば、事實適はずして取らず。また大日本史料には尊良親王が北條氏の全く滅びざる前に九州に逃れて、義兵を擧げたまふことを掲げ、土佐畑より直に御歸洛ありきといふの非を擧げたり。

新藏人物語

寫一卷

考古書譜に曰く、躬行川（古）云、此物語は藏人何がしが娘あやしくをみなをきらひ

て、その姿になりて、新藏人とて内に宮仕へするを、御らんじそめて、めて寵し給ふものがたりなり。此巻書畫一筆とあるは、體裁なり、元來題號なし、今姑く新藏人物語と名づく躬行所藏と。余未だこの書を見ず、とりかへばや物語に似たるところあるが如し。

考古書譜にまた曰く、書工未詳、詞今出川義視入道小白描、義視、足利義教將軍子、義政弟、初爲淨土寺門主、名義尋、寛正五年歸俗、延徳三年薨三五十。

〔す〕

雀の發心

寫一卷

山科元幹の圖畫一覽上卷に曰く、雀ノ發心一卷、書者筆者トモ後柏原院勾當内侍、江戸淺草寺内藏菴宗光四村所藏、七寸五分許ノ巻物也、昔咄ナル糊ヲ喰タル雀ナルベシ、子雀ノ無クナリタルヲ歎クヲ聞テ、諸鳥ノ訪フ所也、一々贈答ノ歌アリ、雀ノ父母遂ニ發心シテ、鼻ノ尊阿彌ノ室ニ投ジテ得度ス、剃手ハ、鶴鶴ニテグ阿彌ト云、果ハ高野山ニ登ル圖ナリ、面白キ物ナリ山崎氏民所持ト云ハ此巻子也。余いまだ

この繪巻物を見ず。風葉集に「すゝめの物語」の歌四首をあげたれど、これとあはねば、別物なるべしと、黒川春村はいへり。畫圖品類に「雀之松原一卷、勾當内侍作、雀の死たるを諸鳥のとぶらふよしをかけり、いづれの内侍にや詳ならず。」といへるは即ちこゝにいへる、雀の發心と同物なるが如く、覺ゆれど、本書を見ざれば知りがたし。

硯破

一卷

播磨書寫山の性空上人發心の由來より、その碩徳の程をしるせり。上人はもと京都の大中大夫橋善根といふ人の子にて、本院左大臣時平の孫大納言朝時の青侍となり、中太三郎といひし人なりけり。朝時の家に、先祖藤原鎌足が住吉に參詣せられし折、大明神より託宣ありて、賜はりし硯あり、重代の家寶として固く秘め、あき、唯官位昇進の際に取り出して拜むを例とす。ある時朝時大納言に陞りしより、これを取り出して拜み、そのまゝ、厨子の中にあきて、謝禮のため朝參せり。中太は年比この硯を拜みたく思ひをりしが、よき折こそあれとて、若君の十歳に

なりけるをそののかし、厨子より取り出して拜みけり。折しも朝時の還り來るに驚きあわてもとの如くに納めんとして誤つてとり落し、硯を眞二つに破りてけり。中太肝魂も動亂し、如何はせんと惑ひ悲しめるを、若君われしたりといはん、或は宥し給はん、心安く思へとて、父朝時がこれを見つけて嚴しく詮議しけるに、自ら罪を被りぬ。朝時怒に乗じ、吾子なりとて、祖先傳來の寶を破ることやあるとて、首うち斬りてけり。母北の方は子の死を歎歎き、父の酷なる仕方を悲しみ、若君の乳母と共に嵯峨の奥に草庵を構へて、若君の跡を弔ひ、また己が後世を祈り、のち遂に同じ日に二人往生の素懷を遂げぬ。朝時も妻子に別れて世をはかなみ、出家して斗籤行脚の身となり、果は筑紫の山中に草庵を結び、同じく往生の素懷を遂げぬ。さて又中太は吾ゆるゑに若君を死に至らしめたるを悲しみ、且はその菩提を弔ひ、且は己が罪を滅さんと、三十六歳にて剃髮して性空と名のる。かくて永延二年書寫山に入りて圓教寺を草創し、法華經讀誦の功力によりて六根淨を得ること、華山法皇が書寫山に幸して上人の肖像行業を寫さしめたまふこと、上人が生身の普賢を拜せんとて室の遊女を見ること等を記せり。

性空上人の傳は扶桑略記二十八卷、寛弘四年の條、元亨釋書等に見えたり。華山法皇が書寫詣のとは扶桑略記に、上人が室の遊女を見るとは古事談、江談抄等に出づ、なほ後者については石橋尙寶氏の十訓抄詳解卷上一八四頁を参照すべし。硯破の一事は他に所見なし、按ふに藤原時平の孫に朝時なく、また扶桑略記に上人が母と共に日向に下りて出家し、霧島山に籠る由見ゆれば、蓋し妄誕の説なるべし、但しこの物語は古く鎌倉時代以前よりありきと見え、黒川春村の古物語類字抄には、すゞりわり物語、色葉集卷三名無すゞりわり、八雲御抄卷一、硯破。按に此物語は古本今昔物語集卷十九第九段に收めたる物とおなじかるべし。又内藤攝津守殿藏に高さ六寸許なる巻物あり、書畫ともに筆者詳ならず、奥書に明應四年十一月日源義高とあり、……たゞし此繪卷の趣意は古本とはいさゝか異なり。」とありて、義高は足利義澄の本名にて、十七歳の時の眞蹟なりといへり。但し古川躬行は、末卷に義高とあるは書畫の落款にはあらず、所持主の名なり。」といへり。考古鬼一法眼卷上に、「こさん、まんよう、いせ物がたり、げんじ、さごろも、こひづくし、すゞりわりをはじめとして、かずのさうしをよみおぼへ」とあり。

周防の内侍

刊一本

中古右近のすけといふ女房ありき。禁中に仕へ内侍所に勤めながら、周防の國守と契りて、一人の娘を生む、これ主人公の周防の内侍なり。内侍容貌麗しく、詩歌管絃にも通じければ、帝も折につけて心を通はし給へど、竟にうけひかざりき。かくて内侍二十歳のとき、母の右近のすけ癩病にかゝりしかば、醫療に手をつくせども效なし。大和の長谷の觀音は、かゝる病を治したまふと聞き、母を伴うてこゝに詣て、七日參籠せしかど、靈驗なし、然るに内侍の宿れる家の主の女の物語に、此邊に淨土みことといふ女あり、何事も其梓にかけなばあらはれずといふことなし、これをたのみて御覽せよと告げしによりて、その神子を招きて梓にかけしに、神うつりて、こは前世に罪を作りし報なり、貴船の社へ七夜丑の時まゐりをなすならば、靈驗あるべしと告げたり。内侍京に歸りて、その告通り丑の時まゐりをなし、に満願の夜、その歸る途に糺の神老尼となりて現れ、内侍に右近の前世を示す。即ち伊勢の乞食にて、參宮の人に袖にすがりて物を乞ひ、得ぬときは惡

口せしゆゑに、憎まぬ人なかりしかど、朝夕宮に詣てし徳により、今内侍所に仕ふることとなりたれども、なほかゝる病を受けたるなり、此病を癒さんとならば、如意輪觀音を造りて如意輪の法を行ふべし、と告げたまふ。内侍喜びて示現の如くにとり行ひしかば、母の病忽ち平癒せり。そのとき造りし如意輪觀音は今なほ清水寺の奥院に安置しありて、癩病のもの祈れば靈驗ありといへり、といふことを作り。

著作年代は徳川氏の初世ならんか。余が所藏の刊本の奥に朱書あり、天保六年乙未八月廿五日夜、以東都鱗形屋板本一校了、今古園主人とあり、今古園主人は余が祖父延齡なり、さればこの刊本の外に鱗形屋にて刊行せるものあるべし。祖父が校合せるを見るに、僅に數所の差異あるのみにして、鱗形屋本の方概ね非なるが如し、序にこゝに掲げ置くべし。

家藏刊本

鱗形屋本

- 一丁〇七行 みだれかゝる
- 三丁〇四行 此君の御前生
- 同丁〇十一行 松杉の木かけに
- みだれでかゝる
- 此君の前生
- 松杉のかげに

周防の内侍 すみぞめざくら

同丁ウ十四行 ヤすらふ時に ヤすらふに
 四丁ウ四行 右近 右近の君
 同丁ウ十一行 かくるへかれて かくるひかれて
 五丁オ二行 何の御たいりを ナシ
 同丁オ十五行 七夜うしのとしまふて うしのまふて
 七丁オ七行 わびしくもなく わびしくもく
 同丁ウ十五行 神佛の御力 神佛の御身
 九丁オ十五行 によいりん観音をつくり奉り ナシ

すみぞめざくら

刊二本

吉野の八重櫻に、その邊なる芒戀慕してその意を通ぜしに、八重櫻はかねて梅の
 薫大將に馴れそめをればとて否む。宮城野の小萩芒のために八重櫻を説きて、
 芒と櫻と終に契を結ぶに至る。梅の薫大將これを聞きて恨み、いろ／＼の木を
 催して芒を焼かんとせしより、芒また種々の草を催し、京都にて草木の合戦始り、
 芒遂に戦死す。八重櫻芒の戦死を聞きて剃髪し、墨染櫻となるを作れり。
 文辭艶麗にして、戯謔を交へながら野鄙ならず、能文の士の筆ならん。題號は終
 に、かのやゑざくらは、つゐに見どりのかみをそりおとし、はなのころもをすみぞ

めの、さくらとこそはなりにけり。とある意によりて名づけたるなるべし。刊

本の奥に、承應二年二月吉日、木曾屋次郎兵衛、藤屋次郎左衛門開板とあり、目錄、

すみぞめざくらにあもひそめし事

こはぎすみきにちからをそへし事

はぎつかひの事

むめいくさをあもひたつ事

もしほぐさかせいの事

よしの山にてせいぞろへの事

うぢちやかつせんの事

ちやつばかせいの事

京わらびどもはなみの事

(以上刊本上巻にあり)

なには津のあしせんぢんの事

あひまつたいしやうの事

せうくさくいころされし事

すみぞめざくら 住吉物語

せいわうぼもゝをいられし事

花くらまぢちの事

くすの木かうめうの事

さくらだうしんの事 (以上刊本下巻にあり)

按ずるにこの書刊行年代を距ること遠からざる著作なるべし。ちやつばかせいの條に、あいたがふつはものには、しまやきのめきしもの、さつまやきのやらうども、いまやきのつちにつかゆるたちをはきとあるにても明かなり。殊に薩摩焼は慶長二年、征韓の役再び起り、その翌年秀吉薨じて諸將軍を旋し、時薩摩の國主島津義弘朝鮮の陶工十七人を携へて歸り、これを鹿兒島に居らしめて、製陶に従事せしめしがそのはじめなりといへば、この書の慶長以後の作たることも亦ちのづから明かなりといふべし。

住吉物語

一本

昔中納言にて左衛門督を兼ねたる人ありけり。二人の北の方を持つ、一人は時

めく諸大夫の女にて、その腹に女子三人をまうく、一人は宮腹の女にして、契ことに深く、一女をまうく。この女子八歳の頃、その母はうせぬ。諸大夫の女の腹の中、の君は兵衛佐なる人に嫁す。中納言はかのうせける母の子を憐み愛し、内参りせさせんと思ひ定む。然るに右大臣の子なる四位少將ニイこの姫君の姿美しきことを傳へ聞きて心動き、もとその母宮に仕へし筑前といふ者にたのみて、艶書を送る、されど兎角の返事なし。このことを繼母聞きて、嫉く思ひ、筑前を招き、竊に己が腹の末の女三の君をこれに代へんことをたのみ。筑前止むことを得ず間に立ちて、少將を欺きければ、少將は宮腹の北の方の姫君なりと信じて、三の君のもとに通ふ。ある時少將かの姫君の琴の音を聞きしより、己が欺かれしことを知り、いよく思を焦す。中納言は姫君を内参りせさせんことを北の方に語れば、北の方はこれを妨げんとて、姫君のもとに六角堂の別當の法師の通ふ由を讒言し、怪しき法師を語らひ、姫君の對の屋より出て行くさまをせさせて見せければ、中納言も内参りのこと俄に思ひ止まり、内大臣の子宰相右兵衛督なる人に妻あはさんとす。北の方向これをも嫉み、己が召使へる女の兄の主計助といふ

翁をして姫君を盗み取らしめんとす。このことを姫君に通ずる者あり、姫君驚き歎き、その召使の侍従と共に母宮の乳母の攝津住吉の邊に尼となりて住みけるものあるに便してこゝに落ちのびけり。

中納言はもとより、少將の歎また一方ならず。やがて右大臣は關白となり、少將は三位中將となりたれど、中將は一向に喜ばず、姫君の在處を知らんと、一七日長谷の觀音に參籠して祈請しける夢に、住吉邊にあるべしとの告を得、住吉に下りてかの尼の家に至る。姫君もその情にほだされて、終にわりなき契を結ぶ。やがて中將姫君をつれて京に上りて北の方とし、若君と姫君とをまうく。中納言はかくとも知らず、只管姫君のことのみ案じ煩へば、年よりも老い衰へて見ゆ。中將中納言となり、やがて大將となり、中納言も按察大納言となる。大將その子女の袴着のとき大納言を招き、こゝに大將の北の方は久々になつかしき父に再會し、従うて繼母が讒構もあらはれ、大納言怒りて北の方を逐ひ出す。大將はやがて關白となり、その若君も三位中將となり、その妹の姫君は女御に上り、なほ北の方の腹には多くの子をまうけてめてたく榮え、繼母は人に憎まれ零落して終

ることをしるせり。

この書名古くは枕草紙源氏物語等に見ゆ、されど今傳はれるはその本にはあらざるべし。黒川春村古物語類字抄に論じて曰く、按に此物語の歌を風葉に載たる六首のうち、四首は本書に見えて、二首は見えず、流布本の外に異本もあるか、考ふべし。又源氏物語にも住吉の姫君と見え、枕草紙に物語はすみよし、うつぼのゐるといへる本は、殊に別なる古本なるべし。今本の筆づかひを見るに、源氏などにさきだつべき古代の者とはかけてもおぼえず、かつ小一條院の御製なる連歌を載たるにても、源氏の後ならむところ推はかるるれ。さて文體歌がら等に據て推考ふるに、此今本は承久の頃などに、いてきけん物とおぼしきなり。古代の本ははやく失けむからに、其名を襲ひて作れりしなるべし。一部の作意は落窪をまねびたらむ事決なし。といへり。刊本二卷あり、寶曆九年梅村三郎兵衛板なり、また群書類從卷三百十に收む。山縣昌成氏所藏の古寫本は三卷あり、刊本と大同小異にして、文など略せる所多く、善本にあらず、但し、なきなのみたつ田の山の歌の次に、

我身こそながれもゆかぬ水ぐきの

跡はたえせんかたみとも見よ。

の歌あり、また濱ちどり跡ばかりだにの歌の次にも、

思ひやれあだちがはらにおく露の

さえもやられぬ旅のけしきを。

中將住吉にいたりて尋ねわびける條にも、

あかつきの夢をしるべにこしかども、

住よしとだにいふ人もなし。

などいふ歌あり。

〔た〕

大悦物語

寫一卷

大和國吉野の里に大悦之助といふものありけり。日々山に入りて木を伐り、老いたる父母を養ひけるが、元來家貧しくして、孝養思ふにまかせざるを悲しめり。

ある時都に上り、清水の觀音に參詣して、心安く親を養はんことを祈願しけるが、その夢に觀音老僧と現れてその孝心を賞し、下向の折階の上に薬しべあり、それを取らば福人となるべしと告げたまふ。大悦御告のまゝに薬しべを拾ひとり、子安の地藏堂に參詣せるに、梨賣の鼻血を流せるあり、かの薬しべにてその小指を結びてこれを止む。梨賣喜びて梨の實三つを與へ、厚く禮いひて別れぬ。更に三年坂にて貴き上臈衆の途中にて悩み、頻に苦しみて水を求むるにあひ、梨の實を贈りて絹二匹を受く。三條の橋詰に至れるに大番勤の侍の馬俄に倒れ臥し、主の侍も遂にこれを捨て去るを見、かの絹一匹とこの馬とをとりかへて、いろいろ看病したるに、この馬治癒したり。乃ちこれをひきて馬市にて賣りしに、黄金百枚を得たり。

かくて大悦之助は思のまゝに父母を養ひ、孝行を盡しけり。大黒天その孝行をめで、この家に來り逗まり、隠れ簀、隠れ笠、うち出の小槌、如意、寶珠などの寶を與へ、その家いよ／＼富貴繁榮す。こゝに丹波國大江山の邊におふてきり右衛門といふ盜賊あり。大悦の富貴を聞きて、數十人の手下をつれてその家に攻め寄

せたるに、大黒天はうち出の小槌、夷子三郎は釣竿をふつて、盜賊どもを懲し、守護し給ふ。このこと叡聞に達し、敕使をたて、大悦親子を召し、大悦を吉田のきよむねとめされ、昇殿を許され、數多の領地を賜ひ、壬生中納言の女を娶るべしと宣旨あり。その後三男一女うまれ、三男は超擧せられて、それ／＼中將、少將、侍従となり、大悦の親も子もそろひて一家和樂し、大黒天も喜びて、なるは瀧の水と拍子をふんで舞を舞ひ、更に強ひられて、一に俵をふまへて、二によつこと笑うて、三に酒つくりて、四つ世の中よいやうに、五ついつもの如くに、六つ無病息災に、七つ何事ないやうに、八つ屋敷をひろめて、九つ倉をたてならべ、十でとうと治る御代こそ目出たけれ。」と舞ひ收むるに局を結べり。

この物語は宇治拾遺物語卷七長谷寺參籠男預利生事に胚胎せり。全體の結構頗る梅津長者物語と似たり。梅津長者は慈悲と正直とによりて善報あることを教へ、大悦は孝行によりて善果を結べることを説く。彼の夷子に對して、これは大黒なり、彼も此も大黒の舞あり。盜賊のおし入るとも、彼と此と同じく、福の神のこれを懲すこともまた同じ。思ふにこの物語は足利季世の作ならん、夷子、

大黒などの世に崇めらるゝに至りしは足利時代にして、狂言にも夷子大黒あり。

大織冠

二卷

はじめ春日明神のことを説き起して、その氏子に藤原鎌足といふものありと記し、文章生より身を起して大織冠に昇る、大織冠は上代にためしなく末代にありがたくめでたき官なれば、鎌足を不比等ともいひ、常に鎌を携ふれば鎌足ともいふといへり。敘述の牽強なる、作者が無學のほどを知るべし。

さても鎌足春日の宮に參籠して祝福を祈り、興福寺の金堂を建つ鎌足數子あるが中に、嫡女は聖武皇帝の后に立ちて光明皇后といひ、二女はこうはく女と稱して三國一の美人なり。異國の太宗皇帝こうはく女の容色を聞いて見ぬ戀にあこがれ、うんかといふ勇士を使として我國に派し、鎌足にその女を納れんことを求む。鎌足、小國の臣如何ぞ大國の皇帝を嫁にせんやと辭して、うんか空しく歸りぬ。太宗更に使を派す、聖武皇帝これを聞しめし、自ら返帖を授けてこれを諾したまふ。太宗大いに喜び、大船三百餘艘を我國に派し、こうはく女を迎へとり

て后とす。唐國の民景仰一方ならず。こうはく女その功名を日本に傳へんため、父鎌足が興福寺の造營に施入せんとて、むけい寶珠とて、赤梅檀のみそぎにて五寸の釋迦をつくりて、方八寸の水晶の塔の中に納めたるものを始め、華原磨、酒濱石等佛具、法具、さまざまの寶をつくり、萬こ將軍うんそうといふ勇將に三百人の勇士を率ゐて警護せしめて、我國に送る。

八大龍王この由を聞いていて、これを奪ひ取らんと、海上に風浪を起したれど、奇特不思議の靈佛のめしたる船なれば、佛法守護の夜叉羅刹忽ちこれを鎮めたり。龍王憤りて阿修羅に救を乞ひしかば、摩醯修羅總大將として數萬の阿修羅を率ゐて、うんそうを邀へ闘ふ、うんそう勇戦してこれを破る。龍王等いよ／＼苦しみ難陀龍王の議によりて、龍宮の乙姫のもとにこひさひ女といふ雙なき美人あるをうつぼ舟にのせ、旨を含めて漂蕩せしむ。うんそう房崎ふさきの沖うら（讚岐か）にてこれを救ひあげしに、この女欺いて、契丹王の寵姫なるが、説に逢うて海に流されしなりといふ。うんそうその色に迷ひて、遂にかのむけい寶珠を奪ひ取られ、慚悔すれども力及ばず、す／＼のこりの寶器を齎して奈良の京に至る。鎌足寶珠

を奪ひ取られたるを遺憾に思ひ、うんそうが歸航の船に乗りて房崎の沖に至りしかども、唯茫々たる海上、如何とも施す術なし。手を空しくして歸途につきしか、三國一の寶を徒らに龍宮に奪はれしこと残念この上なし。元來龍宮界は畜生道の中なれば、人間の智慧には劣るべきなれば、何とか善巧方便を運らしてこれを取り返さんと思ひ、再び形を變して房崎に下れり。

浦には多くの蜃女の集へるが中に、二十歳許なるが一人極めて水練に巧なるを見こみて、その家に寄寓す。遂にこれと契を結びて、居ること三年、一人の男子をもうけぬ。こゝに至りて鎌足わが身の素性を明し、素志を明して、寶珠回復の手だてを運らさんことを囑す。蜃女乃ち海中に入ること七日にして歸りていふ、龍宮城には特に寶殿を作りてかの寶珠を納め、八大龍王迭に警護して、二六時中怠なければ、これを取らんこと思ひもよらずと。鎌足案じて、八大龍王は五衰三熱隙もなく苦しみ多き身なれば、その苦しみを免れしめんには管絃の響に如くものなし。海上に美女をそろへて管絃歌舞を催し、神佛の來臨を乞はゞ、龍宮よりも龍王等眷屬を催して來らん、その虛に乗じて御身龍宮に至りて寶珠を取ら

んこと尤も然るべしとて、やがてあたりの浦々より舟をよせて、これに丹朱を以て彩れる舞臺を張りたて、百流の幡鉦をたて並べ、都よりめし寄せたる伶人をして歌舞音楽を奏てしむれば、海上俄に淨土を現じたるが如くにして、上天下界の龍神を驚かす。案の如く八大龍王眷屬どもを引き具して臨み、忽ち五衰三熱を免れ、唯舞樂に惚恍として日を送る。鎌足その隙を窺ひ、かの蜚女をして龍宮に向はしむ。蜚女夜光の珠を額にあて海中を照し、波間を潜りて龍宮に至り、思のまゝに寶珠を奪ひ取りて歸らんとす。警護の小龍心づきて追ひ迫る。蜚女今はかなはじと劔を以て自ら胸を開きて寶珠を匿し、遂に小龍のために害せられて海中に歿す。鎌足遺骸より寶珠を得て、興福寺の本尊なる釋迦像の眉間に鑲む。この蜚女の設けたる男子生長して房前といへりとかや。

幸若舞草子三十六番の一なり。蓋し讚州志度寺縁起などより出て、足利時代に多く行はれたる俗説ありしなるべく、謠曲海士もこれと基を同じくす。即ち海士に、今の大臣淡海公の御妹はもろこし高宗皇帝の后に立たせ給ふ。さればその御氏寺なればとて、興福寺へ三つの寶をわたさるゝ、華原磐、泗濱石、面向不背

の玉、二つの寶は京着し、明珠はこの沖にて龍宮へ取られしを、大臣御身をやつし、此浦志度に下り給ひ、いやしき海士少女と契をこめ、ひとり御子を設く、いまの房前の大臣是なり。といへるは、略またこの俗説によりて趣向を立てしなり。されど此草子は一層荒唐にして、鎌足と不比等とを同一人とし、房前をその子としたり。刊本あり。又後世これによりて淨瑠璃を作れるもの、井上播磨掾の「大職冠知略玉取、近松門左衛門の、大職冠等」少なからず。

たいのやひめ 岩屋の草子を見よ

大佛供養物語

寫一卷

東大寺の俊乘房重源入唐して極樂の曼陀羅五祖の眞影を渡しけるを、源頼朝建久六年十一月廿八日を期し、法然上人をして東大寺にて供養せしめんとす。頼朝を始め千葉、北條、和田、畠山以下六百人、その他月卿雲客また近國より聽聞に集るもの數を知らず。上人叡山を憚りて辭退ありしかば、頼朝朝廷に奏して裁決

を仰ぐ。朝議天台座主を以てすべしとあるに、奈良法師これを聞きて、我寺の得業こそ導師にせらるべけれど申しければ、園城寺の僧綱もわが誦源法印こそと申す。頼朝梶原の議を用ひて、三人ともに召して三座の説法をなさしむることとす。いよく供養の當日には、山門寺門南都より總じて三千人の僧來りて執行す。三座の説法みな一句も耳を傾くるに足るものなく、群衆慍焉たり。頼朝の北の方、はるく東國より下りたれど、説法想の外なるに、願はくは法然上人の説法を聽聞して歸らんと請ふ。頼朝よりて強ひて上人を請ず。上人乃ち小坂の善恵坊、長樂寺の隆寛、引接坊等弟子十二人を従へて來る。山の大衆はこれを見て、法然若し淨土門を褒めて餘宗を謗らんか、椅子より引き卸して恥辱を與へんと待ち構へ、聽衆もその素朴なる風采を見て、悔蔑の念あり。上人平然として、徐に妙法蓮華經、眞言の教、座禪修行いづれも末代惡世の衆生を守るに難きを説き、西方極樂の阿彌陀佛十惡五逆の衆生を救はんがため、五劫思惟の間結跏趺座して四十八願を立て、第十八番に六字の名號を造られ、一念十念の願を起されぬとて、六字の名號、一念十念の功德を述べ、殊に女人の罪障深き所以を演べて佛

名を唱ふるによりて、命終の時女身を轉じて男身となりて往生することを得とて、念佛往生を説かる。聽聞の衆感にうたれて袂をしぼるばかりなり。頼朝及びその北の方をはじめ大名たちが贈る所の布施數を知らず、上人悉くこれを東大寺の修理料に寄附して去りたまへりとぞ。

卷末に「享祿四年二月二日書寫畢」とあり。この事實は吾妻鏡に見えず。

大佛物語

刊二卷

京都大佛の仁王門にて、行脚の僧と一貫といふものとの問答に託して、武士の本義、水かけ祝、追腹、若衆を愛することをはじめ、君臣父子の道、儒道、禪道に至るまで、當時の風俗世教などにつきて説けり。終に「寛永十九年暮春吉日」とあり、刊行の年月なるべけれど、著作の時代もこれに遠からざるべし。

高館

刊二卷一本

文治五年四月廿七日、長崎四郎鎌倉殿の仰を受け、兵を率ゐて奥州に着到し、藤原

泰衡が一族等と共に、その翌日義經の高館御所を襲はんとす。時に紀州熊野藤代の住人龜井六郎の兄鈴木三郎重家義經に謁せんとて遙に奥州に下り、この日高館に至る。會、義經は辨慶、龜井、片岡等主従十人名残の宴を開ける最中なり。義經重家をして故郷に歸らしめんとす。重家義を重んじて聽かず、死を一にせんと請ひて、強ひて留る。かくてその翌日、鈴木、龜井共に勇戦して死し、武藏坊辨慶また奮闘して寄手を逐ひ退く。偶、信夫小太郎が箭に中りて傷を負ひ、義經に別を告げ、生年三十八歳、衣川にて立往生をなすことを作れり。幸若舞草子三十六番の一なり、中に桶皮胴のこと見ゆ。

たけくらべ四十二の物
争を見よ

武田物語

一本

源頼朝一條次郎忠頼を殺しけるによりて、その伯父上野常陸の大掾武田信義憤りて常陸國にありて叛けり。頼朝その奮功を思ひ、これを諭さんとして使を遣

はしけるに、信義却つて使を殺して聽かず。頼朝大いに怒りて佐々木盛綱、糟屋もとしげを遣はして、これを討たしむ。時に盛綱の弟高綱病床にありしが、盛綱を訪ひ、己が兵五十餘騎を贈りて助けしむ。かくて盛綱等進發せしにもとしげ背きて敵に通ぜしより、盛綱の子盛はる十六歳にて討死し、盛綱軍敗れ、死を決して敵を待つのみ。高綱このことを聞きて、病を力め兵を率ゐて發し、盛綱の陣に至りてこれを援け、頼朝またその子頼家を將としてこれを救はしむ。遂に高綱の智計により、信義の城を攻めて陥れ、もとしげを捕へ、信義を斬りて凱旋する物語なり。

篇中朝夷三郎義秀と武田源吾よしもとの勇闘、藤原のいはう、村井のきはうの兩法師の城門破などの記事ありて、金平本の趣あり。また全篇よりいへば、題名を武田物語といはんよりは、寧ろ佐々木物語といふべきものなり。またこれを正史に考ふるに、忠頼の殺されたるは吾妻鏡に見ゆれど、忠頼の伯父に信義なし、信義は忠頼の父にして、忠頼のことによりて頼朝に疎斥せられたれど、背叛するに至らず、文治二年三月九日卒せり。全篇假構の作なり。

著者詳ならず、刊行年代また詳ならざれど、畫風等によるに萬治頃かと覺ゆ。著作年代もこれより遠からざるべし。

立烏帽子

一卷

中ごろ、阪上朝臣田村五郎利成といふ勇者ありけり。その頃近江の鈴鹿山に立烏帽子といふ化生の女盜ありて、行人の財物を掠奪す、よりにて利成に院宣を下されて、これを討ち平げしむ。利成賊巢に至れば、池漫々と湛へて、中に蓬萊、方丈、瀛洲の三島あり、賊はこの三島に殿舎を構へて棲む。利成渡るに船なく、如何ともし難くして、空しく日を送る。立烏帽子は夫として契れる鬼陸奥まりはた山の阿黒王を厭ひけん、文を小鳥にくはへさせて利成の前に落させ、阿黒王を殺さば、勅命をも奉じ、御身にも契らんとの意を通ず。かくて立烏帽子謀を通じて利成を導き、利成神通の鏑矢を以て阿黒王を射殺し、立烏帽子と契りぬとなん。新編お伽草子下巻に收む。もと繪卷の詞書にやあらん。脱漏せる所ありと覺えて、文意首尾通せず、前に記せる梗概も大方の意を推測して試にいふのみ。

なほ田村物語を参照せよ。鈴鹿山の立烏帽子のことは萩野由之氏のいはるゝが如く、杉原本保元物語白河殿夜討の條に、山田小三郎惟行が自ら名乗りて、鈴鹿山の立烏帽子を搦捕て奉り、帝王の見參に入たりし山田莊司行秀が後胤といへることあり。

たなばた

刊一本

大體はあめわかひこ物語に同じ。(あめわかひこ物語の條を参照せよ。)但しあめわかひこには頭中將とあるをこれには頭中納言とあり、この書かき誤れるならん。かの書には、妹の姫家を追はれて後、一條萬里小路に忍べる由あれど、これには一條堀川とあり、その他異なる所少からず。文章また略する所多くして卑俗なり。蓋しあめわかひこを原としてこれを書きつゞめたるものならん。それは刊行の際なるかも知るべからず。刊本は、明暦元年六月上旬、開板の奥書あり。

(七夕)いにしへのつきのみやこの人なれば、いまもちぎりてめぐりこそあへ。
(あめ)いにしへの月のみやこの人にまた、めぐりあひぬるちぎりふかしな。
(あめ)かすならぬ身にも、雲井の藤の花、こゝろのまつもいかいしらまし。
(七夕)千とせふるまつに心の藤の花、かゝりて後にかひやなからん。

俵藤太物語

二卷

田原藤太秀郷朝廷に仕へて忠勤を勵みしにより其賞として下野國を賜はりて下國しけり。途に近江の瀬田橋にかゝりけるに橋上に大蛇横たはる、往來の人皆恐れて近づかず、秀郷は憚る所なくその背を踏んで通れり。その夜秀郷の旅宿にかの大蛇の變化來りて、まことわれは近江の湖水の龍女なるが、三上山の蜈蚣に苦しめらるゝこと久しく、武勇の人の力を假りて、これを退治せんと思ひ橋に横たはりて往來の人を試みたりといひて、只管秀郷の力を假らんことを請ふ。秀郷これを諾して、瀬田の橋に至り、矢に唾をつけて三上山の蜈蚣を射殺す。やがて龍女また尋ね來り、深く喜びて、米俵と鍋と巻絹とを贈る。この巻絹はたてどもたてどもつさず、鍋も思ふまゝの食物湧き出づ、俵の米も取り出せども盡さず、これより俵藤太と呼ぶるゝやうになりたり。その後またかの龍女來りて、秀郷を龍宮に伴ふ、龍王あつくこれをもてなし、黄金の甲と太刀とをまくり、これを以て朝敵を滅したまはるゝ、將軍に任せらるべしといひ、別に祇園精舎の佛供養の

時に鑄し赤銅の釣鐘を贈る。秀郷これを三井寺に寄進す。(以上上卷)
かくて秀郷下野國に居住して國中を治め、威勢熾んなりき。時に平將門下總に亂をおこす。秀郷これと同心し、やがては日本國を半分づゝ管領せんとて、將門を訪ひしが、その輕々しき舉動を見、俄に志を翻して京に上り、將門叛逆の狀を朝廷に奏聞す。朝廷驚きてまづ秀郷をして速に下りて將門を平げしむ。秀郷途中三井寺に立ちより、新羅明神に武功を祈りて行く。朝廷には更に藤原忠文を大將軍とし、上平太貞盛を副將軍として下らしむ。忠文駿河につき、富士の勝景を眺めなどして、空しく日を送る。貞盛機を失はんことを慮り、忠文に先んじて下り、秀郷と合して、下總に進み、將門と戦ひしが、利あらずして武藏に退く。秀郷は將門には六人の蔭武者あり、又金鐵の身にして切れども切るべからざることを知り、偽りて將門に仕へ、その館の女房小宰相に契り、この女房によりて、將門の本體と假體とは燈火により影の有無を見て判つべきと、また全體悉く黄金なれども、鼈カメのみに肉身なることを知れり。かくてある夜將門がこの女房の局に通ひ來りしを覗ひ、その鼈カメを射てこれを仆し、やがて貞盛と共に上洛し、貞盛は正

五位上將軍に任せられ、秀郷は從四位下に叙せられ、武藏下野(本ノマ)の兩國を賜はりて、子孫繁昌しけり。これも全く龍神の擁護によるといふに局を結ぶ。(以上下巻) 廣益俗説辨卷十に俵藤太の俗説についての辨あれども、道德上よりこの行爲を論じたるまでにてこゝには要なし。さてこの物語の著作の年代は室町時代ならん。されど早くよりこの物語ありて、倭錦には、土佐行長が俵藤太草子を畫きしよし見ゆ、行長は建仁頃の人なり。(増補考古畫譜にその一部を挿めり。)この草子の刊行せられたるは寛永頃にや、幸若舞草子など、一様の繪なり。帝國圖書館本はもと不忍文庫本にして異同を校正せり。

玉蟲のさうし

一本

玉蟲姫のうつくしきにかげろふの兵衛、蛙の雅樂助、蝗の宰相、鈴蟲の三位中將などより、玉章歌を贈りて戀の意を通はす。玉蟲姫またこれに返歌をなし、が遂に松蟲の左大臣と契を結ぶことを作る。蓋し暗かに艶書のかき方を示すもの如し。末に、かやうに心なきむしまでも、うき世の中のおもひ出に戀に心をか

け、文たまづさを書き通はし、歌をよみ、互になさけを忘れじと契ることの葉も、ただ人の心を和らげ、末もめでたかるべきまゝ、かやうにかきとゞめおくなり。」とあり。余が祖父順益の天保四年涉獵書目に、玉むしのさうし島澤氏藏本古寫本一冊玉むしにさまゝのむし共心をかけ歌をおくる、玉むし後に出家するはなしなり。」とあり、今玉蟲出家の條見當らず異本あるべし。

著作の年代詳ならず。新編御伽草子下巻に收められて刊行せられしが、同書に萩野由之氏の解題をそへて、この古寫本に左の跋語あり、しきりておぼせられ候間、うつしまゐらせ候、ことはりきこえぬところもおはしまし候、おひがし御ざれう人さまへまゐらせ候、天正十年水のへ午四月吉日とあり、これより古き作なるべし。」とあり。

田村のさうし

刊二本

昔、藤原俊重將軍の子俊すけ心にかなふ妻なければ、都に上り尋ねんとて上洛し、ある時嵯峨野へ遊覽に出でしに、美しき女に遇ひ、これを妻とす。やがてこの妻

懐胎し、宏大なる産屋を建てんことを乞ひ、産屋に入るにあたりて、七日めまでは内に入るべからずと、固く約束したり。俊すけ待ちかねて七日めにひそかに産屋を伺ひけるに、大蛇の美しき兒を甜めをりしかば、驚くこといふも更なり。翌八日めかの妻もとの如く美しき姿となり、一子を懐きて出て來り、七日をすぐして見給はゞ、日本の主となさんと思ひしに、昨日わが本體を見給ひたれば、最早それも叶はず。されども天下の大將軍となすべければ、名をば日りう丸とつけられよ、この子三歳の時御身死すべし。七歳の時帝より重き宣旨下るべし、我は益田池の大蛇なりと明して失せぬ。その後果して日りう丸三歳のとき俊すけ死し、七歳の時帝より近江の國みなれ川にくらみつ、くらへのすけといふ二つの大蛇行人を惱ます由なれば、討ちとるべしとの宣旨下る。その時日りうの乳母日りうを勵まして、累代相傳の寶なる角の楯弓と神通の鎗矢とをわたせり。日りう五百餘騎の軍兵を率ゐてみなれ川に下りしに、軍兵は悉く殺されたり。己もこれを平ぐるに苦しみ、七歳より十三歳に至るまでこの川にくらし、が、佛神に祈りて、やうく大蛇の姿を現し、彼の弓矢を以てこれを殛し、首を都に傳へしに、

叙感ありて將軍に任せられ、俊仁將軍といひけり。

その後堀川中納言たかとをの姫君てる日の御前と契を結びしに、帝歌合に託して宮中に姫君を召してこれを留め、俊仁を伊豆國に流さる。俊仁近江の瀬田橋を過るとて橋桁あらく踏みならし、俊仁こそ今流人となりて東國に下れば、みなれ川の大蛇どもよ、魂魄あらば都に上りて思のまゝにせよといひすて、下りしに、やがて都のあたり人の失すること夥しくなりぬ。人々恐怖し、日暮るれば門を閉ぢて聲を立つるものもなく、洛中洛外寂寞を極めしかば、帝更に俊仁を召し返さる。俊仁また瀬田の橋を渡るとも、はや大蛇ども都を荒すべからずと呼ばりしかば、程なく都も鎮まりぬ。帝叙感の餘また照日の前を返されぬ。その後辻風あらく吹き來りて、照日の前を天に吹き上げたり。靈夢の告によりて愛宕山に登りしに、照日の前の陸奥國たか山の惡路王といふ鬼にとらはれたることを知り、鞍馬山に登りて毘沙門天に三七日參籠し、擁護を祈請して、劍を授かる。かくて陸奥國はつせの郡田村郷に着きしとき、賤女と契を結び、その腹に一子を生む。さて俊仁惡路王の城を襲ひ、鞍馬の多聞天の劍を以て惡路王を平

げ、照日の前を携へて歸洛す。

かの田村郷にて生れし子は名をはふせり殿といひしが、幼少より才智すぐれ、十歳の時父を尋ねんために都に上り、俊仁に對面す。俊仁喜びて名を田村丸と改め、後元服せさせて、いなせの五郎阪上の俊むねと名のらせけり。俊仁五十五歳のとき、唐土を征伐せんと志し、勅許を得、舟師を率ゐて討たんとせしに、明州の津にて惠花ケイカ和尚百千萬の不動明王、毘迦羅、勢多迦を率ゐてこれを拒ぐ。俊仁初は利を得しが、多聞天の劍威衰へ、不動明王の利劍のために斫られ、遺骸は博多の津に着きけり。

その後俊宗十七歳のとき、大和國奈良阪にりやうせんといふ化生の物現れて、京に送る貢物を剽掠す。俊宗征服の宣旨をうけて向ひ、神通の矢を以てこれを射、終に捕へて入京す。帝御感ありて、りやうせんを舟岡山にて斬り、俊宗を將軍とし、陸奥のはつせの郡と越前とを賜ふ。(以上上卷)

また伊勢國鈴鹿山におほだけ丸といふ鬼神ありて、行人を惱まし、かば、俊宗征討の命を蒙りしに、靈夢の告によりて、この處に鈴鹿御前といふ天女と契を結ぶ

この女俊宗のためにはかりて、おほだけ丸の大とうれん、小とうれん、けんみやうれんといふ三劍を藏する間は、容易に誅伏せらるまじき由をいひ、大だけ丸を欺きて、大とうれん、小とうれんの二劍を奪ふ。けんみやうれんは大だけ丸の伯父三面鬼の預りて天竺にありしなり。かくて俊宗は大だけ丸を誅す、このとき千手觀音鞍馬の多聞天の加護あり。帝御感ありて伊賀國を賜ふ。その後俊宗は鈴鹿御前との間に一女を設けて、しやうりん女と呼ぶ。然るにまた近江國にたか丸といふ鬼あり、これを誅伐すべきよしの宣旨を蒙りて、俊宗は兵を率ゐて向ひ、たか丸の信濃國ふせやが嶽に逃れしを、追ひ攻むれば、更に駿河の富士山に逃る、これをも攻め落し、また率士、濱に逃れしをも追ひ落す。(諏訪大明神繪詞に阪上田村丸阿部高丸を奥州にて殺し、こと見ゆ。)たか丸日本と唐土との堺に海中の巖に岩窟を鑿ちて城となし、これに棲めば、俊宗またこれを攻むるに苦しみを、鈴鹿御前輔けてこれを誅し、首を都に傳ふ。鈴鹿御前またいふよしは、かのけんみやうれんの劍を漏らし、故、大だけ丸が魂魄残りて天竺へ往き、又日本へ渡り、陸奥のさき山嶽にこもれる相あれば、都に上りて駿馬を求めらるべしと勸

ひ。俊宗これに従ひて、京に出て、馬を買ふ。やがて案の如くさり山嶽に大だ
け丸こもり、俊宗にこれを誅伐すべきよしの宣旨を下され、俊宗はかの駿馬に乗
り、鈴鹿御前は飛行の車にのりてこれに向ひ、遂にこれを誅伏す。大だけ丸の首
を切りしとき、首天へ舞ひ上り、俊宗の甲にくらひ附きたりといふ。この大だけ
丸が首を末代の傳へにとて、うちの寶藏に納む、これ千本の^{たがし}大頭とて、御輿の前に
渡るものこれなりといへり。

かくて俊宗鈴鹿御前との契淺からざりしに、鈴鹿御前ふと病にかゝり、次第に重
りて死せしを、俊宗愁歎の餘冥府に至りて取り返し來れり。田村將軍と鈴鹿御
前と二世の契とはこのことなりといへり。終に、^たさてもこの大しやうぐんはく
はんをんの^化けしんにてましませば、^衆しゆじやうさいどの^度はうべんに、^方かりに人間
とあらはれ給ふ。又すゝか御前は^竹ちくぶし^生まの^島べんざい天女なるが、あつきじ
やしんをたすけ^佛ぶつ^道だうに入給ふべきとてさまぐにへんげ給ふも御じひふ
かき事なり。とありて、清水寺の建立を説き、田村堂を説き、此さうし見給はん人
人はいよ／＼くはんをんをしんじ給ふべし。と結びたり。(以上下卷)

按ずるにこの書俊仁、俊宗二代の事を記すれども、その實俊宗、鈴鹿御前を主とす
るなり。俊宗は阪上田村麿をいひしものにして、その父俊仁は蓋し藤原利仁を
いへり、これを父子とするはもとより正史に違へり。利仁の父は民部卿鎮守府
將軍時長なり、且その子に俊宗といふものなし、田村麿の父は阪上刈田麿なり。
然れどもこれを附會すること、その因縁なきにあらず。吾妻鏡文治五年九月二
十八日の條に田谷窟のことをしるして、是田村麿利仁等將軍奉^繪命^征夷時、賊主
惡路王並赤頭等構塞之岩屋也。其巖洞前途、至于北十餘日、鄰外濱也。阪上將軍
於此窟前建立九間四面精舍、令模鞍馬寺安置多聞天像、號西光寺。とあり。鞍馬
寺緣起によれば、利仁下野高座山の藏宗藏安の賊を征討せしことあり、みなれ川
のくらみつ、くらへのすけの名またこれに似ざるにあらず。又唐土を征せんと
せしことは、今昔物語^{卷十}に依調伏法驗利仁將軍死語ありて、文德帝の朝に利仁
をして新羅を征せしめんとせしに、新羅國にて惠果和尚の弟子濊全阿闍梨を宋
より聘して調伏の法を行はしめしに、利仁出發せんとして、山崎に至りて狂死せ
しことをしるせり。また古事談三には、宇多御宇、利仁將軍打新羅之間於彼國海

上頓滅云々。此事智澄大師御入唐之時、依彼國之語被行調伏之故歟。」とあり。異制庭訓往來に、古之武者治亂歸德、異朝則白起、王翦、廉頗、李牧等也、皆是知武之爲武、我朝則田村、利仁、頼光、保昌等也。」とあり。梅松論にも、我朝の田村、利仁、頼光、保昌。異賊を退治すといへども、威勢國に及ばず。」とあり。廣益俗説辨卷九にまた利仁、利宗についての辨あり、煩はしければ引かず。(舞草子未來記に、そもく兵法と申は三略のしつしよたり、むかしたいたうせうさむのそうけいがつたへしひしよなり。きびの大臣入唐し、八十四卷が中よりも、四十二でうにぬきかへて、我朝へ傳へしを、さかのうへのりしん九年三月にならひ、天下をおさめ給ふなり。扱其後に田村九十二年三月にならひ、ならさか山のかなつぶて、すゝか山のたてゑぼし、かゝるけきとをたいらげ、國をしづめ給ふなり。」とあり。また參照すべし。)

〔ち〕

竹齋

山城の國に竹齋といふ葺醫師あり。身貧にして病者少しもつかず、療治を頼むものもなければ、家の郎黨にらみのすけといふをつれて、諸國を巡り、心のとまらん處に住まんとていて立つ。まづ京都に入りて神社佛閣を參拜し、やがて江戸に下る。道中到處いろくの滑稽あり、竹齋にらみの助或は狂歌を詠じ、或は連歌をつらぬ。例へば宇都の山にて竹齋

世中は見るほどもなきあだゆめの、

うつゝにこえしうつゝの山かな。

とよめば、にらみの助も、

ひもじさに今ぞかしらはうつゝの山、

はらもてあしもやせて細道。

また京都の大佛にて、竹齋、

ゆゑしげにかほをば見せてひてよりの

やくにはたゝぬ大ぼとけかな。

などの類なり。また竹齋名古屋にて鍛冶屋が眼に鐵屑の飛び入りて苦しむを、

磁石を以て吸ひとらせて治すなどの面白味あり。

この書、豊國大明神に參詣のことを説き、また江戸城内紅葉山の権現のことを記せば、元和四年三月以後、寛永十四年以前の作と見るべし。思ふに寛永中の作ならん。作者は烏丸光廣卿といふ説もあれど明かならず。刊行の年代詳ならずれど、寛永、正保の頃と思はる。五第淺草文庫古板書目によれば、天和二年三月の刊行本もあるやうに見ゆ。さてこの竹齋は、廣く世にもてはやされ、後世これに擬して、上り竹齋、新竹齋貞享四年刊、竹齋行脚袋等の著あり、十返舎一九の膝栗毛も遠くこれに胚胎せりと思はる。

張良

一卷

漢の張良の黄石公に兵法の一卷を受くることをつくれり。張良天下を平げんがため、戦捷を祈るとて、鷲峰山の十一面觀世音に一七日參籠しけるに、觀世音示現ましく、前に流るる川に添うて、百日下らばしやうみやう國に着かん、かの國にて一つの橋を渡るべし、その橋の詰に七日が間立ちて待つならば、八十許の老翁に逢ふべし、これにつきて所願を果せとのたまふ。張良示現にまかせて御手洗の川につきて下り、百日に至りてしやうみやう國に着く、かの國の中程に黄金瑠璃車渠などを以て飾れる一つの橋ありて、虹の如く雲に聳ゆ。果して橋上にて八十有餘の老翁の騎馬して來れるに遇ふ。摺れ違ひさまに老翁杵を張良が袖口にひきかけて落す、張良これを取り上げて、恭しく捧げ上る。老翁これを穿たんとして、また落す、更にこれを捧げしに、また落す、また取り上げんとすれば、馬杵を橋下に蹴落す。張良これを取らんとして橋下に投ず。橋の高さ三十餘丈下は激流滔々たるに、大蛇あらはれ出て、紅舌を鳴らして張良を一呑にせんとす。張良少しもひるまず、泳ぎよつて大蛇に跨り、拳を以てこれを打つ、大蛇怒を止め、張良を戴きあげて橋の詰におろしおき、杵を取り上げて翁に奉る。翁の曰ふ、兵法を臆病者に傳へたりとてせんなければ、汝の剛臆を試みんためにかくはせしなり。この序に翁が淨土を拜ません、道遠ければかくせよとて、左手を以て馬の尾筒に執りつかしめ、右の手を以て目を掩はしめて、鞭をあぐれば、馬天に上り、刹那の間に南方觀音の淨土に着く。翁忽ち本體を現じて觀世音となり、異香芬々

翁に逢ふべし、これにつきて所願を果せとのたまふ。張良示現にまかせて御手洗の川につきて下り、百日に至りてしやうみやう國に着く、かの國の中程に黄金瑠璃車渠などを以て飾れる一つの橋ありて、虹の如く雲に聳ゆ。果して橋上にて八十有餘の老翁の騎馬して來れるに遇ふ。摺れ違ひさまに老翁杵を張良が袖口にひきかけて落す、張良これを取り上げて、恭しく捧げ上る。老翁これを穿たんとして、また落す、更にこれを捧げしに、また落す、また取り上げんとすれば、馬杵を橋下に蹴落す。張良これを取らんとして橋下に投ず。橋の高さ三十餘丈下は激流滔々たるに、大蛇あらはれ出て、紅舌を鳴らして張良を一呑にせんとす。張良少しもひるまず、泳ぎよつて大蛇に跨り、拳を以てこれを打つ、大蛇怒を止め、張良を戴きあげて橋の詰におろしおき、杵を取り上げて翁に奉る。翁の曰ふ、兵法を臆病者に傳へたりとてせんなければ、汝の剛臆を試みんためにかくはせしなり。この序に翁が淨土を拜ません、道遠ければかくせよとて、左手を以て馬の尾筒に執りつかしめ、右の手を以て目を掩はしめて、鞭をあぐれば、馬天に上り、刹那の間に南方觀音の淨土に着く。翁忽ち本體を現じて觀世音となり、異香芬々

として蒸じ、天童は雲の袖を翻し、歌舞の菩薩は微妙の曲を奏す。やがて観音張良を率ゐて臺に上り、陰陽の巻を授けらる。その後酒を賜ひて、酒の由來を説き、扇と鞭とを與へて、その奇特を示したまふ。張良歸るに臨みて、何方に向ふべきかを知らず、かの扇と鞭とを以てさしまねけば、忽ち故郷に着きたりけりとぞ。幸若の舞曲にして三十六番の外なり。謠曲にも張良あり、結構この書よりも簡單なり。

中將姫本地

一卷二冊

奈良朝の時、横佩右大臣豊成の女中將姫三歳にして母を失ひぬ。七歳の時、父豊成北の方を迎へしが、この繼母の心悪くして、中將姫を憎む。姫君十三歳の時、帝雙なき美人のよしきかせたまひて、入内あらしめんとす。北の方愈、心安からず思ひ、さる男をして姫君の局に出入するさまをせさせて、夫に讒す。豊成怒り、武士にいひつけ、姫君を紀州有田郡雲雀山につれゆきて斬らしむ。武士は情ある者にて、これを助けて、この山中にはごくむ。後豊成こゝに狩して娘に再會し、

さきの過を悔い、喜びて家につれ歸る。帝更にこれを后に立てんとす。されど中將姫は無情常の理を悟得して、出家の志を起し、家を逃れ出て、途にて剃髮し、名をてせんに比丘と改めて、當麻寺にこもる。彌陀、觀音尼となりて現れて、中將姫に手傳ひ、蓮の絲を以て壹丈五尺の曼陀羅を織りて、奇特を顯すことより、神護慶雲元年六月廿三日、姫君が廿五菩薩に來迎せられて、極樂往生をなすことを記せり。刊本奥書に、慶安四年八月吉日開板とあり。著作時代詳ならざれど、たけとひとしき御ぐしを、からわにたかくわげとあるによりても、刊行年代を距ること遠からざるを知るべし。記載の事實は本朝列女傳に見ゆる所と異同あり。

中書王物語

一本

後醍醐帝の一宮尊良親王とその御息所、今出川公顯の女との物語にして、大要は大平記十八卷尊宮御所の事附に同じ、文章また太平記と大同小異なり。幸若舞草子中の新曲もまたこれに同じ。奥書に、

中務卿尊良親王の事、太平記に見及たりしかば、その詞をあらためて一卷の物

がたりにかさなし侍り、比興也、いまだ清書に及ず

兼良公 沙彌御判

文明十五大呂下句之比、以禪閣御筆本、書寫之、一校、予彼本急之間爲中書卒馳短
毫、願他見嘲弄、不可出懷中者也。

とあり。沙彌の上に後人の加筆にて、兼良公とあれども、如何やらん、この奥書ま
た疑なしといふべからず、室町頃の物語といへば、兎角一條禪閣父子の作に歸す
る弊あり、本書またしからじか。

〔5〕

月かげ

寫六本

豊前國ひたの莊にひたの大夫といふ者ありけり。愛嬢二人あり、姉をにほひ御
前といひ、妹を月かげ御前といふ。姉嬢は豊後國の目代に盗み去られて妻とせ
られ、今は妹嬢をばいかにもして女院后にもと思ひたのみてその顯達を祈りけ
り。こゝに安藝國あまの莊七郷を領せるものあり、もとは京都に時めきし大臣

のこの地に配流せられたりし者の末なり、その子に左衛門藏人になれる者あり
文武管絃の道に暗からず、十八歳になりたれど、未だ定まる妻なくして、同國嚴島
明神に月毎に七日詣をなしけり。月かげ十三歳の九月十三夜、乳母侍從に伴は
れてまた嚴島に詣てしを、藏人これを見そめて戀の淵に沈み、病の床に呻吟す。
そのめのと三郎左衛門その意を聞きて藏人の父大臣に告ぐ。大臣その子のた
めに旨を大夫に通じて月かげを請ふ。大夫は流され人の末流を婿にせんこと
思ひもよらずとて、つれなく謝絶す。大臣怒りて軍兵を以て押寄せて奪はんと
する氣勢を示して、更にこれを請ふ。大夫なほ應ずる色もなかりしが、その妻の
諫によりてやうく承諾す。されど押へてとらるゝものならば外見も恥かし、
此方より參らすることは叶はじ、此方へ來て迎へ取るべしと答ふ。因りて藏人
來りて婿入をなし、借老の契淺からず、やがて郷里に伴ひ下る、時に藏人十九歳、月
かげ十四歳なり。既にして大臣病にかゝりて死す。藏人夫妻は嚴島に祈請し
て子を祈り、示現を蒙りて、一男一女を設く。

若君四歳、姫君三歳になりし年、藏人の家何の咎もなきに、不幸にも所領七郷を朝

廷に没收せらる。これがために家運頓に衰へて、奴婢悉く離散し、僅に妻の乳母侍従、藏人のめのと三郎左衛門のみ遺りて、主人夫婦を慰むるのみ。ひたの大夫これを聞きて、わが娘をとり上げんとし、偽りて重病の由を報じて、月かげに歸省を促す。月かげ二子を伴うて歸れば、大夫これを一室に幽し、番士を置きて警固せしむ。月かげ憂悶に堪へず、竊に使をやりて、事の次第を藏人に告げしむ、藏人爲すところを知らずして自殺を圖るに至る。三郎左衛門諫止し、早く顯達の道を開くことの得策なるを説き、勸めて都に上らしめ、自らこれに従ふ。ひたの大夫之を聞きて却つて喜び、更に月かげをして周防國の地頭五二郎に嫁せしむ。月かげ拒めども許されずして、暴に五二郎に迎へられしが、苦悶のため病の床につきて起き上らず。

かの二子は大夫の許に残され、母を慕うて止まず。大夫怒りて若君を五月雨ごぜん、姫君を村雨御前と名を改めて、虐遇し、僮僕もまたその主に倣うてこれを侮蔑す。二子堪へ兼ねて父の館に行きて自殺せんとせし程なり、大夫いよくこれを惡み、郎黨に命じて二人を海中に沈めしむ。嚴島明神大蛇と現れてこれを

救ふ。二人拜謝して去り、あまの莊の舊館に至る。館に人なく、空しく荒廢に委ねて、草露のみ繁し、二人相擁きて泣く。會村翁過ぎてこれを見、父の院の御所に奉仕する由を告げて京に上らしむ。二人艱苦を積み、藝備の境に至りしが、山中に迷ひ、岩石に足を破られて疲勞云ふべからざるに、四五日の間食ふに物なく、衰弱して遂に死す。嚴島明神これを憫み、二人の山伏と現じ、藥を含ましめてこれを救ひ、笈に載せて備後の吉備津宮まで送り、懇に道を教へて京に上らしむ。さて二人は無事に京に着きて、日々洛中を探れども父に會はず、せん方なく清水寺に至りて祈請す。叡山の大納言の阿闍梨この秀麗なる少童幼女を見、伴ひて還り、村雲雨を山麓、阪本の里屋さとやに預け、五月雨を房中に置きて、これを鞠愛す。五月雨才秀て學勝れて、名聲山中に響く。しかも常に父を慕うて休まず、ある日忍びて清水に至り、父に邂逅せんことを祈りて、參籠三夜に及ぶ。藏人またこゝに來りて、妻子に再會せんことを祈りしを、五月雨見て父と知り、遂に名乗りあふ。乃ち相伴うて阪本に至り、父子三人相會して歡極なし。時に帝五月雨のことを聞きて、台山に勅して阿闍梨をして宮中に伴はしむ。五月雨父と共に參内し、御前

にて今様を謠うて寂感に預る。帝その素性を問うて藏人の子なるを知りたまひ、藏人に九州の代官を七代まで取らすとの安堵状を賜ふ。藏人幸運俄に開けて所知入の用意をなす。

これに引かへ月かげは夫藏人に別れて既に八年、五二郎方にあれども一夜の契だも結ばず、家に残せる二子の失せたる由を聞き悲しみに堪へず、乳母侍従の勸により、相ともに逃れて、あまの莊の舊館に至り、感慨のあまりに自殺せんとす。侍従諫めて、藏人を捜さんとて、強ひて京に向ふ。されど女の足のかよわくはかどらず、備前の和氣渡に至りて、艱難に堪へず、二人互に袖を結び合せて河中に投ず。(舊館を尋ねて悲しむあたり、さきの二兒の振舞と重複してくどきに過ぐ。)時に藏人任に九州に赴かんとし、行装美々しく二子を伴ひ、三千餘騎の従士に取りまかれて、和氣川を渡る。はからずも月かげの屍を見、その船にのせて介抱し、嚴島明神に祈りしに、主従忽ち蘇生す。藏人親子大いに喜び、相率ゐて下り、月かげ及び若君をあまの莊の舊館に置く。藏人九州に下りし後、九州の武士參仕する者日にく多し。藏人其勢を催して、ひたの大夫を討つて報復を圖らんとす。

大夫これを聞き、井樓を上げ、壕を深くして防禦の備をなす。五二郎またこれを聞き、安んぜず、こゝに死を待たんよりはとて、二百餘騎の兵を率ゐて、大夫の許に來り加はる。藏人七千餘騎の兵を以てこれを攻む、五二郎奮戦頗る力めしが、遂に藏人に斬らる。藏人の兵城中に亂入して、大夫夫婦を縛す、五月雨斬るに忍びずして、これを放逐せしむ。是より後藏人の家繁榮を極めたりといふに終る。この書は室町季世の作ならん、原本住吉文庫に藏せらる。文章見るべき所なし。「かれうびんなる聲をかけ、りうていこがれてなきたまへば」などの語當時の體を徴すべし。

築島

刊一本

平清盛福原遷都の後、平大納言時忠の議を納れ、輪田泊を築かんとて、五條大納言邦綱を奉行とし、大和、山城等七箇國の人夫を集めて、工事に従はしめしが、波浪のために流されて成らず。更に安倍安氏のトによりて、三十人の人柱を沈めずば事成るべからざる由を聞き、往來の人を捉へて獄舎に繋ぎ、その數に滿つるを待

つ。やうく二十九人を得たれど、未だ一人不足せるが會、一人の修行者の通行するを捉ふ。もとこの修行者は難波入江のみつまつに刑部左衛門國はるといふものにて、夫婦の間に子なきを憂ひ、鞍馬の多聞天に祈りて一女を設け、名月女と名づく。名月女容貌秀麗なり、丹波國をがはの莊能勢に藤兵衛家かぬといふ者葦屋野にてこれを見そめ、強ひて家につれ歸りて妻とす。國はる夫婦愛女を失ひ、その行方を捜せども知れず、妻は歎の餘に死し、國はるは高野山に上りて剃髮し、なほ名月女の行方を探らんがため、四國を経て播磨に渡り、更に都の方に上らんとて、途に兵庫を過ぎて捕へられたるなり。名月女は丹波の能勢にありて父の難を聞き、夫家かぬの留守中に逃れて兵庫に至り、父の身代にならんとす、家かぬ追ひ來てこれに會し、まづ邦綱に哀訴し、更に清盛の許に至りて愁訴し、妻と共に國はるの身に代らんことを請ふ、清盛竟に許さず。さて人柱供養の當日となれば、清盛輪田岬の觀音堂にこれを見る。家かぬ夫婦また來りて愁訴して止まず、清盛やうく心動き、遂に家^國はる一人を助けて、二十九人を海中に沈めしむ。偶、清盛の童松王こんでい請うて自ら二十九人の命に代りて人柱となり、一萬部

の法華經と共に海中に沈められ、工事めてたく成就す、經島これなり。終に名月女は吉祥天女の化身なり、鞍馬の多聞天の計らひにて人柱を救はんために出現せりといひ、松王は大日王の化身、清盛は地藏菩薩の化身にて、島を成就せんためにあらはれたるなりと説く。幸若舞草子三十六番の一にて刊行せらる、近時新編お伽草子下巻にも收められて刊行せらる。

月日の御本地つきみつの草子を見よ

つきみつの草子 一名月日の御本地

刊一本

天竺摩伽陀かた國にやうこく長者子なきを愁ひ、夫人と相談して普陀落世界の觀音に祈請せしかど、示現なければ、己が第に華麗なる殿堂を構へて觀音を勸請し、七日の間參籠せしに、觀音老僧となりて現じ、汝もと前生に仙人なりしが、山鳥の子を殺し、によりて、今財寶にはあくとなき長者に生るれども、子なきなりと示し

たまへば、長者悲歎し更に七日參籠せしに、觀音さらば更に子を興ふべけれども、その四五歳に至りし頃母死すともよきかと仰せらる。果して一子を設け、ほう王の君と名づく。さて明年また一子を設け、さんそうの君と名づけ、この兩子の保育をその臣しゆん王に託す。かくてこの子四歳に至りし頃、母遂に死す。長者の愁歎限なかりしに、その後ある小名よりその女を娶らんことを乞ひしかば、これを納れ、きりうのつぼねと名づく。きりうのつぼね先腹の兩子を憎み、毒殺せんとせしが、觀音の擁護によりて果さず。つぼね偽りて病と稱し、長者にひふら山に入りて不死の薬を求めんことを乞ひて、遠く家を出てしめしゆん王を説きて兩子を殺さんことを諭す。しゆん王その無道を説き破りて、一百餘の勢を揃へて若君を迎へんとす。つぼねこれを聞き、さかいのはまのむくみのてうを或ハむくきみ召してこれにいひ含め、彼の兩子を欺き、亡き母に遭はしめんとて、つれ出して海に沈めしめんとす。てう沈めんことを憐に思ひ、兩子を汐水島に棄て、歸る。兩子島の中をさまよひて飢に迫る。かの母冥府にありてこれを哀しみ、閻魔王に訴へて暫しの暇を乞ひ、極樂の大鳥に魂を宿してこの島に飛び來り、兩子を養

ふ。長者は不死の薬を求めんとしてひふら山に到り、七十五日の間諸天三寶に祈れども得ずして歸り、二子のあらざるを疑ひしゆん王を召してこれを問ひ、更にさかいの濱のむくみのてうを召して糺問して實を得、自ら三十艘の船を仕立て、兩子を迎へ、かの大鳥が己が亡妻なることを知りて深くこれを哀む。やがて長者は歸りて御臺所のつぼねを鬼ヶ島に放ち、兩子は佛の弟子となりて難行を重ね、日と月とに現じ、上下萬民を慈しみ救ひたまふ。長者は菩薩と現じしゆん王、てうは四さう八の星と現じ、島へ迎の人々は皆星と現じて、日月を守護せりとぞ。

著作年代は室町の中世以後になりしものなるべし。寛永頃と覺ゆる刊本一卷ありて「つきみつのさうし」と題す、遺漏誤謬少からずして甚だ讀みがたし。寛文の刊本は前者と文章異なる所多し、「月日の御本地」と題す。末に「寛文七丁未年林鐘吉日、松會開板」とあり。

付喪神つくしみがみ

一卷

卷首に、陰陽雜記云、器物百年を経、化して精靈を得てより、人の心を誑す、これを付喪神と號すといへり。是によりて世俗毎年立春にさきだちて、人家のふる具足を拂いだして路次にすつる事侍り、これを煤拂といふ。これ則百年に一年たらずに、付喪神の災難にあはじとなり」とあり。康保の頃、煤拂のため洛中洛外の家々より路頭に棄てられたる古具足、道具のことも、故主を恨み、妖物となつて仇を報せんと計りけり。中に數珠の入道一連因果の道理を説きて宥めけるに、手棒の箸太郎怒りて一連を追ふ。さて古具足ども古文先生のすゝめに従ひ、節分を機として身を虚無にして造化神の懐に入り、さまざまの妖物に化成し、船岡山の後ろ長坂に屯し、京白河邊に出て、人馬を取りては酒宴を開き、歡をつくしけり。あるとき妖物等造化神を氏神と定めて變化大明神と號け、祭典を行ひ、神輿を造り、山、梓などをそろへて一條通を過ぎけるが、偶、關白殿下が臨時の除目を行はれんが爲に參内しける途中に行き遇ひたり。則ち關白の懐の守より火災出て、火村ホムラとなり、妖物等に掩ひかゝりければ、妖物等恐れて逃れ去る。殿下このよし

を奏聞しければ、諸社の奉幣顯密の祈禱あり。やがて關白の守の某僧正が供養せる尊勝陀羅尼なることを聞し召され、その僧正を召して清涼殿にて尊勝の大法を行はせられしに、護法童子あらはれ出て、妖物等の城に至りて彼等を降伏せしめ、三寶の道に歸依せしむ。妖物等忽ち悔悟して菩提の道に入らんとし、かの一連のものをたづね、剃髮染衣の姿となり、修行の功を積んで佛果を得たりといふ物語なり。

密宗に歸依せしもの、作とちぼしく、全篇他を排して密宗をのみ讚賞して、これに歸依せんことを勧めいへり。夫、非情成佛の義趣に至ては、天台、華嚴の兩宗の旨を談ずといへども、文理ともに迂遠にして、いまだ玄微をつくす事あたはず、然に眞言三密の教旨のみひとり其實義を判せる者哉。是によて餘宗にはたゞ草木成佛といへるを、吾宗には草木非情發心修行成佛と題せり、所謂十界の依正は悉阿字第一命の徳を具足せずといふ事なし、有情もし發心修行成佛せば、非情何ぞしからずといはむ、今器物非情成佛の因縁をさして、彌、三密瑜珈の深奥なる事を信ず。しかるに顯宗の學者のいはゞ、阿含の意によるに、道路屋宅にみな鬼

神ありて寸隙をむなしうする事なし、いまこの器物の妖變をよもふに、かならずかの鬼神の託せるなるべし、器類豈其性あるべきやといへり、嗚呼顯關ふかくとさせるかな。夫阿字の自性情器ひとしく具して闕減する所なし、何ぞ器物ひとり他性を借て自分とせむや、もし深意をしらんとよもは、早く顯網をのがれて祕宗にいれ。」とあり。この意を寓したること明かなり。黒川春村の古物語類字抄に、「伊勢物語の百とせに一とせたらぬつくもがみ、われをこふらし、面かげに見ゆ、といふ歌を原にて作れりし物なるべし、又泣不動の繪卷に付喪神を祭る圖も見えたり。」とあり。付喪神の傳説は古きことにて、必ずしもこの歌に因れりしとも定め難からん。なほ同書に増鏡の序に、かの世繼がうまごとかいひしつくも髮の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、云々とあるを、この物語に充てたれど、こは増鏡詳解にもいへる如く、今鏡のことなるべし。藤井貞幹の好古小録に、「非情草木成佛二卷、畫僧覺融、詞僧成賢、付喪神ニ似テ、畫モ詞モ少ナシ。」とあり、古川躬行はこれに對して、按に附喪神、非情草木成佛と一物、二名也、さるを小録に別本とせしは誤ならん。」といへり。考古余いまだ非情草木成佛を見ざれば、

何等の斷案をも下すこと能はざれども、非情草木成佛を増補して付喪神はなりたるならんか。なほ三條西實隆公記明應六年十月十五日の條に、内外萬物縁起之新寫、不審之字可見合進上由被作之。云々とある縁起は付喪神のことにあらじか、後考を待つ。

土蜘蛛草子

寫一卷

この繪卷未だ善本を見ず、誤寫遺脱多し、唯意を迎へて大概を説かん。昔神無月の末つかた、源頼光渡邊綱を従へて蓮臺野にいたりけるに、怪しき觸骸の風にしたがひて飛びゆくを見つけ、その跡を追うて神樂岡に至り、とある古屋敷に入りぬ。こゝにてさまぐの妖怪にあひしが、頼光これを斬り、遂に劍を折りぬ。やがて血のしたゝる跡を追うて尋ねしに、西の山の洞穴の中にその妖怪の正體を見あらはしぬ。即ち大いなる山蜘蛛にて、ささの疵口より死人の首千九百餘もあらはる。頼光、綱これを退治し、朝廷賞して頼光を正四位下に敘し、綱には丹波を賜ひて正五位下としたまふことに結ぶ。

この草子繪巻物として行はる。奥に「此圖は片桐家の所藏繪は土佐長隆筆、詞書は兼好法師也」とあり、倭錦にも見ゆ。但し繪も傳寫せるものについては、何人の筆と定むべくもあらず、詞など徒然草に比してはいと拙し。長隆の筆といふも、兼好の作といふも、後世鑑定者などのさかしらにきはめたるにあらじか。なほ松平樂翁の古書類聚引用目録等には畫家を光顯とせり。

劔讚歎つるぎさんだん

一本

曾我兄弟富士野に向ふに先だちて、箱根別當の御房に詣りければ、別當二人を密室にめし入れて別を惜しむ。箱王が七歳のときこの寺に上りしより九年の間、教養せしは、ひとへに智者能化になさんずるためなりしに、思ひきや、兄弟とも親の仇討たんとて修羅の苦をうけんとは、跡はわれ弔ふべしとて、祐成に黒鞘巻の刀、時致に兵庫鎖の太刀を贈る。さて別當この兵庫鎖の太刀の由來を説きて、天竺のしやりふんがよたうさんのれううんの瀧の鐵を以て八尺の薙刀にうちて持ちたりしを、かううん盗みて唐土に渡し、それより日本に傳ふ。平城帝の朝に

この薙刀を太刀にうちしめんとせられ、二つに分ちてまくのまうふさと三條小鍛冶とに命ぜらる。まうふさは三年にして三尺にうち、小鍛冶は三年三月にして二尺七寸にうつ。帝小鍛冶は鐵を盗みたりとおぼし召され、捕へて土の牢におし込みたまひ、まうふさがうつたる太刀を枕上まくらがみと名づけて、一段上にたて、小鍛冶がうつたるを寸すんなしと名づけて、一段下にたてらる。小鍛冶無念やるかたなく、九萬八千の鍛冶の神に祈請して冤罪をすゝがんと肝膽を碎く。神明納受ましましけん、寸なし鞘をはづれて枕上に切りかゝる、枕上また鞘よりはづれ出て、追つつまくつつ戦ひつ、遂に寸なし枕上を追つつめ、切尖三寸きり棄て、もとの鞘にぞ納まる。帝御覽まし、寸なしを友切ととなへて、小鍛冶を宥されけり。のちこの二刀多田滿仲にわたる。滿仲友切を以て罪人の頭を刎ねけるに、髭までかけてさつと切れければ、髭切といひ、また枕上を以て罪人を斬りけるに、膝をも併せて切りければ、膝切と呼ぶ。頼光のとき髭切を以て鬼を切りしかば、鬼切と呼び、膝切を以て蜘蛛を切りしかば、蜘蛛切と名を改む。いづれも義家の手を經て爲義に傳はる。一年都にことありしとき、爲義嫡女たつはらの姫の婿熊野

別當(教良力)けうしゆん房○白河法皇たつはらの姫をけうしん房に嫁せしめたまひ、爲禰これが熊野三山の山伏等を催して援兵を出しけるを喜びて、蜘蛛切を贈り、嫡子義朝に毘切を與ふ。壽永の秋源平の戦起りしとき、けうしゆん房蜘蛛切を義經に贈る。義經この劔の威徳によりて首尾よく平家を滅しけるが、さて關東に下りしに、梶原の讒訴を受けて、酒匂の宿より追ひ返さる。義經乃ち箱根に上り、兄弟の和合を權現に祈りて、蜘蛛切を寄進す。今この太刀を時致御身に授くるは首尾よく祐經の首を切れとてなりとて、その門出を祝ふ。曾我兄弟暇乞して寺を出て、麓の宿にて垢離をかき、やしはの宮に参りて七番づゝ笠懸をなし、本望成就を祈請してあひさはの原に出てにけり。

幸若舞草子の一なり、群書一覽には三十六番のうち、に數へ、貞享書籍目録には數へず。劔の由來は、平家物語劔卷に見ゆる所と異同あり。

つるぎのまさき

刊三卷

毘切、膝丸の名刀が源氏に相傳せる由來を説けるもの、平家物語劔卷、幸若舞草子

つるぎさんだん劔讃歎などより出てたるものか。奥に、承應貳癸巳年初夏開板とあり。

〔て〕

てこぐま物語

寫一卷

巻首を闕きたれば明かならざれど、山鹿、かいだといふは兄弟の間なりしが、家督相續のことより戦争に及ぶ。山鹿の老臣岡部與一の子小太郎よく戦ひしが、軍途に敗れて、山鹿は自殺し、小太郎はこれに殉す。山鹿に一女あり、阿曾四郎忠景これを妻とせんことを望みしが、未だ答へざるに戦起りしかば、山鹿死に臨みてこれを許すことを遺言せり。山鹿の妻子老臣まさきの大夫の許に匿る。かいだ山鹿の女を搜り、その在處を知りてこれを捕へしむ。まさきの夫妻謀りて己が女てこぐまに説きて、主に代らしめんとす。時にてこぐま十三歳、聰敏にして膽畧あり、奮つてこれに應じ、捕はれてかいだの許に至る。かいだの妻まさきの女あるを知りて、或は身代ならんかと疑ひ、夫に勸めて拷問せしむ。てこぐま水火の責にも屈せず、毫も實を告げず。かいだ更にまさきの夫妻を召して、其目前にてて

こぐまを拷問す。てこぐま父母がわが子の愛にひかれて白状せんかを慮り、父母を罵りて山鹿の姫君たるを装ふ。かいだ遂に疑解け、これを責め殺さしめて骸をまさの夫妻に與ふ。まさの乃ち山鹿の姫君を阿曾忠景に送りて妻たらしむ。これよりまさ山鹿の老臣岡部與一主命を帯びて京都に上りしが、いよいよ山鹿の所知安堵の状を得て歸途に就き、播磨に至る頃、主家の凶變を聞き、倉皇として歸り、阿曾忠景についてかいだを討たんことを謀る。忠景これを助けて用意疎かならず。かいだこれを聞きて深を深くし、亂杭逆茂木をひきて待つ。忠景與一三千餘騎を率ゐてこれを討ち、與一勇戦して城中に攻め入り、かいだを虜にして歸る。かくて姫君を山鹿に迎ふ。姫君岡部をして家政を執らしめ、まさのの大夫に山鹿、かいだの總政所を賜ひ、又かいだを與へて、てこぐまの怨を報いしむ。まさのかいだを地に埋めてその首を鋸挽にす。姫君また寺塔を建て、てこぐまの冥福を弔ふ。これより山鹿の家はめでたく榮えけりといふに終る。終に、永祿九ねんといひの六月吉日これをかくとあり、帝室博物館所藏の本なり。

天ぐの大力

刊二卷

天狗の内裏なり。牛若九天狗の内裏に至りて大天狗に對面し、更に大天狗に伴はれて地獄、淨土をめぐり、大日如來にあひて未來のことを教へらるゝことを記し、これも源氏末繁昌百代の御果報ごくはほううゆへとぞみえたりける。といひてむすべり。御伽草子、御曹司島わたり及び舞草子、未來記とあはせ見て、當時牛若に關していかに荒唐なる傳説の行はれたるかを知るに足るべし。奥に、萬治二年仲夏吉辰、松會開板とあり。延寶五年刊行の古淨瑠璃本にまた、天狗内裏あり。曲亭馬琴の齋旅漫錄卷一に曰く、天狗内裏繪巻物、是は先年名古屋の道具屋にありし由いづれの旅人かもとめ行けん、次の日問ふに、賣たりとて、名古屋の人をしみあへり。

天神本地

二卷

北野天神の縁起といふべきものにして、菅公が是善の宅に來降ありしことに始めて、幼時詩を詠ぜられしこと、藤原時平の讒構に陥りて筑紫に配流せられしこ

と、夢に入唐ありしこと、

梅は飛び櫻はかるゝ世の中に、

何とて松はつれなかるらん。

の御詠ありし安樂寺飛梅の故事歸洛の思切に、寧ろあら人神となりて冤を雪ぎ
仇を報ぜんと、祭文をかきて七日間祈請ありしこと、莖後雷となりて京中震懾し、
時平がこれに打たれしこと、朝廷叡山の法性房十三世、三度宣旨を下されて
招かれ遂にその法力によりて雷電を鎮めしこと、北野に神社を創設せしこと等
を記す。北野縁起、梅城録の旨と大やう異ならざれど、俗説多く附會少からず。
例へば菅公の始めて梅の詩を作られしは、諸書に十一歳とすれど、本書は七歳の
時とし、讒構の旨は時平自ら内裡に放火して焼燼し、これを菅公の所爲と誣ふる
ことゝしたるが如し。また、昨爲北闕被悲士、今作西都雪恥尸といふ詩を、法性房
が雷を鎮めしとき雲中より菅公の託宣ありしなりとするなどのとも少からず。
刊本は慶安元年の板なり、末に、慶安元年戊子霜月吉日とあり、誤説また少からず。

【と】

富樫

一卷

義經主従十三人奥州に下らんとて、加賀の安宅の松の邊に到り、兒童に路を問ふ
に始り、富樫介鎌倉殿の命に従ひ、城郭を構へて山伏の通行を禁ずる由を聞き、辨
慶まづ富樫の館に入りて羽黒山伏なりと稱して餉料を乞ふ。富樫辨慶なりと
悟りて、捕へんとするに、辨慶論辯し、南都東大寺の勸進聖なりと偽り、富樫に強ひ
られて勸進帳を讀み上ぐるに終れり。笈さがしの前段なるべし。幸若舞草子
三十六番の一なり。

時秋物語

一本

新羅三郎義光後三年の役に陣に弦袋をかけて出羽に向ひ、豊原時秋これと追う
て近江の鏡驛に至り、共に行かんことを乞ふ。義光これを止むれども聽かず、強
ひて従ひ行く。義光その意を察し、相模の足柄山にて大食調入調の曲譜を授け
て、都に還す物語にして、其事柄はよく世に知られたるものなり。この物語その

事柄の古今著聞集六卷に載せたるに同じきのみか、文章また大同小異なり。恐らくは後人が古今著聞集よりこの文をぬき、繪など加へて一卷とせしものならん。群書類従卷四百八十三に收む。この物語の内容につきては、古川躬行曰く、此足柄山のふるごとは、著聞集をはじめなにくれの書らにみえて、みな時秋とせり、然るに時秋は康和二年に生れて、永保寛治東征の當時、未生已前なり。源義光の時秋が祖父時光が弟子なれば、足柄山の物語は時秋が父時元なるを、はやく時秋とはあやまり傳へたるよし、筑後守豊原文秋樂所補任、鳳笙相承記等を引證して、つばらに辨へ記したり。天保の末つかたなりけん、かの時元が七百とせの忌辰にあたれるをり、文秋の男筑後守陽秋、大曲相傳せる人々のかぎり、詩歌をこはんとて吾妻に下り來て、我もとにも此勘文をこせたりき。云々としてこの傳説の續教訓抄等に基きてこれを誤り傳へたるものなるべきを論へり。考古そののちまた松本愛重氏の足柄山笙曲傳授の話に就きての一篇國史論纂あり、同じく(一)義光の奥州下向以前已に歿したりといふ豊原時元(時秋の父)は、其後尙三十餘年間存生せし事(二)足柄山にて秘曲を受けたりといふ本人の時秋は、義光下向の時未

だ出生せざりし事を證して、この傳説の史實にあらざることとを明かにす。而して(一)義光下向の時時元之を逢坂の關まで見送りて大食調の秘曲を受けたりといふ説、續教訓抄に見え、(二)同じ時、時忠(時秋の伯父)之を同じ處まで見送りて、まじりまろ交丸といふ名笙を授與せられたりといふ説、續世繼及び續教訓抄に見ゆれば、これらによりて作り出でしものなるべしといへり。

常磐姫物語

一卷

大和國に常磐姫といふもの富み榮えけるが、夫に後れし後、年九十餘までも生きけるに、多くの子供にも疎まれ、よろづ心そはず、老の末を歎きて偏に唱名念佛して、彌陀の來迎を願ひ、往生の素懷を遂ぐる物語なり。姫が念佛の中より、老の癖とて物欲しくなりて、山海の美味を求め、或は子供等の不孝を叫び、昔の榮華をしのびて歎き狂ふさまなど、老女の性癖を穿ちて、極めて滑稽に寫せり。文章また看るべし。「猿樂田樂が物ぐるひのやうにといひて」などの文もあり、恐らくは福富草子と同じ頃の作ならんか。群書類従卷五百四にあり、また新編御伽草子上

巻に收む。長谷川福平氏の古代小説史には堤中納言のよしなしごとより脱化し來りしものといへり。

常磐問答

刊一本

義朝の妾常磐清盛に見え、その子今若を醍醐守に、乙若を園城寺に上す。季の子牛若なほ幼、少なればとて、手許に育てしが、七歳になりければ、またこれを寺に入れんとするに、ある人鞍馬寺こそよけれとす。常磐その寺を見て決せんと思ひて、ある日鞍馬寺に詣て、禮堂の内陣の高座に座を占めて念誦す。寺の別當東光房の阿闍梨これを見て憤り、女人の身を以てこの振舞こそ奇怪なれとて、これを逐はんとす。これより常磐と東光房と問答に及び、互に論諍することを趣向とせり。この書に説く所の鞍馬寺の縁起、普通に傳ふるところに異なり。東光房の詞の中に、我寺と申はくわうとくてんわうの御代の時、勸進のひじりはもとはならほつしくわんちやうばうと申せしが、南都をいて、天台山北谷にすみ給ふせうそうづと申て、うげんちとくのひじり也。彼僧都のすゝめによつてめ

うらくだいの御建立ゆけのねうゐんのみはかたう云々とあり。普通には鑑真和尚の開基、藤伊勢人の草創といへり、かゝる名高き寺の縁起をもかく誤れること、作者の學識、時勢の晦蒙知るべきなり。幸若舞草子三十六番の一なり。

鳥歌合

春の日の長々しく暮しわびたるに、長雨さへ降りそひければ、萬の鳥ども森の下蔭山の片岨などにたゝずみて、今日いくかふりつゝきけん、今いくかありて霽れんなど語らひけり。其中に軒下のみそさいひ鶴鶯の竹林房を訪ひて、諸の蟲たち集りて歌合ありつと聞く、鳥は源蟲は平、獸は藤原、魚は橋といへるを、われらいかて蟲の家うそひめに劣らんや。幸この頃鶯うそひめを戀ひて、彼方此方より袖を引くといふに、是こそよき相聞歌の題ならめ、鶯の歌よむといふ古事あれば、御身判者は免れ給はずといふ。竹林房答へて、かやうに私ならぬことを、上見ぬ鶯をさしおかむと思ひもよらずとて、梟のとうさい房を経て、鶯に申し上ぐ。さて其用意なり、古今集にも俳諧歌をのせたれば、俳諧の心を以て詠まんとして、鶯を判者として、一番に鶯の

きん助、烏田の黒助を番はせて、十五番千鳥の百の助、かし鳥の七の助まで、の歌をあげたり。

卑俗なる語をも交へて面白く作らんとしたれど、上手なるものにはあらず。本書中に蟲歌合のことをいひたれば、それより後に作られたるものなるは明かにして、また斑女物語にこの書を引きたれば、その前に出てたることも知らる。とにかく徳川時代の初期の作なるべし。

とりかへばや物語

いつの頃にか、権大納言に大將かけたる人に、二人の子ありけり。一人は男、一人は女なりけるが、男は容貌舉動すべて女の如く、女はまた荒々しきわざをのみ好みてさながらの男なり。せん方なく父君は男女を取りかへて育つ。長じて似せ男君は次第に立身して右大將に至り、似せ女君は宣耀殿尙侍となる。右大將は伯父の右大臣の四の君を妻としたるが、實は女どちなれば、珍らかに物足らぬ夫婦の關係なり。その頃右大將と並びて世のさこえめてたき若殿上人に某の

中納言といへるが、四の君をかいまみて、思に堪へず。遂にわりなき隙を求めて、四の君は懷妊す。中納言事の由を推して、おのづから心も面白からず、世をうきものにして、屢、吉野に隠れいます先帝の三の宮を尋ね、佛道の事など語らへり。然るに夏の日中納言は右大將と對談せる折、衣のすき影に計らずも大將の女なることを知り、強ひて挑みかゝりて、あさましくも大將はこれが爲に懷妊す。かくては世に立ち交らふべくもあらず、いかゞせんと歎き詫ぶれば、中納言人目離れたる處に率て罷らんとし、さりに促し立つ。右大將せん方なくこれに従ひて、宇治に隠れ、もとの女の姿になりて男子を生む。こゝに都にては右大將の行方知れずとて騒ぎ罵り、宣耀殿尙侍は密かにもとの男の姿に歸りて、大將を求めんとて出てたつ。まづ吉野の宮を尋ね、こゝにて大將が宇治にあることを知りて、兄妹對面することを得たり。これまでは天狗の魔障によりて、男は女装し、女は男装せしに、こゝに始めて各、本來の姿に取りかへ、男君は右大將となりて都に歸り、女君も中納言を棄て、密かに吉野に至り、更に都に歸りて尙侍たり。大將は今はた四の君とまことの契をこめ、また吉野の宮の姫君を迎へて、益、榮え、尙侍は

帝の寵をうけて、遂には中宮に冊立せられたりとなり。

この書は從來寫本にて傳はりて、通常四卷に分つ、山岡浚明の校正せる本は五巻とせり。わが解題せるものうちにては最も長さものゝ一なるべけれど、世に知る人も多き書なれば、極めて粗くその一斑を述べたり。この書明治になりては日本文學叢書第四編及び國文大觀のうちに收められて刊行せられたり。

さてこゝにいへるは、「とりかへばや」として今日傳はれるものゝ梗概なるが、元來この書には新古の二種あり、風葉集無名草子ともに「とりかへばや及び今とりかへばや」の二種を收めたれば、鎌倉時代より然りしを知る。然らば今日傳はれる者は、その何れに屬するか。山岡浚明はこれ即ち「今とりかへばやなり」とし、浚明校正本の序黒川春村はこの説を委しからずとし、傳來の本は新古二本の一部づゝ入り交りて全局をなせるものにして、「古とりかへばや」は鎌倉以前のもの、「今とりかへばや」は鎌倉の中頃なるべき由や、細かに論ぜり。古物語類字抄また岸本弓弦に「新とりかへばや考證」の編述ありといへども、未だ見ず。岡本保孝は風葉集に見えたる二種の「とりかへばや」共に亡佚して、今本は風葉集以後のものにはあらずやと疑へり。

取替ばや物語考近頃藤岡氏の國文學全史にまたこれについての論あり。「新とりかへばや」といへど、全く「古とりかへばや」と異なるものにあらず、たゞその一部を修正せるものにして、傳來の本は即ちこの「新とりかへばや」なるべしといへり。

鳥部山物語

一本

昔、武藏國に某和尚の弟子に民部卿といふものありき。一とせ禁中に御修法ありて和尚をも召されければ、民部卿もこれに従ひて上洛しけるに、北山の邊にて四條坊門に住める某の中納言の子藤の辨を見て、その美しき姿に迷ひ、それより思ひ沈みて遂に病の床につきけり。民部卿の從者これを慰め、中納言の隣家に住める老人は古くより知れるものなれば、好きつてもあらんとて、民部卿をこの家に移らしむ。この家の老人の子やがて媒して、藤の辨に民部卿の意を傳へ、ここに二人は深くかたひけり。會者定離の理免れ難く、和尚歸郷のこととなり、民部卿も別を惜みて、やがて武藏に歸りぬ。藤の辨これを悲しみて、また重き病となる。今は危くなりける時、めとの男病の起りしわけを聞きて、中納言夫妻

に告げれば、中納言直にこの男をして武藏に行きて民部卿を迎へ來らしむ。やがて伴ひて江州土山まで至りしに、京都よりしらせありて、藤の辨終にうせしよししらせあり。民部卿大いに歎き、京都に入りて中納言に面會し、さて初七日の日、鳥部野の藤の辨の墓に詣て、こゝに自殺せんとしけるを、中納言に止められ、遂に剃髪して北山に草庵を結び、藤の辨の菩提を弔ひけるが、遂には行方しれずなりしよしをかけり。

この物語は室町中世の作ならんか、古物語類字抄には、應永より應仁の間の程などかけりけむなどおぼしきものなり。といへり。群書類従卷三百十一及び兒物語部類に收めたり。兒物語部類本には旁註ありて、字句の出典を所々に註し、又萩原宗固の奥書ありて、此物語誰人の作にや、いまだ知らず、所々に註し付られたり、若深草元政法師の筆ならん歟、一本に草山妙子の書加られたるよし見ゆ。とあり。花の縁物語はこれを作り直したるものにて、文章も概ねこれによれり。

[な]

那須與一

刊一本

那須與一むねたか本書典一名のりを上ぐる終に、下野の國の住人金村の太夫に十八代にまかり、の屋島に扇を射る事を記す、幸若舞草子三十六番の一なり。

七草草子なしくさ

一本

正月七日、七草を摘みて天子の供御に供ふる由來を記すとて、昔支那の楚國の傍に大しうといふもの天性至孝にして、父母の老いたるを哀み、とうこうせんに登りて、三七日の間、父母を若くせんと祈請しけるに、帝釋天降りて、正月六日の夜、芹なづな、ごげう、たひらこ、ほとけのざ、すずな、すずしろの七種の草を集め、柳の木の新板にのせて、玉椿の枝を以てうち、東の方にて汲みたる若水を以てはくが鳥の渡らぬ前に服せんには、齡忽ちに若くなりて長壽を保つべしと教へらる。大しう其教のまゝになせば、百歳に近き父母俄に二十歳ばかりに若返りたり。このこと叡聞に達しければ、天子も大しうを召されて御讓位あらせられさといへり。正月七日に七草を天子にさゝぐるあがためしこと、また正月に縣召といふことあるもこれ

より始るとしるせり。この七草の由來は松風村雨に載せたと大同小異なり。御伽草子前編に收む。

なよ竹物語鳴門中將物語を見よ

鳴門中將物語 一名なよ竹物語

一卷

後嵯峨の帝この帝の名は末に彌生の花盛に和徳門の壺にて鞠の御遊ありけり。見物の人々の中にわけて美はしき女ありけるが帝の御目にとまり、六位の藏人を召して歸らんとくを見とけよと仰せらる。仰に従ひて追ひゆくに、女それと覺りて、藏人になよ竹のと傳へたまへ、御返事賜はらん程はこゝに待ち侍らんといふにぞ、藏人歸りてこの由を奏す。されどその意解き難ければ、爲家卿の許に御尋ありけるに、古歌に、

高くともなにかはせん、なよ竹の

ひとよふたよのあだのふしをば。

とある意なりと奏す。帝心にくくおぼして更に、藏人を遣はしたまふに、女はい

づち往きけん行方を知らず。帝御氣色あしく、尋ね出さずば咎あるべき由仰せらる。藏人心も空に搜し廻れども何處の人とも知られず、せん方つきて、その頃有名なる陰陽師文平といふに占はするに、夏の中に隠れたる處にてまた會ふべしといふ。その言に任せて常に左衛門の陣の方にたゞずむに、果して五月十三日最勝講の開白の日、聽聞の衆の中にかの女を見たり。密かにその跡をつくれば、三條白川に某の少將といへる人の妻なり。帝御文あり、一首の歌を記して、この暮に必ずとあり。女この由を夫に語るに、左右なく参らせんも憚あり、さりとて参らせずばいかなる事の出来んも知らず、せん方なければ参らせ給へとて、女がなくくいなむを強ちにすむ、女乃ち御文の後にをと書きて返しやる。この意また知り難く、女房たちを召して尋ねたまふに、承明門院の小宰相局とて家隆卿の女の申すやう、人の召す筈に男はよといひ、女はをと申す昔の習なりといふ。喜びて待ちたまふに、その夜しのびやかに女は参りぬ。やがて宮中にとめあかるべくも覺しけれど、女歎きわびければ、もとの家に歸されて、時々忍びて召されけり。これより少將も召し出されて、近習の人数に加へられ、程なく中將

になされけり。世の人口さがなくて鳴門の中將とぞいひける。鳴門のわかめとてよきめ和布に要をの上る所なれば、かゝる異名をつけたりけるとかやとなり。この物語は繪巻物として傳はれる中に讃岐金刀比羅神社所藏のもの有名なり。畫圖品類にこれを繪は隆能詞は爲家といへど、隆能は堀川鳥羽の朝の人にして、文中にある後嵯峨の御代よりは百年ばかりも古ければ、この説固より信すべくもあらず。やまと錦には行廣の畫とせり。文章だけは群書類從卷四百八十二に收む。また古今著聞集建長六年橋成季の自序あり、卷八にこの物語と殆ど同じ一章あり。註釋類には岸本由豆流の鳴門中將物語考證あり、刊行せらる。別になると物語といふを色葉集及び風葉集に引けるが、この書とは別種のものなり、されどいかなる筋のものとも明かには知られず。考證に題名を論じて曰く、この物語の一名なよ竹物語としもいへるは、この中の詞にも見えて、又御歌に、

あだに見しゆめかうつゝか、なよ竹の

あさふしわぶるこひぞくるしき。

などあるによりて、物語の名とはせるなるべし。今考ふるにこの物語を乳母草子、思ひのまゝの日記○編者いふ、この二などにはなよ竹としるしたれば、古くはなよ竹とのみいひて、鳴門中將とはいはざりしかとも思はるれど、予がもたる本にも鳴門中將とし、外の本にも皆しかのみあれば、なよ竹といへるかた古しとは思へど、今書名を改むる事なし。とあり。

考證にまた本書の著作年代を論じて、思ふにこの物語の末の詞にこの後嵯峨院云々とありて、しかも文永の頃えらびし風葉集この集文永八年にえらびし序中なり。にもこの物語の中の歌をのせざれば、後嵯峨院崩御より後の作なる事論をまたず。といひ、また乳母草子文中北條高時の北方のこと見え、にも後普光園院の太政大臣基の思ひのまゝの日記にもなよ竹を引きたれば、後嵯峨の後いたくも後れざりしものなるべしとす。而して古今著聞集にこの物語をのせたることを論じ、著聞集は建長中後嵯峨院のまだ太上天皇にて世にましませし程なるに、その御謚を記せるは謂れなし。こは著聞集の原文にはあらで、この物語は著聞集より後に出來しものなるを、後人がさかしらにかの集に加へたるものなる

べき由にいへり。

黒川春村は古物語類字抄なると物のうちに論じて曰く、かれ中將物門は一名な
よ竹物語とも號して實記なれば、風葉にも加へざるに依て、此集にも省きぬ、但か
のなよ竹は建長のはじめにいてさしかど、實録なれば風葉には載せぬを、故鎌倉
柁園即ち考の考證には、風葉にのせぬをもて、文永後の物とおもひて其説いた
く窮したり。といへり。本書中に出でたる公卿の官位を見るに建長三四年の
間に當れりと考證にもいへれば、春村の建長中の作といへるがよきやうなれど、
さりとて後嵯峨院の世にいます間にその御謚を記すべきにあらざること、また
考證にいへるが如し。或は後嵯峨の帝とあるを後人の追記と春村はするにや。
風葉集に引かぬは實記ゆゑなりとすとも、その他の點に於て由豆流の説いたく
窮したりとも覺えず。

〔二〕

二十四孝

刊一本

大舜、漢文帝、老萊子、丁蘭等世に聞えたる二十四孝を假名文にてしるせるなり、
伽草子後編に收む。二十四孝は元人郭居業のさだむるところと、東見記にいへ
り。

仁勢物語

刊二卷

本書は伊勢物語の文をもぢりて滑稽的に作りしものなり。一例としてのそ第
一章を引くべし。

おかしこと頼かぶりして、奈良の京春日の里へ酒のみにいきけり。その里
にいとなまぐさき魚取赤はらかといふありけり。此おとこかふて見にけり。お
もほえずふる巾着にいとほした錢もあらざりければ、心ちまどひにけり。お
とこの着たりける借若物かりさるものをぬぎて、魚のあたひにやる。そのおとこ澁
染のさるものをなむ着たりける。

春日野のさかなにぬぎしかりぎもの、
さけのみだれはさむさしられず。

となむ。またつぎてのみけり。酔ておもしろきことどもや思ひけん、
みちすがらしどろもぢずりあしもとは、

みだれそめにしわれならざけに。

といふ歌のこゝろばへなり。むかし人はかくいらちたるのみやうをなんし
ける。

かくの如くにして一々おかしことありけりを以て始めたるが、こじつけやう
さしてをかしからず、強ひて伊勢物語の原文にすぎりたるため甚だ無理なるこ
と多し。後年の上田秋成のくせものがたり癩癩談に比すれば大いに劣れるものといふべし。
この書世に傳へて鳥丸光廣卿の作といへども詳ならず。古版本及び貞享三年
再版の本あり。

二人比丘尼

刊一本

下野國の住人須田彌兵衛といふ者二十五歳にして戦死し、その妻十七歳なりし
が、愁歎のあまりその翌年かの戰場に行きて弔ひけり。かくてそこに近き所の

草堂に宿りけるに、その夜の夢に多くの骸骨集りて同音に、抑我等と申すは地水
火風のかり物を、とくに返辨つかまつり、六賊煩惱のたねをたち、十惡の里を出て、
もとの故郷に立歸り、人間の八苦を餘所に見るぞうれしき。」と歌ひけるを見て、
かの妻始めて大いに悟り、浮世の夢の覺めたる心地したりけり。さてあたりの
里のとある家に至りしに、主の女房二十あまりなるが、この妻に向ひて、何方より
何の爲に來りしかと問ふ。妻具さに己が身の上を語りしかば、女房も己が身の
上を明し、われは京都のものなるが、幼き時、人商人にかどはかさされ、東の方の知る
べなき所へ賣られ來て、これよりまた陸奥とやらへ賣り渡さるべき所を、此處に
さる尼公ありしに助けられて留め置かれ、やがて尼公の子の妻となりしに、尼公
も夫もつゞきて失せ、我身一つとなりぬと歎き語り、これも他生の縁ならんとて、
強ひてかの妻をひき留め置きぬ。かくてその年も過ぎて翌年の二月となり、こ
の處を出て立たんとせしに、かの女房また病のため死にけり、妻は歎の中に里
人をたのみて葬らせけるが、心なき里人のことなれば、野邊に捨て、ぞ歸りける。
妻はせめて五七日の間菩提を弔はんと、不斷の念佛怠らず。七日にかの野邊に

ゆきて見れば、花の面影跡もなく、五躰腫れたゞれて恐しげに變れり。二七日に到れば、臭氣たまらず、腫れに腫れてところ／＼の肉もきれ腸も破れて、犬争うてこれを食へり。三七日に到れば、貌もつゞかず、肉破れ散りて蛆わき出て青蛆集る。四七日に到れば、はや臭氣も薄らぎ、骨に残る肉も乾き、蛆も散り、蛆も見えず、たゞ亂れ髪あたりの草の根にまつはる。五七日に到れば、白き骨つがひ離れてちり／＼になりたり。かの妻到るごとくにいよ／＼感動し、遂に山寺に入りて尼となり、諸國修行に出てけるが、ある山中にて貴き老尼をたづねて師とたのみ、道心堅固に、有縁無縁を濟度して往生の素懐を遂げし物語なり。

按ずるにこの書は著者が社會觀を寓したるものにして、人をして現世の一切を夢と見て、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電の觀念を兆し、早く勇猛精進の信佛心を起し、日夜不斷の念佛を懈らざらしめんとて著しゝものなり。かの女房の屍骸が漸次白骨に化する一段は、九相詩を用ひたるが如し。

著者鈴木正三まさみは三州足助の産にして、重次の子なり。通稱九大夫、石平入道また玄々軒と號す。徳川家康に屬して大阪の役に従ふ。また秀忠に仕へ、元和五年、

大番に列し、九年病のため仕を辭して遁世し、明暦元年六月二十五日歿す、歳七十七なりき。なほ委しくは寛政重修譜千五百五石平入道四相について見るべし。この書刊本數種あり、余が藏本は京都寺町二條上町堤六左衛門開板なり。帝國圖書館本は寛文三年板にして二卷あり、列傳體小説史に寛文四年板二冊とあり。延齡涉獵目錄には、二人比丘尼 山田市郎兵衛開板一冊とす、別にその本あらん。なほ別に天保十一年頃に二人比丘尼物語圖會と題して刊行せるものあり。近年活版にて翻刻せらる。

仁明天皇物語青葉の笛の物語を見よ

〔ね〕

猫の草紙

刊一本

慶長七年八月中旬に洛中の猫を解き放つべきよし布令ありしかば、猫喜びて飛び廻るにより、鼠ども辟易して相議し、江州の方に逃れ去る。これより洛中の家

家鼠のあれまはることなきやうになりしことを面白くかきたる物語なり。御伽草子後篇に收む。

鼠の草子

一本

都四條堀河院の邊に鼠權頭といふ老鼠あり。いかにもして人と契をこめ、子孫に畜生道の縁をのがれしめんと思ひたちて、これを家の子あなほりの左近の丞にはかる。左近の丞すゝめて清水寺の觀音に七日の間參籠して宿願をこめしむ。その験にや五條油小路の長者柳屋三郎左衛門の愛女と縁を結ぶことを得たり。然るにこの娘夫の鼠なることを知り、蹄を以て權頭を捕へぬ。幸ひに權頭は家の子左近の丞に救はれたれど、かの娘はいつしか嵯峨の奥に逃れ、また他人と契りけり。權頭このことを歎き、遂に發心して高野山に登り、禪門に入りさといふ物語なり。倭錦に、鼠草子 光信とあり、同物にや。

余また別に鼠草紙といふ繪卷物を見たることあり、斷簡なり。中に京の大佛三十三間堂などの文句見えれば、こは慶長頃のものならん。

〔の〕

のせ猿草紙

刊一卷

丹波國のせ山にましむ權頭といふ年とりたる猿ありしが、その子にこけまるとて藝能すぐれたるが、やがて二十歳ばかりとなれり。一年日吉山王に參らんとして京に至り、東山の邊をそとろあるさしける際、北白河にてうさぎいさのかみの女を見そめ、日吉山王に詣て、この姫を得んことを祈りけり。狐のゐなかどのこゝに來あはせて、その事をき、かの姫は兎のいさのかみの子なきを憂ひ、月に祈りて設けたる子にて、玉よの姫といふなり。わが女はかの家に仕へをれば、幸のつてあり、われ文通の使をなさんとて、これより狐のゐなかどの媒をなして、遂に契を結ばせけるが、後にはかの姫を迎へてのせ山に歸り、めてたく榮えける物語なり。御伽草子後篇に收む。

〔は〕

判官都ばなし鬼一法眼
を見よ

寶滿長者

刊一本

天竺摩伽陀かた國に寶滿長者すいほうの靴麝香の犬せんざいの皮衣せんくわうの玉の四種の寶をもちけり。時の大臣これを聞きて帝に奏しければ帝御覽あらせられんとて左大臣を勅使として長者のもとに下されぬ。長者快く聖旨を承りけるが大臣長者が館の内を巡り覽ける中に寶塔の中に黄金の箱三つ納めたり。大臣これを見んことを求めけれども長者肯んぜず帝の前に携へ行きて開かんといひ遂に四種の寶と黄金の箱とを齎して大臣とともに參内す。帝四種の寶を見て大いに悦び更にかの箱を開き見んことを望まらる。長者帝に精進齋を望みさてかの三つの箱を開くに、一は法華經ぶつもんの明文めいぶん二は六字の名號三は父母の頭にてこれにつきてその功德を説き佛徳を稱へしかば帝も隨喜渴仰の念を起しかの四種の寶を返し長者に千郡を與へて左大臣となす。長者いよく

慈悲を施し堂塔を興して築えたりといふ物語なり。刊本の終に寛文五乙巳年仲秋吉辰中村五兵衛板行とあり余が藏せる古寫本は意義は同じけれども文は甚だ相違せり。

化物草子

一卷

妖怪談五則をあぐ。(一)秋の初の夜兵衛府の官人籠を捲きて庭を見居たるに身の丈立いと細く高さものと低くて横さまに廣く肥えたるものと出て來て相撲をとる。不思議に思うて誰ぞと呼ぶにその聲に驚きて荻薄の茂れる中に逃げ入りぬ。またの夜も前夜の如くあらはれ出て相撲をとる。かの人側なる矢おつとりてこれを射るにたしかに手筈して倒ると見たれば人を呼びて見しむるにその物なし。夜明けて後自ら化物の倒れし所をよく見れば大きなる蟻と蛸とがとり組みたるまゝ死しぬけりとなん。(二)九條わたりの荒れたる家にかすかに暮せる女栗をくひぬたるに對ひの炭櫃の邊より生白き手を出してこれを乞ふやうなれば怪しみながらも與ふ。また乞ふまた與ふかくすること

四五度に及びて後は手を出さず。不思議に思ひて炭櫃を取り上げて見るに、白く小さき杓子のちちはさまりてあり、とらせし栗もそのまゝありけりとなり。(三)ふり腐りたる銚子が法師に化けたる話。(四)蠅のひさげの水に落ちて死なんとするを、或人取り上げたるに、その蠅飛びて傍に晝寝したる人の鼻の穴に飛び入りぬ。その人目さめて、唯今海に溺れんとするを助けられたりと夢みたりと語りぬ。(五)昔、さる山里に獨住しける女、心寂しく思ひけるまゝに、門田の案山子に對ひて、己が夫にもなれかशीといひけり。ある夕暮、揉烏帽子着て弓矢持てる男の來りて宿からんといふにぞ、とゞめてとかく語らひける。それよりこの男夜な夜な通ひ來りしが、一夜曉に立ち出て行くとして、鳥も目馴れぬ、我身のさまもあらはれぬべし。」と獨言して去りぬ。女この詞を訝しみて、次に來れるときに、絲をつけて行方を繋いで見けるに、かの案山子なりけりといふ。これらの怪談を集めたり。

本卷は繪卷にて存し、書は飯尾彦六左衛門尉常房、繪は土佐光茂なり。倭錦土佐光茂の條に「カ、シ化繪卷物、飯尾常房とあるはこの繪卷をいへるかはたその

中案山子の條のみを別ちて一卷としたるものか。大倭畫名卷就に「傳云光茂、和葉家藏」化物雙紙とあり。土佐光茂は享祿頃の人なり。その草子もまた足利季世の作なるべく、文章簡にしておもしろくかゝれたり。新編御伽草子下卷に收む。

橋姫物語

寫壹軸

昔、中將なりける人都を去りて浪華邊に住みけるが、二人の女房をもちけり。一人を宇治の橋姫といふ。橋姫懷妊し、惡疽になやみて日に瘦せ衰へければ、中將これを憂ふ。この妻七色の和布を欲して、これを求め請ひければ、中將その物ありとも覺えざれど、海上遙に出て、これを求む。されどその物も得られず、日もまた暮れかゝれば、心ならずも笛を取りて青海波を面白く吹きけるに、俄に浪風起り騒ぎて、中將うつし心もなく、夢幻の境に入る。

家には橋姫夫を待ちたれど歸り來らず。日數積れば心地日を追うて輕快し、安産もしたれども、中將の消息は少しも聽き得る所なし。今日は歸るか、明日は來るか、形見の子を養ひて、待つと三年に及びぬ。或日心のゆくまゝに海邊を辿

りて、竊に中將を捜し、に日暮れて途寂しく、今更如何ともすべからず。遙に火光の見ゆるをあてに尋ね行けば、あやしきあばら屋あり、一夜の宿を求めけるに、主と覺しき年老いたる姥快く諾ひて、橋姫をひき入れ、さまざまの物語しけり。姥さていふやう、御身の尋ね歩かるゝ心中悉く覺りぬ、實をいへば、中將は龍王に捕へられ、その婿になりて冊かれ給へど、深く故郷を慕うて、爵々の情慰むるに由なし。姥こそは龍王の草をあづかる者なれ、今夜も中將この家に至りたまふべし、御身の心いと惜しければ見せ奉るべし、我身暫く外出すれば、決してこの中を見給ふなとて、何物か入れたる鍋を火の上に懸けて出て行きぬ。鍋の中沸きかへりて、外にこぼるゝ物あれども、橋姫姥の誠を守りて、手をだに觸れず、唯中將を見んことをのみ待ちこがれけり。霎時ありて姥歸り來り、今中將來り給ふべしといふ、間もなく世間騒がしく、恐しげなる聲さへ聞えて、中將みるめ、嗅ぐ鼻、手長、足長等に擁せられて入り來る。顔色憔悴して、ありし面影も見えず、みるめ、嗅ぐ鼻等盃をすゝむれど、手にも取らず、

狭席に衣かたしきこよひもや、

われを待つらん宇治の橋姫。

と返すく、唱ふるのみ。既にして隨從の妖物等立ち去りしかば、中將はじめて橋姫に會ひて、かひなき身を歎き、折々は此處に來りて吾を見よといひて歸りぬ。姫は見果てぬ夢の名殘惜しく、泣きぬたりけるに、夜も明けければ、姥はまたこそ來たまへとて、道を教へて歸しぬ。

橋姫は今一人の女房も同じ心に思ふらむとてこの由告げれば、その女房も喜びて、海邊に行き、かの姥がり音づれぬ。姥はまた火の上にかけてたる鍋の物見給ふなとて立ち去りしに、あまりに沸き返りてこぼれければ、かの女房何物ならんと見たさに蓋をとりて見れば、白々としたる綿のやうなる物ばかりなり。女房さり氣なき顔して居たりしが、姥歸りて御身は約を違へ給へりと詰る。さりながら今に中將來るべしとて、隙より伺はしむるに、果して昨夜の如く中將は來りしが、狭席にの歌のみ返すく、口吟みければ、この女房宇治の橋姫とのみいふは、吾を少しも思はざるにやと、あまりの嫉さに門を出づれば、家も人も消えうせて、茫々たる島の松原にたゞ板屋貝一つある傍に居たるなり。夢のさめたる心地

にて、こはいかにと思へども、おのれ姥の言に背きし咎あれば、泣く／＼家に歸りて、橋姫に事の由を告げり。その後橋姫また彼處に行きけれども、家の迹もなし、さても由なきことを他に漏して、夫と相見る期なきを泣き哀しみけりとぞ。宇治の橋姫の傳説は古く平安朝にあり。「さむしろに衣かたしきの歌は、題しらず」として、今古集に出づ。伊勢物語には、戀しき人にあはてのみねんと下の句を取りかへたり。宇治橋のもとに姫大明神とておはするが、其もとへ宇治橋の北におはする離宮と申す神の通ひ給ふといひ、又住吉大明神の宇治の橋姫に通ひ給ふといへり。八代集抄古 宇治橋畔の橋姫社の縁起につきては、其説一ならず、一説云昔嫉婦アリ、毎夜宇治川ニ來テ、水ニ湛ヒタリ現身鬼ニナラント祈リ、遂ニ鬼トナル、然メ人ヲ惱ス故ニ、其靈ヲ鎮メ祭ルト。山州名迹といへり。しかれども古今の歌には嫉婦の義なし、古今にまた、ちはやぶる宇治の橋姫なれをしぞ、哀れとは思ふ年のへぬれば、の歌あり。廣益俗説辨卷十にまた宇治の橋姫が嫉妬の神にあらざる由を論じたり。

宇治の橋姫を物語に作れるは早く宇治橋姫物語あり。色葉集三卷八雲御抄一巻顯

注密勘四卷十等に見ゆ。その趣向は顯注密勘に、昔二人の妻ともたりける男、本妻のつはりして、七磯の和布を願ける、もとめに海邊に行て、龍王にとられて失にけるを、本妻尋行ける程に、濱邊なる庵に宿りたりける、おのづから此男にあひにけり、此歌をうたひて海邊より來れりける也。さて事のやうをいひて曙ければ、失ぬ、此妻なく／＼歸りにけり。今の妻此事をきゝて、はじめのごとく行て此男をまつに、又此歌をうたひて來れば、我をばおもひ出ずして、本妻を戀にこそとねたく思て男に取懸たりければ、男も家も雲などの消るが如くに失にけり。世の古物語なれば委不可書」とあり。又云く先人藤原俊成幼稚のときはし姫と云し物語をめのとのよみてきかせしが、あはれにおぼえて落涙、成人の後みばやと思ふに、その物語不尋得其に此歌の歌なりは有し也と申されき。云々」とあり。因つて黒川春村は橋姫物語は、保安、天治のころほひ迄は世の中に流布せし物にて、其後は失けるなるべし、風葉集に此歌の見えぬも傳はらざりし故にてもあるべし。古物語類字抄といひ、畫圖品目に、橋姫物語一卷、畫者姓名不傳、詞白河三位雅喬卿とあるを、この繪卷はいまだ見ざれど、必ず後代の物なるべし。古物語類字抄余こゝといへり。

にいふところの橋姫物語を採つて考ふるに、その趣向殆ど同じ、密勘に七磯の和布とあるは色葉集に七尋とあるが正しかるべく、この書に七色とせるは、いづれも國訓相肖たれば訛れるなるべし。又この繪卷の詞書及び詞を見るも、徳川初世の物にはあらず。その詞の一二をいへば、

「あなあさまし、時々こよとありしに、今はこの後かなはてやあらん、返々もうらめしや、くやしさを申ばかりなく候よ。

うけ給はりしやうに、夢などの心ちして候へども、宇治のはし姫とのみ候つる程に、うらめしさにふといで、候へば、かきけすやうにうせて、うはの空に家もなき島の松原に、いたや貝は候しよ、これはいかにと思て候へば、夜あけて候しよ。

語法到底徳川時代のものと思はれず、室町時代にもあるべく、或は鎌倉時代にもあるべし。俊成が成年の後、尋ね得ざりきとて、世に一本をも傳へざりきとは斷ずべからず、博覧の黒川春村が見ざりきといふを以て、この繪卷なしと斷ぜば、大いなる誤なるに庶幾し。今片野邑平氏の祕庫にある橋姫物語の繪卷物は、住吉具慶の筆なりとの事なり。余は現存の橋姫物語は語句に多少増修變更せられたる所あらんも、なほ原本について次第に改まりたるものならんと信ず。徳川初期に至りて具慶に書かしめんがために、新たに詞書を偽作せしものにはあらざるべし。

橋辨慶

寫一卷

牛若九十四歳の春は父義朝の十三年忌に相當すれど、菩提を弔はんにも力及ばず、せめては都五條の橋に出て、平家の侍の往來せんを千人斬して供養せんと思ひて、鞍馬寺を出てけり。かくて五條の橋に待伏して、平家の兵と見れば躍りかゝつてこれを斬り、三日三夜の間七百余人に及ぶ。この事忽ち評判となり、五條に變化の物現れて往還の人を失ふとて、また橋を過ぐるものなし。されど稀には田舎より上りてまだこの風聞を知らぬものもあるを、一人二人と斬り、七日七夜に至りては九百九十九人に及ぶ。今一人といふ折に、西塔北谷の武藏房辨慶こそ現れ來れ。

抑、この辨慶は熊野別當湛増が子なり。湛増子なきを愛ひて熊野權現に祈りけるに、ある夜その妻鐵くろがねのまるかせを左の袂に賜はり入ると夢みて孕む。十月にして産なく、三歳を経てやう／＼誕生す。生るゝや否や、池の汀に口を嗽ぎて母の前に至り、頭をつけて生みの恩を謝す。湛増驚き恐れてこれを害せんとせしが、側の者に止められて遂にこれを山奥に棄てしむ。二十日ばかり過ぎて後湛増人をして見しむるに、かの兒狐狼と戯れ遊びて、何とて吾を父の許につれ行かざるぞといへるに、その人驚きて逃げ歸りぬ。その頃都五條の辨新大納言また子なきを愛ひ、熊野に詣て、祈請せるに、この山奥に入り子拾ひて養へよと夢想の御告あり。かくてかの兒は大納言に拾ひ育てられ、名をにやく一といふ。にやく一七歳の春、叡山の慶心法印の許に預けらる。一字を教ふれば千字を知りて一山の衆徒慶心に迫りて、にやく一を追はしむ、にやく一俗體のまゝにして追はるゝを口惜しと思ひ、獨り根本中堂に入りて剃髮し、養父新大納言の辨の字と師匠慶心の慶の字とをとりて辨慶と名のり、立ち出づる途にて袈裟衣を奪ひ

て着、新大納言の家に歸りぬ。

その後は辨慶嵯峨野の邊に住ひしが、悪行のみぞ慕る。もと叡山にありし頃、衆徒等の剃刀を夥しく取り、竊に三條小鍛冶宗近に頼みて大薙刀をうたせけるが、この薙刀の稽古すとして、人を殺傷すること夥し。こゝに五條の橋に千人斬ありとき、辨慶あらん限はかゝる振舞せさせんやとて、衣の下に黒革威の鎧着て、薙刀杖に五條の橋に至る。河原を見渡せば、千の骸は小山を築いたる如くにて、清き流も紅なり。流石の辨慶驚き恐れてひき返しけるが、仇に背を見せたりといはれんも口惜しとて立ち歸り、牛若に出逢うて闘ふ。遂に辨慶薙刀うち落され、牛若に降参し、七生まで郎等たらんと主従の契約して、鞍馬の東光房に送り届け、己は嵯峨野に歸りて行ひすましけりとぞ。

本書は辨慶物語の記事と異なり。熊野別當湛増辨慶物語にはへんしんとすのこと、辨慶の生るゝさま、大納言に拾はるゝことなど、畧同じけれど、細かきところは違へること多し。五條橋にて牛若に出會ふ條も、かの物語には辨慶が書寫山堂塔の再建につきその釘料にとて、都に出て、平家の侍の太刀百本を奪はんとし、最後に義經

の太刀を奪ひ取らんとして、闘ひ負くることゝしたるに、これには牛若かへつて千人の首を斬らんとすることにしたり。なほ辨慶物語の條参照すべし。又謠曲にも「橋辨慶あり、日吉四郎次郎安清の作といひ傳ふ。辨慶五條天神に宿願ありとて、丑時詣をなさんとし、五條の橋に辻斬をなす屈強の少年ありときゝて恐れしが、心を勵まして行き、牛若と闘ふことに作る。本書は藤井乙男氏の藏本による。

長谷雄雙紙

寫一卷

古物語類字抄に長谷雄卿物語の目をあげて曰く、此物語は紀長谷雄卿朱雀門の樓にのぼりて、鬼神と雙六を打たりしに、美女をかけ物にしたりけるが、長谷雄卿勝にければ、いみじき女をえて寵愛のあまりに、七十五日のち會べしと、鬼神のいましめたりしをも思はず、日ならずして寐たりければ、その女とみに水になりて流れうせけるよしをかけり、畫工は土佐行長といふ説ありと。なほ同書には禁秘抄階梯を引きて、其うちに守覺法親王延久、二に、爲長云、朱雀門鬼者、鬼間鬼

王所變也云々、彼鬼王青色一面也、長谷雄卿記有之。云々とありといへるを以て「長谷雄記は恐らくは件の草紙なるべし。」といへり。果して然らばこの書は建久以前のものなるべしといへども、いまだ然りや否やを知らず。その摹本帝室博物館にあり、奥書に、右紀長谷雄卿之一卷、應何某朝臣之需、摸寫焉、原本有故、外人不易窺、故不能歷、他方之審定、然竊爲飛驒守惟久之筆、而可者乎、文化丙寅冬、粟田口直隆誌之印とありとぞ。

鉢かづきの草子

二卷一本

中昔河内國交野の邊に備中守さねたかといふ人ありけり。つねく子なきことを歎かれしに、姫一人生れければ、喜大方ならず。北の方何思はれけん、この姫の頭に重ねなるもの戴かせ、肩のかくる程なる鉢をさせ置かれ、長谷の觀音に参りてこの姫の末繁昌を祈られけり。姫十三の歳母失せぬ。父姫の頭に戴ける鉢をとらんとしけれども、吸ひつきて取られず。その後後妻を迎へて子を設け、この妻姫のことをさまざまに讒しければ、さねたか怒りて姫を野原の

中に捨てさせけり。姫歎き悲しみ、川に入りて身を投げ、れども、鉢のある爲に沈まず、漁船に救はれてまたさまよひあるさけり。こゝにこの國の守山蔭三位中將といふ者これを憐みて、湯殿の火たきとして家に置きけるが、その家の人々かたは者として卑しみ侮りけり。中將の四男宰相ある日湯殿に來り、姫を見て説きすかし、遂に契を結びて、しげく通はれぬ。宰相の母之を聞き、宰相のかゝる賤しきかたは者に契をこめけることを悲しみ、他の兄君達と嫉くらべをしたらんには、かの鉢かづきも自ら耻ぢて何處へも出て行くとならんと思ひ、この催ある由宰相に告ぐ。宰相も如何せんと姫に語り、終に諸共に何處へか落ちのびんとしける時、姫の頭なる鉢落ちて、中より十二單の小袖を始め金銀にてつくりたるさまぐの器出てたり。宰相は姫と共に喜び勇みて、嫉くらべの席に列り、かの十二單を装ひ着て、なほ鉢より出てたる物を引出物にす。兄君たちの嫉も美しけれど、この姫には及ぶべくもあらざれば、三位中將も北の方も驚きて、これより俄に姫を愛し、宰相夫妻に過分の所領を與へ、兄君を越えて總領とせられけり。こゝにまた姫の父備中守さねたかその後家衰へ、後妻との仲も宜しからざ

れば、やがて逃れて修行に出てしが、今は姫につらくせしとを悔み、長谷の觀音に詣て、今一度邂逅させ給へと祈る。折節宰相は帝より大和、河内、伊賀の三國を下されければ、喜のため妻子を携へて、長谷の觀音に詣てければ、こゝにて姫は圖らずも父さねたかに再會す。宰相は姫の素性を知り、己が子を副へてさねたかに河内の國を與へ、自ら伊賀の國に御所を構へて居り、末繁昌しける物語なり。末にこれ一に觀音の利生なりとて、この物語を聞人は常に觀音の名號を十へんづゝ御となへあるべき物なり。といへり。この書萬治二年の刊本あり、そのほか又延寶板と元祿板とあり、延寶板は末に、延寶四丙辰霜月吉日、萬屋莊兵衛とあり、元祿板は奥に、元祿十一戊寅年五月吉日、吉野屋權兵衛板とあり。延寶板は板木残りて今京阪にて新たに摺り出せり。お伽草子前編にも收めたり。

初瀬物語

一卷

奈良の京春日の里に何某の得業といふものあり。娘一人もちけるを、都の方よりもさるべき中將、少將など妻にと望めど、いづれも心に叶はずとて、應ぜず、春秋

二季には春日の社に參籠せさせて良縁を祈らせけり。こゝにある女房京都の
 ざる貴き人の子の權大納言、春日の示現によりて縁を結ばんことを望むよしを
 いひて仲立しけるに、得業欺かるゝとはつゆ知らず、明神の御計らひ畏しと一も
 二もなく承引して、妻もろともに娘をつれて京に上れり。さて權大納言とてこ
 れに通へるは、誠は若狹守といふものゝ子にて、大夫といふ無頼のしれものなり。
 仲立せし女はその妻なるが、夫をもてあつかひて、かゝる企をなし、その隙に乗じ
 て家財など奪ひて、片田舎の密男のもとに落ち延びけり。得業やうく謀られ
 たることを覺りて、娘の不幸を歎き、憂憤して死す。娘は父の忌に託して奈良に
 逃れ歸りしに、京の大夫の許より屢、文をおこせて歸京を促す。娘悶へ苦しみて
 春日明神を念ず、明神夢想の御告ありていふ
 行末をなをたのまなん、うきものと

世のことはりを見する計ぞ。

と、娘はなほ神も捨てたまはじと心強きものから、かくてあるべきにあらざれば、
 母と共に初瀬の知るべに身を懸す。大夫惡黨を語らひて、その留守宅を襲ひ、宿

守の法師にいひこめられて逃げ歸れり。娘は終にその叔母なるものゝ前齋院
 に仕へて宰相君といへるに便りて、その宮に仕ふ。宮の叔母は左大臣の北の方
 にて、權大納言の母なれば、權大納言もこの宮に親しく出入せらる。いつしか娘
 を見て深き契を結びしが、娘は更に夢想の御告によりて罪障の深きことを知り、
 齋院の宮を遁れ出て、東山の僧の許に至りて剃髮し、嵯峨の小倉山の麓に草庵を
 結びて行ひすまし、目出たく往生を遂げたることを敍し、これ春日大明神の殊更
 に様々の世の憂苦を見せて、速に火宅を脱れしめんと圖り給へるなりと説けり。
 文章優雅の所なきにあらねど、概するに拙劣なり、室町時代の作なるべし。續群
 書類従卷五百八に收む。

花子物ぐるひ

三本

代睡漫抄に云ふ、堀川院の御宇美濃國野上の長がもとにやしなはれし花子とい
 ふ美人、吉田少將これさだといへる都人に契をこめ、のち狂女となりてさまよひ
 あるき、再び少將にめぐりあうて、終をよくせし物語なり。刻梓年未詳、寛文比の

書風なり」とあり、余未だこれを見ず、案ずるに斑女物語と同じ書ならんか。(斑女物語の條を参照せよ。)

花づくし

一本

延齡涉獵書目に「花づくし 古寫本一冊 くてふといへる人遁世せしに、いろ／＼の花の精來りて、菩提の道を聽聞せし事をしするす。」とあり、余未だこの書を見ず。

花の縁物語

二本

こゝにその本をほき氏○原本のまゝにしるす、本多といふ確にや。なにがしの守のうち左京といふ男あり。容貌器量共に勝れしが、ある年主君京都警固の番にて上洛せられしに扈從したり。東山に遊びし折、美しき娘を見そめて、戀の病となりしを、その從者これを慰めて、かの女の家の隣に住める老人は古き知人なれば、彼が家に移りたまへ、心を運ぶによき便もあるべしとすゝめしかば、左京これに移りしに、その家の妻仲立をなして、かの娘を説き、終に左京と深き契を結ばしむるに至る。かく

てなにがしの守も最早役済となり、東下することとなりたれば、左京も切なる思を忍びてこれに従ひ還れり。かの娘思ひこがれて重き病となりしを、乳母の女そのゆゑを知りて父母に告げしかば、父江戸に下り、左京に逢ひて物語る。左京もよくこしらへて主君に暇を乞ひ、二人うちつれて京に上る途中、伊勢の土山に至りて、今日にて京に入らんとする折、京より使來りてかの娘遂に死したるよしを知らず。左京は上京して、かの家の檀那寺に詣り、戀人の墓前に自殺す。ここに石塔二基の並びたちたるはこの二人を葬れるなりといへり。この物語は鳥部山物語を聊か作り直したるのみ。たゞ彼は男色のことなるを、これは男女の戀に作れり。その文章も大方鳥部山物語をもととして綴りたるなり。今一節を抄して兩書を比較せん。

(鳥部山物語)月日を送りけるほどに
年もかへりぬ、空のけしきなごりな
くうらゝかに、雪まの草もあをみい
て、をのづから人の心ものびらか

(花の縁物語)上のその年も過て春に
もなれば、雪間の草も萌出、みやこに
近きよもの山のはも霞のよそにな
り行ころより、まだ見ぬさきに俤に

に……いつしか都ちかきよもの山の端霞のよそになり行ころは、まだ見ぬ花も俤にたちて、おなじ心の友どちうちつれ、北山の方へとこゝろざしける道のほどに、老たる、わかき、たかき、いやしき、行來る袖も色めきあへる中に、さはやかなる車かたへの木蔭によせて、つきしたがふをのこなどさしよりつゝ、いとあかしき花のけしき御らむせよ、すみれまじりの草もなつかしくなどきこえければ……」

立し花の梢にさそはれて、いざや東山に物し侍らむとて、友どちうちつれまかてければ、老たる、わかき、たかき、いやしき、ゆく來る袖も色めきあへる中に、いとさはやかなるのり物二三挺かたへの木かげにかきすべ、つきしたがひし女房など、さしよりていとあかしき花のけしき御らんせよかし、色々の草どもなつかしくなど開ゆれば、をのく……ありけるよそほひ何れもあろかにはあらぬ中に……」

著作年代は詳ならねど、寛文頃若しくはこれを距ること遠からざる頃なるべし。刊本の奥書に、器之子、寛文六丙午年三月上旬書寫とあり。記載の體裁を見るに、

器之子は著作者の名なるが如くなれども、或は謄寫せし人の名ならんかとも知らず。

花の名残

刊五冊

武藏淺草の里に藤波某といふものありけり。その子に内藏助とて容貌いと美しきがありしを、十四歳のとき、父京都紫野なる伯父の僧のもとに託す。一日内藏助鷹ヶ峯の吟竹庵に行ひすませる桂山といふ老尼のもとに遊びに行きしに、折節仁和寺の邊に住まへる藤原某の女あてるのまへのそこに來あはせたるを見初め、これより思ひ焦れて、終に桂山の弟子桂壽尼を介して思を通はせ、深き契をこめけり。こゝにまた内藏助の叔父の北越にあるもの、内藏助を養子にせんと望みしかば、背くこと能はずなく、あてるのまへに別れて越路に下りしに、途中より風の心地となり、叔父のもとに至り着くや、病いよく篤くなり、終にはかなくなりぬ。あてるのまへこれを聞きて悲しみに堪へず、もしつといふ侍女と桂山のもとに至りて尼とならんとし、ある夜家を逃れ出てしに、道を迷ひて清

瀧川の邊に出でぬ。夜も明けんとすれば、追手に見つけられんことを恐れてこの川に入水しけるに、観音老翁となりて現じ、二人を救ひて吟竹庵に導く。二人桂山にたのみて尼となり、おてるのまへは内藏助の法號雪嶺梅吟居士に因みて梅心院妙吟と稱へ、もしつは妙句といひ、ともに佛道修行に餘念なかりしが、やがて西國三十三箇所の観音を巡禮し、信州善光寺に詣て、江戸を経て鎌倉に草庵を結びて行ひすませることをしるせり。

この書の序文に云く、此物がたりは、或やんごとなき御方の御母公江の島に詣て給ひ、鎌倉に御逗留有しに、二人の住ける柴の庵を尋給ひて、しめやかなの御物がたりのつゐて都にての事ども聞召及ばれぬ。なをまめやかにと御尋有しに、かたくなみ申されしを、懺悔に過去の罪を滅すと、しゐて望ませ給ふにより、辭しがたくや有けむ、もしつの尼妙句が是をつゝりて御歸府の後御なぐさみ草にとてまゐらせあげぬ。題號を花の名殘といふは、此書の序にはなの名殘の青葉と書出せるをとりて、母公の號給ひけるとぞ。つれづれなるまゝに日ぐらし硯にむかひてといへる草紙になずらへしるべし。とあり。かく實事譚の如くいへど

信じ難し、またさる女の作とも覺えず。話の筋のはじめの程は、好色花のちあひに似たり。刊本の奥に、天和四歳子正月吉辰日、江戸神田新草屋町西村半兵衛洛陽錦小路新町西エ入町永田長兵衛梓行とあり。

濱出草子 一名蓬萊山

刊一卷

鎌倉がもと沼なりしを、和田、畠山總奉行となり、これを埋め、これを經營せしことを説き、さて頼朝大佛供養のため上洛し、その士二十人の官を請ひたるが中にも、梶原景時の左衛門督に任せられしを、嫡子の源太景季に譲りけるに、源太喜びて急ぎ下國しければ、大名小名これを祝ひて、三日の間思ひくゝに數寄をこらせるさつしやう雜餉をつくしけるが、殊に三日目には江島詣にことよせて濱出をなし、將軍の北の方も出づれば、船の上に舞臺を設け歌舞を催して歡ぶことをしるせり。この草子も伽草子後篇の中に收められど、幸若舞草子三十六番の一にも入れり、後に幸若の曲にては蓬萊山と呼ぶ。

蛤の草子

お伽草子後篇に收む、はまぐりはたおりひめと同じものにしてたゞ男主人公のおしうをしらとしたりなど違へる所あるは、轉寫の際にいづれかゞ訛れるなり、文章また多少の相違あれど、同書なりと斷言するに憚らず。

はまぐりはたおりひめ

一名はまぐりひめのまうし

刊二本

天然麻加陀國にちしうといふ貧しき人あり。年四十になれども、未だ妻を迎へずして、一人の母に事へ、よく孝行をつくしたり。ある時飢饉にて餓死する者多かりしが、ちしうもこれに苦しみ、僅に浦に出で、魚を捕へて母を養ひけり。ある日また釣を垂れしが、一つの魚も釣れずして、海蛤をつり上げたれば、これを棄て、處をかへて釣るに、いつも同じき海蛤のみ釣り上げたり。これも契淺からざるなるべしとて、舟の中に投げ入れ置きしに、海蛤俄に大きくなり、金色の光を放ち、中より美麗なる十七八歳ばかりの女あらはれ、われを汝が宿につれ行けよ、互に業を營みてくらさんといふ。ちしう否みけれども聽き入れざれば、家に歸りて

母の許をうけ、さてこそかの女を家に伴ひけれ。此女がちしうが妻とならんことを望むを、母も喜びて諾ひ、吾子に妻あはす、道俗男女これを聞き、ちしうの家に不思議のふり人あはしけりとて、米を齎し來りければ、一日に白米數石を積みたり。かの女房また麻を求めければ、皆々速にもちよりたり。かの女麻を以て苧をうみ、つむぎて絲として、さて機あらんずるほどして、機屋を作らせて入りけり。機あるほど誰も見るなとて、女房は籠りけるに、又一人若き女入り來て共に機をある。法華經二十八品をあり入るゝその聲こそ、いふばかりなく尊けれ。さてありあがりたる布を女房ちしうに託して、鹿野苑カろくやあんの市にて賣らしむるに、供人三十三人つれたる老人來り見て、それ求むべしとて、ちしうをその殿に伴ふ。殿は珠玉を以て作りなし、異香薫じ、音樂聞ゆ。老人は布の代にとて錢三千貫を與へ、七徳ほうしゆの酒七杯を飲ませて、この酒の功德によつて七千年の壽を保つべし、これもひとへに孝行の徳なりと示す。さて家に歸れば、女房吾は南方普陀落世界より使に參りたるものなりとて、白雲に乗りて昇り去りぬ。ちしう親子は幾久しく富貴繁昌しけりといふ、孝行の徳を贊したるめてたゞ物語なり。

はまぐりはたおりひめ

はまぐり姫の草子

葉室中納言

班女物語

三四七

室町季世の物ならんか、刊本の奥書に、明暦貳年三月吉日、林長右衛門板とあり。御伽草子前篇に收めたる蛤草子も同じ物なり。(蛤草子を参照せよ。)

はまぐり姫の草子 始はたあり
姫を見よ

葉室中納言

刊一本

帝國圖書館にあれども、内容は全く花鳥風月なり。思ふにこの書表紙も同館にて新たにつけたるものなれば、購求の當時題籤を失ひをりしを、かゝる名を設けて附せしにあらじか。そは卷首に「はぎはらのみんの御とき、みやこにしやまはむろの中納言の御所にて云々とあれば、これをそのまゝ題としたるならん。(なほ花鳥風月の條を参照すべし。)

斑女物語

三卷一本

堀川院の頃、都北白川の邊に吉田少將是さだといふ人ありけり。勅命を蒙りて

東國に下る道に、美濃の國野上の里の長者の許に宿る。この家に花子といふ女あり、長者是さだをもてなし、花子を座に侍らしめて管絃を奏せしめ、また立つて舞はしむ。是さだそのやさ姿にあくがれ、さまざま手をつくして、終に契を結ぶ。發するに臨み、再會の印として互に扇を取りかはしぬ。これより花子は明暮少將を戀ひ慕ひ、記念の扇をのみ詠めて、纒に憂を遣りければ、人々漢の斑婕妤に比して、斑女と呼ぶ。その頃年々都より東に下る富貴の商人あり、花子を見て妻とせんことを求む、花子肯んぜず、長者怒りて花子を追ふ。花子狂女に装ひて都に上り、記念の扇を篋につけて市中を狂ひまはる。是さだは東よりの歸途に、野上の長者の許に立ちよりたれど、花子の逐はれし後なれば、本意なくて都に上りぬ。ある日糺の社に參詣しけるに、この社内にて花子に會ひ、記念の扇を示しあひ、これを伴ひて歸り、やがて二人の男子を設け、目出たく榮ゆる物語なり。全篇謠曲斑女によりて作りしものにして、徳川初世の作なるべし。卷首に、人間は申におよばず、はやしにあそぶてうじやくはうそひめに戀の歌をよみ、草葉にすだくむしけらは玉むしに身をこがす」とあり。うそひめのことは鳥歌合に

みゆ、あだ物語にもあり、蟲類の玉蟲を戀ふことは玉蟲草子に出づ。又花子の舞を舞ふ條に、千草の花むしろを野邊より野邊にのべしきて、わりごもひらくはなの名のまじゆさけをあたくめて、へだてなきどちさしむかぬ、あほくのみたるいとあかし。御肴何がななどいひて、あたりにはぎのはなのゑだもたはくに露けきを、一もとあり、べのうへに置いて、今ひとつとてしむしはの、しばくめぐるさかづきにゑい草臥てぬ、せんととあり。織部盃のことをいへれば、徳川時代の作なること明けく、しかも萬治頃の作にやあらん。花子ものぐるひといふは是と同本にや。(花子物狂の條を参照せよ。)

〔五〕

火おけのさうし

刊二本

昔、ある片田舎に尉おぼしと姥うばと住みけり。尉火桶を愛して日夜傍を離さず、姥これを嫉みて、尉の留守に火桶を碎く。尉歸りて姥を責め、和歌の功德を語り、鶯蛙も歌をよみ、鬼神の心もこれが爲に和らぐ、昔俊成卿も桐火桶を抱きてこの和歌を案

ぜられたるなりなど語る。姥また物ねたみの例などを語り、兩人遂に和睦して、たゞなに事もゆめのうちのゆめて電んくわう光て期露うろのさかひ、是ほどあだなれば、なに事もすて、かの世をねがふべし、此火(マ)を成けもすなはち佛やうぶつとく得だつ脱のため智の識せんちしきなりとこそ申けれく。といふに結べり。奥に、寛文六丙午年八月吉日、松會開板とあり。

美人くらべ

刊二卷

昔、丹後少將といふ人器量才藝世にすぐれ時めきしが、未だ定まれる妻なければ、これを索めしに、五條宰相の娘二人ありて、姉をもせの姫といひ、先妻腹なるが類なき美人なり。妹をしらんの姫といひ、後妻腹にして、また美人なれども姉には劣れり。少將これを聞きて、一目見んとて、のもせの姫の乳母ゆげいの局、しらんの姫の乳母しちくの局に頼みて、それく文を通はす。やがて宰相の北の方兩女を具して清水に詣づるを、少將見てのもせの姫の方に意を通はせ、遂に忍びてこれと契る。北の方かねて己が腹なるしらんの姫を以て少將に妻あはせん

と思ひしに、この由を聞きて憤り、家の侍を語らひ、もせの姫をして月見に出でしめ、途に奪ひてこれを殺さしめんとす。侍ども命のまゝに姫を奪ひて、瀬田の橋に至り、湖水に投ぜんとせしが、俄に心改まりて、姫をして逃れしむ。熊野参の尼姫の途にさまよへるを見て憐み、己が郷里なる信濃國伏屋の里に伴ふ。都には父宰相姫の行方知れざるを歎き、密かに弔の儀式にて厚く供養を行へば、北の方も蓼を眼にすりつけて涙を流し、まことしやかに偽り泣きけり。(以上上巻) 丹後少將も姫のことを聞きて歎き、その生死の程を知らんとて、攝津の住吉の社に七日参籠して祈請せしかば、夢に、きみがこふ人はこれよりくに遠く、あづまのかたをたづねても見よ。」といふ歌を示現せらる。少將山伏に姿をかへて、東國に下らんとし、途に大津の濱にて便船をたづねしに、住吉の神船こぐ翁となり、少將を導きて東國に下り、かの伏屋の里に至りて、彼處の家を尋ぬる人は居るべしと教へて、姿を隠し給ひぬ。少將この家を尋ね、姫に邂逅してこれを迎へ、尼をも伴うて京に歸り、その次第を帝に奏聞せしかば、帝これを憐み、丹波國にて三郡を本領に副へて下し給ふ。宰相もこのことを喜びしが、北の方の罪を怒りて、これを

殺さんとせしに、のもせの姫爲に乞うてこれを救ふ。されど北の方は後に至りて自害して死す。尼のことも叡聞に達し、信濃にて所領を下し給へり。さて少將と姫とはめてたく夫婦の契を結びて榮えゆきしことを作れり。終に、これをみ、かれをきく時は、たゞ人にはなさけあれ、此ものがたりをみん人はよく、こころへわけ、たゞじひなさけをかけたまふべきなり。と結び。題號は二人の姫の清水寺に詣づる條に、二人のめのとめんく、に思ふやうは、げふのびじんくらべには、いづれかまさり、いづれかちとりたるならんと云々とあるによりたるなるべし。

著作年代詳ならず。刊本ありて奥に、萬治貳年九月吉日、石津八郎右衛門開板とあり。

毘沙門の本地

昔、天竺罽婁國のせんさい王齡傾きたまへども、御子一人もなし。ひたすらこの事を歎きて、供養をなし、善根を積み、梵王に祈り給ふに、その御告に宿世の業によ

りて子種なしとありしを、なほ丹精を擱んで、祈りしかば、佛も遂に感應ましまし、后姫宮を生みたまふ。天帝玉姫と名づけ、關白の北政所を乳母として、御寵愛限なし。さても不思議なるは大王の年九十なるが姫宮出来てより二十ばかりに若くなり、六十の後は十七八に、五十ばかりの乳母も十七八に、そのほか宮を見るものいづれも若やがざるはなし。こゝにまた並びの國に摩耶國とてありしが、その王われも皇子ひとりもなく、齡は得止めず、噂に聞く姫宮を迎へ養ひて、われも若やぎ、國をも譲らんとて、勅使を立てたまふ。されどせんさい王のいかてか最愛の姫君を放ち給ふべき、叶はぬこと、斷り給へば、摩耶國の大王大いに怒りて、さらば軍勢を向けて奪ひ取らんと仰す。この事、瞿婁國へ聞えければ、姫宮時に十三歳なりけるが、かの國は十八萬騎の國、わが國は十萬騎の國なれば、戦うて勝つべきにあらず、國の爲には何か惜ませ給ふぞとて、自ら請うて摩耶國に赴く。七日めの泊にて空を眺めぬたる所、村雲一むら引き覆ひたる中より、年十七八ばかりの直衣姿美しきが下り來て、姫宮の聲の雲の上までめてたく聞ゆれば、下れるなりとて、旅行のゆる由を聞き、吾は維曼國の主金色太子といふ者なり、

吾に契をなさば、御身を故郷へ返し、吾ひとりにて瞿婁國の軍を止めんこといと安しといふ。姫宮もにくからず、一夜の契いと深く、翌朝太子姫宮に向ひ、三年が間待ち給へ、その程過ぎば世になきものと思ひて、弔ひ給へといひて、彼方此方に別れぬ。

さても太子は金麗駒こんれいこまに打乗りて、摩耶國に赴き、内裏に至りて瞿婁國の爲にこの國の軍を防がんとて來れる由名のり、大刀たいとうといふ劔を一振ぶれば、千人の首落ち、重ねて振れば、三千の首落つ。大王恐れ敬ひ、迎へ入れて儲の君に立て給ふ。されど太子は姫宮の事のみ思ひ、千人の妃も心に合へるは一人もなく、今日明日と暮ひ暮して、はや三年になりぬ。姫宮は太子の事のみ待ち給へるに、その期になりても音づれもなければ、遂に十六歳といふに、こがれ死にうせ給ふ。太子はあゝる夜の夢に、姫宮に須彌山にて會ひたりと見て、胸うち騒ぎ、堪へ兼ねて、大王に暇を請ひ、金麗駒に跨りて三年の道を唯六日に、瞿婁國に着けば、姫宮うせて七日になりぬ。遺骸はなほ生きたるが如く、美はしきを覽ても、切なる歎はいやましぬ。また暫しまどろみたる夢に、姫宮は大梵王宮に生れたり、その黄金の筒井の許に

て會ふべしと見て、いかなる雲の上土の底なりとも尋ねてやは止むべきとて、金麗駒に跨りて霞の鞭をあげ、西に向ひて空に上り、何處ともなく夜盡數十年の旅にぞ出て立ちたる。

行きく／＼て僧形、公卿などの形したるさま／＼の者に途を尋ね。第一に孝養菩薩（即ち長庚星）次には彥星（この次に女體の人に途を聞く、その人は柳機なるべしといへども、脱文ありて詳ならず。）それより七曜の星、明星、星虛空藏菩薩、月光菩薩（本地勢至菩薩、日光菩薩、本地觀世音等に尋ねく／＼て、果は地藏菩薩の教を受け、三途の川とおぼしきを渡り、奪衣婆とおぼしきを過ぎ、憍慢地獄及び八萬地獄の始にて、惡魔が美女の姿してさし招くをも教に任せて見返らず。遂に黄金の門を入り、赤梅檀の樹の下に黄金の筒井あるを見て、その樹に登りて待つに、姫宮とおぼしきが黄金の花籠に黄金の花を摘み、井の水にすゝがんとて出て來り、互に井に映る顔を見合せて、不思議なる對面ぞと涙せきあへず。此國は有漏の身の來らるゝ所にもあらぬに如何して尋ね給へるぞと、姫宮は太子の深き志を喜び給ふ。さてこの由大梵王に申し給へるに、王もこれを憐み、太子をして筒井の水に

身を襖がせ、天の羽衣着させて、御對顔あり。かくて太子は福德山を賜はりて毘沙門天王と顯れ、姫宮は吉祥天女と顯れて絶えぬ契を結び、一切衆生に福德を授け給ふ。瞿婁國摩耶國の帝后等もそれ／＼菩薩諸天と顯れ給ふと説き、終に、是を見ん人々は皆三寶をうやまひ、父母に心ざしを盡し、君に仕へん者は忠節を爲し、我より下の者には慈悲を爲し、情なき事をふるまふべからず、殊に慈悲ありて、この毘沙門を信ぜん人は、現世にては福德をなし、後の世にては必々佛道に生まれつかふべし。何んぞ世の中の仇なるに報はんや。この冊子見終らん人は、毘沙門の眞言におんへいしらまんやそわかと、三返南無吉祥天女と唱へ給ふべし。とて局を結び。

室町時代の物なるべし。新編の伽草子上卷に收む。その奥書に、語りものにせる同名の古刊本あり、末に通あぶら町ふちた新板と記して年號なし、それには全編を六段に分ちて挿繪したり、主意はすべて同じけれど、文句は頗異なり、けだしこの本を種として謠ひものに作れるものなるべし。とあり。萩野氏の解題の中に、この草子の趣は佛經を種として、小説に作れるものなるべけれども、其出典

は知らず。祖庭事苑に、贊寧が僧史を引きて、唐の天寶元年西蕃の五國安西に來寇せし時、玄宗不空三藏に詔して、仁王護國陀羅尼を持咒せしめしに、毘沙門天王第二の子獨健形を現じ、神人五百員ばかり、金甲を被て安西を救ひ、蕃寇を討ち退けし事を記せり。これなどやこの本據ならんか。なほ佛者に問ふべし。」といへり。本書最も力を盡して寫せるは金色太子が大梵王宮に向ふ旅中の記事にして、西遊記などを學びたるにや黄金の筒井の許にての對面は彦火々出見尊が海宮を尋ねし神代の傳説に出でたることしるし。なほ事がらの王昭君の故事、長恨歌などに似たる所もあり。さまざまよせ集めて綴れるものなるべし。

秀衡入

寫一卷

牛若奥州下りの途、駿河國吹上濱にありて病氣にかゝりしが、平癒の後この地を發足す。その武藏國にてよめる歌一首、

武藏野は行けども秋のはてもなし、

いかなる風の末に吹くらん。

都を立ちしより七十五日にして平泉に着く、當時秀衡の威勢盛んにして、方八町の第を構へ、殿舎棟を列べ、壯麗目を驚かし、七千の大名伺候す。特に居館を華麗に飾りて、或は牛若きたらんかと待つ。牛若番衆を試みんと欲し、卒爾門を過ぎ、居館に入りて座を占む。近習外様のもの怒つてこれを引きおろしうち懲さんとす。當日の奉行あさのう悟る所ありてこれを止め、走りて秀衡に告ぐ。秀衡その風牟を聞き、さては牛若なりと知り、昔平治元年一月奥州五十四郡の調を齎して都に上りし時、たまく牛若生る、その父義朝鎌田兵衛を使として、誕生の兒を賜はるべし、よくば主と仰げ、悪くば子とせよとの旨を傳へしむること七度に及ぶ。吾喜びて牛若の名を命じ、祝意を表して、名馬、弓箭、甲冑等を贈れり。義朝これを喜び、越後七郡、佐渡三郡、出羽三郡、奥州五十四郡、合せて七十六郡を賜ふ、今わが土御門の御所様と仰がれて榮耀を極むるは、偏にこの若君のためなりとて、出て、階下に拜伏す。一座の大小名狼狽して牛若を尊崇すること甚だし。牛若秀衡に平氏追討のことを託す、秀衡快くこれを諾し、牛若を款待すること神に事ふるが如し。奥州のものこれを聞いて、皆牛若に拜謁せんとて、來つて勤仕

せり。牛若ひとり金賣吉次の來らざるを見て、これを招かしむ。吉次は上洛の折鞍馬の少年きやうとう太といふ者に逢ひ、馬追に使ひて東下せしが、この少年こそ牛若なれと聞き、必定虐待の報として吾を殺さんとするならんと察し、泣いて母に暇乞して來る。牛若吉次を責めて、情は人のためならずといふに、汝無情にも鏡の宿にては四十二匹の馬に水かはすとて吾を鞭ち、青墓の宿にては長者の前にて酌を取り損ぜしとて辱を與へ、また吹上濱にてはわが病に惱むを棄て去れり。辯解あらばいへ、聽かんといふ。秀衡側に侍して、始めて牛若の吉次が奴隸となりて下りしことを知り、吉次の無情を怒りて、薙刀追つ執つてこれを打たんとす。牛若制して、さりながらわがこゝに下ることを得たるはまた吉次の力によること多しとて、盃を賜ひ、一戸の傍八百町の地を賜ふ。吉次拵舞措く所を知らず、目出たく所知入をなせりといふに終る。

藤井乙男氏の藏本による。事柄は十二段の草子の後を受けたるものなり。

一本菊

村上天皇の御時、京三條高倉に右大臣の子に一男一女ありて、男の子は早く殿上して兵衛佐となる。二子の母早く死して、右大臣更に帝の乳母なる播磨三位を迎へて北の方とし、また一男一女をまうく。その男の子も早く殿上して四位少將となり、女の子も宮中に仕へて帥局と呼ばれる。先妻腹の子はとかく疎んぜらるゝさまにて、殊に右大臣薨去の後は四位少將その家を嗣ぎけり。ある年、帝の皇子兵部卿宮菊の宴を催されし時、ある人兵衛佐の家に美しき一本菊あるよしを申しければ、これを召さる。兵衛佐は父右大臣が鞍馬より求められしを、妹の姫が培養せるよしを申し、これより宮この姫を慕ひて、終にそのもとに通はる。繼母播磨三位これを聞きて、帝百歳の後には、兵部卿宮必ず皇位を踐ませたまはん、さらばかの姫も后に昇らんこと必定なりと猜みて、竊にこれを失はんと計り、まづその兄兵衛佐より失はんと、その機を待ちけり。然るにかの四位少將は兵衛佐とは異にして、無藝無才なるに、唯帝の乳母の子なるを恃みて、擅なることのみ多かりしかば、殿上人たち甚だこれを憎みて、五節の夜、殿上にて鬪討をしけり。母播磨三位これを兵衛佐の所爲なりと、讒奏しければ、帝逆鱗ありて、兵

衛佐を鬼界島に流さる。その後播磨三位繼子の姫をたばかりて、四條邊のさる家に幽屏し、兵部卿宮には姫出奔して行方知れずと申しけり。兵衛佐はかねて宮仕せし京極大納言の娘侍従内侍と契りけるが、兵衛佐遠流ののち、内侍は深く思ひ焦れけるに、播磨三位引きかへこれを四位少將のために娶らんことを帝に乞ふ。内侍これを聞きて宮を退き、乳母のもとに至りぬけるに、偶、縣召の除目ありて、乳母の父豊後守が薩摩守となりしより、内侍乳母と共に終に薩摩に下りて、兵衛佐に再會す。さてまた姫は四條に幽屏せられぬるに、その家に播磨の目代來りてこれを慕ひ、姫は其ために苦しめらる。姫の乳母權少將清水觀音を祈念しけるに、折よく兵部卿宮姫のことを祈るとて長谷の觀音に參詣したる歸途、圖らず此處を過ぎて、姫を救ひ出して妃となし、やがて若宮誕生せらる。次て父の帝崩御したまひしかば、兵部卿宮統を承けて踐祚あらせられ、かの姫皇后に立ちたまふ。かくて兵衛佐、内侍は召し還され、播磨三位、四位少將、帥局は罰せられて都の外に放たる。兵衛佐は三位中將に叙せられ、厩遷して關白となり、内侍は北政所とあがめられ、帝には皇子皇女數多誕生あらせられ、關白にも子孫多くめ

てたく榮ゆる物語なり。末に長谷清水兩觀音の利生を説きて終を結べり。刊本の奥書に、萬治三庚子皁月吉辰、二條寺町西田勝兵衛尉開板とあり。

兵部卿物語

一卷

當帝の二宮に兵部卿とまうす宮ありけり。數多の皇子の中にも當帝、皇后ともにわけて寵愛したまひ、儲嗣にもとほぼせど、世のきこえを憚りて、一宮を東宮とし、この宮を次の坊がねとす。宮今出川の邊に御所をしつらひ、禁中にては梅壺を御曹司とす。姿美はしく、才賢ければ、大臣を始め娘もちたる人々は東宮をさしおきて、この宮をこそ婿にはと思へど、宮は帝の御弟故式部卿宮の遺子の宮中に養はれて共に育ちたるに心をよせ、成らぬ戀に悶ふるまゝ、心を止むる人もなく、はては出家せんとまで思ひたち給ひぬ。まぎらはしに、年の暮に、北山の法師の許を訪ひ、その歸るさ、西の京にて筆ひく家を窺ひて、あてやかなる女を見そめ、腹心の藏人丞をしてその女の事を問はしめけるに、大膳亮とて田舎わたらひする者の夫婦の家なりとは知られたれど、かしづく娘のありやなしやは知られず。

まことやこの女は按察大納言の娘なりしが、早く父母を失ひ、乳母に養はれけるが、乳母の夫の田舎へ行きける程、人の家を借りて棲みけるなり。宮は戀しさ忘れ難く、かゝる下様のものを戀ひんはと返すべしと返せど、慕る思は絆ぐに由なく、某の中將と稱して、歌を贈り、文を通はしたまへど、答もせず。明くる年の春になりて、しげく通ひたまひしかば、女も心折れて馴れ親しむに至りぬ。卯月末つ方齋院御服の事ありてありたまへば、かの式部卿宮の姫君代りて立ちたまへり。かくてはいよいよ縁も切れぬと、宮は口惜しく、憂に沈みておはす。帝后も心を惱ましたまひ、右大臣に仰下してその女を納れしめ、また宮にもその旨をいひ含めたまふに、宮は如何なる吉祥天女なりとも、わが心を曳くべからずとて、事によせて辭したまへど、遂に定まりぬ。右大臣は帝の仰の忝さを喜びつゝ、用意疎かならず。

西の京には、某の中將といふ人の久しく通ひたまはぬを案じくらし、乳母は心いらだち怨みけるが、世の噂に、右大臣の姫君の二宮へ上りたまふにつきて、その女房として美しき女をつのらると聞きて、徒らに通ひも來ぬ人を待ちたまふこそ

かひなけれ、わが存生中はともかくもして見たてまつるべけれど、老先短き身なれば、早く行末の心構なくてはとて、頻に宮仕をすゝむ。姫君は内氣の人なれば、大勢の中に入ることも好もしからぬど、これを否まばかの中將に未練ありと思はれんかとして、はかくしくも答へず。乳母は主のことに心をなやまし、六月ばかりより病に臥して日にく重りゆき、なほ宮仕をすゝめて、終に八月頃空しくなりぬ。姫君の侍女に侍従といふものもまた切にこれをすゝめければ、姫君も遂にその方に思ひ定む。

宮は婚事の近くなるまゝに、いよいよ思ひ沈みたまへるが、偶かの菴の宿を音づれたまへば、宛も明日は右大臣の家に上る日なりとて、その準備中なり。宮は情なかりし懈怠をいひわけして、さまゝに慰め給ふ。姫君は御心の程も明かならぬ人に宮仕の事も語りかねて、ひとり物思に悩む。次の日は御前に御遊ありてゆきがたき由宮より御使あり、御使のゆき過ぎぬる程に、姫君は出てたちて右大臣の姫君のもとに参る、名を按察君といひて、右大臣の北の方も、姫君もなつかしうめしまつはしたまふ。二宮はそのあくる日かの姫君のもとに至りたまへ

るに、門さして人音もせず、宿もる人に聞けども、行方も知らず、わが心の懈怠にか
かる過をしてけることを悔み歎きたまふこと限なし。

八月二十日、右大臣の姫君は二宮にまゐりたまひ、日経るほどに宮は心移るとは
なけれど、おのづから慰む折もあり。按察君はほのかに宮を見奉るにさだかに
わが方に通ひし某の中將といへる人なり、侍従もそれと氣づきて、見つけられな
ばいかゞせんなど憂ひ語らふ。宮もいつしかそれと知りて、人に隠れて忍びよ
りたまふこともあり。かくては人めも苦しきを密かに盗み出して心安きとこ
ろに置かんなど勧めたまへど、按察君はさありても遂には隠れ果つまじく、心を
合せて主を欺きたりと、姫君の思ひ給はんも後ろぐらく、末遂ぐまじき縁なりと
思ひなして、嵯峨に父大納言の領せし土地の里人の昔忘れず折々訪ひくる夫婦
を語らひ、遁れ出て、その地に隠れ、御髪おろして侍従と淋しく世をすごす。

宮は思ひ人を失ひて、姫君の許に入り給ふことも稀に、つくづくと眺めぐらした
まひしが、嵯峨に若く美しき尼の住めりと聞き、もしやそれかと、長月二十日あま
りの程小倉の紅葉見にかこつけていて立ちたまふ。さてその庵に立ちよりて

見たまへば、由あるさまに住みなしたり。按察君の尼はそれと知りて、侍従君と

ともに簀の子の下に隠る。宮は庵のうち見廻りたまへど、その人はあらず、脇息
のあたりに數珠に添ひて扇の移り香なつかしさに、

月のみはむかしながらの秋なれど、

やどれる袖のいろぞかはれる。

宮はその側に、

雲のうへの月もなみだにくもりつゝ、

ありしながらの影だにもなし。

とかきて願みがちに歸り給ふ。その後も藏人して度々御文贈りたまふが煩は
しく、またもおはしましなばいかゞせんと思ひなして、尼は梅の尾に移り、行ひす
まして居たりけりとぞ。

續々群書類従歌文部に收めて近頃刊行せられたり。黒川氏藏本岸本由豆流本
を採收せるなりとその例言にいへり。終の缺けたるやうながら、源氏物語など
の結末に倣ひたるものにして、これにて完本なるべし。黒川春村曰く、按に此物

がたりは頗作意見えて古物語めきたる物にはあれど、をりくつたなき詞どももまじり、かつ色葉、風葉、無名草子等にも見えねば、室町の中頃などに作れりし物なるべし。……大ひねはかの孝標朝臣の女のよはの寢覺の作意をとりてつくりかへし物なるべし。古物語類字抄されど色葉集等に見えずとて室町時代とあしあつるもいかど、頗る古風のものなれば、なほ十分に考ふべし。

〔ふ〕

笛の巻

一本

牛若鞍馬寺の東光房にありて、學問を究め、書道の奥を探る。常磐兒ちびの遊びは管絃に過ぎたるはなし、中にも笛はいみじきものなればとて、淀の津のみた次郎がもとより笛を一番とりよせて、鞍馬に送る。牛若喜びて、如月の半ばきさらぎごろより吹き始めて、神無月の末には百二十調子の樂を悉く吹き究む。されど持ちたる笛の威徳を聞かざれば、樂しからずとて、また次郎を召してこれを問ふに、また次郎笛の由來を次の如く語る。抑、弘法大師入唐の序に、天竺てんじくりやうじゆじゆせんせんには

する文殊菩薩を拜せんとて天竺にわたり、その歸るさ、葱嶺の瀧の岸邊に三本の竹生ひたるを見、劍を抜きて末の節を三ふしこめて切り、契あらば日本にて廻りあへとて、流砂川に流したまひけり。かくてめてたく歸朝の後、舊里讃岐國屏風浦に立寄りて、父母の墓を拜し、磯邊を通りしに、かの竹流れ寄りたり。さても契はありけりとて、拾ひ上げ、笈の足に結びつけて都に上りたまふ。大師この竹を以て、大水龍、小水龍、青葉の笛の三管を作る、中にも青葉の笛といふは、竹は汐にて枯れたれど、節に青葉一枚つきたり。この三管を内裡に藏められしに、狭衣中將吉野に花見のをり、青葉の笛を申しうけて、萬秋樂を吹きしに、天人聽聞して五衰の苦を免れ、菩薩となりて舞ひ遊べりといふ。後中將淀の津に逃れて住居し、この笛をみた次郎が祖父また太郎に授く、これよりその家に藏すること三代にして、かくわが手に傳はる。この笛を持てば、佛神の加護にあづかり、災厄を禳ふべしとこそ語りけれ。牛若喜びて、繰返し語らしむること三度に及び、なほ他かずや草子に記して、笛の巻と題す、今この巻鞍馬に傳はれりといふ。

幸若舞草子三十六番の一なり。青葉の笛の由來は本書に載せたる青葉の笛の

物語に見ゆる所と異なり。この笛については、十訓抄に、笛の最物は青葉葉二、大水龍、小水龍、頭焼、雲大丸これ等なり、名によりて各、由緒ありといへども、長ければ略す。」とあり。葉二と青葉とは別の物なるが如く見ゆれど、同書に京極師實の時既に葉二の赤葉落ちて青葉のみ残れる由見ゆれば、これを青葉といひしか。江談抄に、名物笛事、大水龍、小水龍、青竹葉二とあり、青竹は青葉のことならんには、全く別物なり。されど拾芥抄中に葉二江談曰、朱雀門、鬼、又號青葉、歟。とあるを見れば、同物なるが如し。古事談六に水龍唐土笛也。」とあり。

福富草紙

一名福富長者物語

昔福富織部といふもの放屁を以て一藝とし、貴族たちよりこれを召して興ぜしかば、その家次第に富み榮えけり。然るにその隣に乏少ほうせうの藤太といふものありて、家極めて貧しく、朝夕の煙もたちかぬ程なりしが、その妻藤太にすゝめ、織部のもとに至りて、かの一藝を習ひ受けしむ。織部その藝ありとて丸薬二粒を授く、藤太家に歸り、これを服して直に今出川中將の館に伺候す。中將かの藝をな

さしめんとせしに、藤太過ちて糞をひり出しければ、隨身ども怒りて藤太を打ちふせ、追ひ出しけり。藤太の妻はそれとも知らず、夫が仕合して歸るならんと、門に立ちて待ちこがれぬたるに、二町ばかりあなたに藤太の姿見えて、赤き小袖着てくるにぞ、さてこそかつけ物とひた喜びに喜ぶ。やがて藤太歸り來れば、赤き小袖と見しは血に染みたるにて、くさき臭近よるべくもあらず。妻怒りて織部に欺かれたるなりと思ひ怨み、川邊に出て、咒詛し、織部の外に出てけるを待ちかけて、これに噛みつくといふ物語なり。

普通流傳の本は一卷にして、大要右の如し、こは繪卷をつゞめたるものにして、繪卷は二卷あり。古物語類字抄卷下に、福富草紙、こは高向秀武といふ者かひし、秀武しゆぶといふに、見ゆ、何師年なんし老貧しかりしに、妻のすゝめに隨ひて道祖神を祈りたりしに、小柑子こかんじ許なる鐵鈴を賜はると、靈夢の告を蒙りぬ。さて其妻の合せて云、身のうちより聲の出て、夫によりて幸ひを得むといへり。然るにをかしく、尻しんひる事を習ひて、何某の中將殿に召れ、綾錦黄金等を賜はり、いみじき福人となり榮えぬ。是こゝまで、是こゝなり、さて此隣に七條の坊長福富といふあり、これはた貧しかりければ、其妻

となりをいたく羨み、男にすゝめて秀武が弟子とし習はせて、いだしやりしに、此福富は尿まりちらし、打懲されて歸りこしかば、其妻いたく恨み怒りて、秀武を責さいなむよしをかけり。是をなて下文體はいとしどけなくみゆれど、四五百年前の筆づかひとぞおぼゆる。但此粉本をみるに、下巻の繪やうは凡ならず、上巻は頗劣れり。されば原本は下巻のみにて、上巻は後人の蛇足なめりとかたぶさいふ人あなりときけども、全文まさしく一具したれば、もとより上下の二巻なりしを、はやく上巻は逸して次々に寫し僻めたりしにも有べし。もしさやうにもやと推量らるゝ由は、江戸本所の里正關岡長兵衛、新吉原町玉屋山三郎等の所藏に、もし原本にやとおぼしき程の繪卷あれど、何れも下巻のみにて上巻なし。是等によりて上巻は後人の書添けむといふ説も起れるにやあらむ、おぼつかなし。又傳へ聞く、此繪卷は土佐彈正忠廣周筆といふ説あり、廣周は寛正頃の人なれど、文體の古雅なる事、今百餘年も古げにおもはる、こはもし古卷の下の卷のみを廣周が寫せるにはあらぬか。又平安妙心寺の藏に上下二卷ありて、光信筆といへり。光信は文明後の人なれば、これはた古卷を寫けむ事疑ひなし。とにもかく

にも原本二卷は南北朝の時代などに出來けむものなるべし。又按ふに尾州家御藏板の祓とんとといふ繪卷は、もし此福富の上巻にはあらじか、名目のさますこし由ありげにきこゆ、されど其繪を目撃せしにあらねば、うけばりていふにはあらず。」とあり。妙心寺の藏といへるは、今尙同寺塔頭春浦庵に傳はりて國寶たり、土佐光起の鑑定には伊豫守隆成筆といへり、隆成は觀應中の人なりと稱す、倭錦には畫光信、詞雅俊卿なりとせり。古川躬行曰く、本所緑町の坊長關岡が本は竊にして、畫力も何も娼家山三郎が卷よりいたくおとりたり。此兩卷は乙卯の震火にあひて烟となりぬとか。また近頃長井十足一卷を得たり、もと冷泉三郎爲恭がもたりしを、壬戌のとし爲恭事ありて後購ひとれる也。書畫ともに不凡にして、卷のけ高く、裝潢金銀をちりばめ、一原本なる事いちじるし、是もまた下肩なり。此三本詞は少異同あり。考古この繪卷の一部は國華三號、九十六號及び繪畫叢誌等に載せたり。嬉遊笑覽卷九に、花咲せ爺……物羨みしてからきめに逢へる福富の翁が繪詞にも似たり。」とあり。新編御伽草子上卷に收めて刊行せり。

福富長者物語福富草紙を見よ

富士の人穴草子

刊一卷

正治元年四月三日、源頼家和田平太をして富士の人穴を探らしむ。平太三日を期し、六人を従へて出てたち、人穴の中に入りしが、魔風のために吹き出されて逃れ歸る。頼家更に賞をかけてその任に當らんものを求めしに、仁田四郎忠つなこれに應じ、工藤左衛門尉すけもりを従へ、松火三十もたせ、七日を期して赴く。かくて穴の中に入り、菩薩の導によりて、地獄極樂のさまを見、因果應報の理を教へらる。菩薩別に臨みて、地獄極樂のさまを冊子にかきて與へ、汝三十一歳に至りて、伊豆の山にて人に見すべし、それまでは語るることなかれ、若しこれに背かんには、汝はもとより頼家の命をもとるべしとて、七日目に日本の地に歸さる。忠つな頼家に謁せしに、頼家強ひて穴の中の模様を聴かんとす。忠つな止むを得ずして語りしが、言未だ畢らざるに、天に聲ありてこれを責め、忠つなも頼家も共に即日命を失へりといふ物語なり。終に、此さうしをさく人は、ふじのごんげん

に一度参りたるにあたるなり、よくくこゝろをかけて、後こしやうをねがふべし、すこしもうたがひあれば、大菩薩ぼさつの御御ばつをかうむるなり、いかにもごしやう一大事なりとちもふべし、御南無ふじ、なむ大権ごんげんと、八へんとなへべし。とあり、全體地獄極樂のさまを説くを主眼とするが如し。廣益俗説辨卷十三には仁田忠常が野猪をとむる説は吾妻鏡建久四年五月廿七日の工藤莊司景光の事により、人穴の説は同書に建仁三年六月一日和田平太が伊豆伊東崎の大洞に入る事と同三日忠常が富士の人穴に入れるととを合せたるものなる由をいへり。但しこの書には野猪のことなし。又俗説辨殘編四十二に談苑の韶州岑水塲の銅穴の話を入ること似たりといへど、これは似たることとも覺えず。時慶卿記慶長十年三月七日の條に、終日物語共一覽、昨日は月光、花満、今日は三人僧、富士人穴、丹波國醫かてうの物語、一女房の法華經讀誦を或僧無益と云過により無間へ落ると、自讃歌註等なり。とあり。刊本の終には、寛永四年吉日とあり、刊行の年月なり。歴世女装考卷二に、富士人穴草子東山殿比のち伽ざうし寛永九年版全二冊とあり、別本か如何。大槻文彦氏の藏本は、富士の人穴草子と題す。

富士の人穴草子 伏見常盤

三七五

もと柳亭種彦の藏本にして、奥書に「慶長拾貳年丁未閏四月十三日」とあり、種彦附記して云く、是書異本人穴冊子といふべし。今存する萬治四年の彫本と異なればなり。そもくこのさうしは室町家の頃の古書にて、武器の名目等の考證に便あり、繪かさひたれ、霞流しのひたれ等の名、印本になし、尤珍重すべき書なり。慶長十二年より今文政戊子年に至て二百二十有二年前の古寫なり。柳亭種彦記とあり。余が家藏の本は祖父延齡が笠亭仙果所藏の古寫本によりて校正せるものにして、異同を朱書したり。

伏見常磐

一卷

まづ常磐の素性を説きていふ、常磐は父は梅津源左衛門、母は桂宰相といひ、己は院につかへてとつこの前といふ。一年女くらべありて、容貌うつくしきもの千人を集め、千人の中より三人を選ぶ。菖蒲前、まこものまへ、今一人はとつこのまへなり。あやめ、まこもの二人は粧飾を盡し、常に衣裝を更ふるに、とつこは粉装いつも變らず、化粧を施さざれど天稟の容色秀麗なれば、常磐と名づけよと院の

仰ありて、これより名を改む。源義朝この常磐に心をかけ、下し賜はらんことを望み奉れども、許したまはず。一歳義朝紫宸殿の邊にて變化の物を仕とめけるにより、帝御感ありて、終に常磐を賜ふ。時に常磐十七歳、義朝三十一歳なり。やがて今若、乙若、牛若の三子をまうく。平治の戦起りて、義朝あへなく滅びければ、常磐は三子を忍ばせばやと、今若、乙若の手を引き、二歳なる牛若を懐にして、永曆元年正月十七日の夜、御室御所をいて立ち、清水寺に參詣して三子の運命を祈り、夜明けて轟御房にたちより、大和の方の知るべを尋ねんとて木幡にかゝる。折しも雪ふりしきるに、歩みならはぬ女の身のなほさら路もはかどらずして、日は暮れぬ。燈火の影をたよりに、辛うじて賤が庵を尋ねて、一夜の宿を乞ひけるに、主の翁義朝方の落人と覺りて許さず、せん方なければ屋陰の雪を拂ひ、小袖をぬいて席としてわが子を坐らしめ、市女笠をそばだて、風吹く方の垣となし、纒に風雪を凌ぎて稱名念佛しけるに、翁夫婦も憐を催し、家の内に呼び入れてもてなす、夫婦は常磐が身の上をそれと知れば、其ために室を設けて隠まひけるに、この邊の人に召使はるゝ下女五人、翁が家に逗まれる上臈を拜まんとて、濁酒を齎し